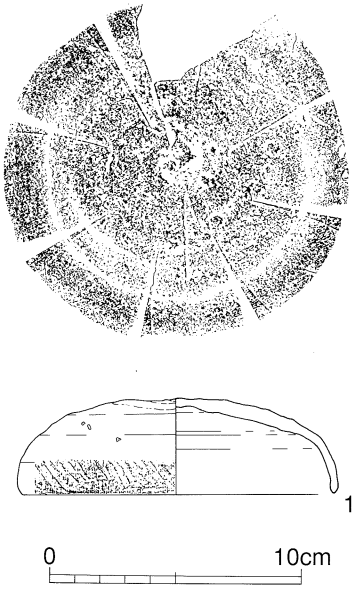
にし伏せた状況である。半個体**94-1**は３号横穴墓出土の２点の破片と接合し、ほぼ復元できたものである。当該横穴墓より高い位置にある３号横穴墓から転がり込んだもののように捉えられる。

蓋坏**1**と**3**の間から出土した金環は床面より若干浮いて立った状況である。玄室左奥から出土した刀子は床面から浮いての出土である。

出土遺物

92-1～**3**・**94-1**は須恵器蓋坏の**1**は蓋、**2**・**3**はかえりのある身である。**1**・**2**の口径は13.3cmと13.0cmでほぼ同じであるが、**3**は11.8cmと小さいものである。

93-4は金環である。表面は風化が著しく、若干の金箔が確認できる銅芯のあるものである。**93-5**は鉄製品である。断面三角形を呈しており、刀子の刃部と考えられる。



第94図　E－２・３号横穴墓
出土遺物実測図（S＝１/３）

（３）E－３号横穴墓（第85・94～99図）

E－１・２号横穴墓と並んだように検出された。特に２号横穴墓とは切り合ったような検出状況で、同一個体の坏の破片が各々から出土している。崩壊が著しく、玄室床面と奥壁、側壁が一部崩壊しながらも残存していた。床面標高15.85～16.05mを測り、開口方向はS－35°－Eである。

土層堆積状況

基本的には天井崩壊後に堆積した層である。切石を３枚並べた石床は９層を敷いて、安定させているようにもとれる。この９層中及び９層上面から遺物が出土している。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

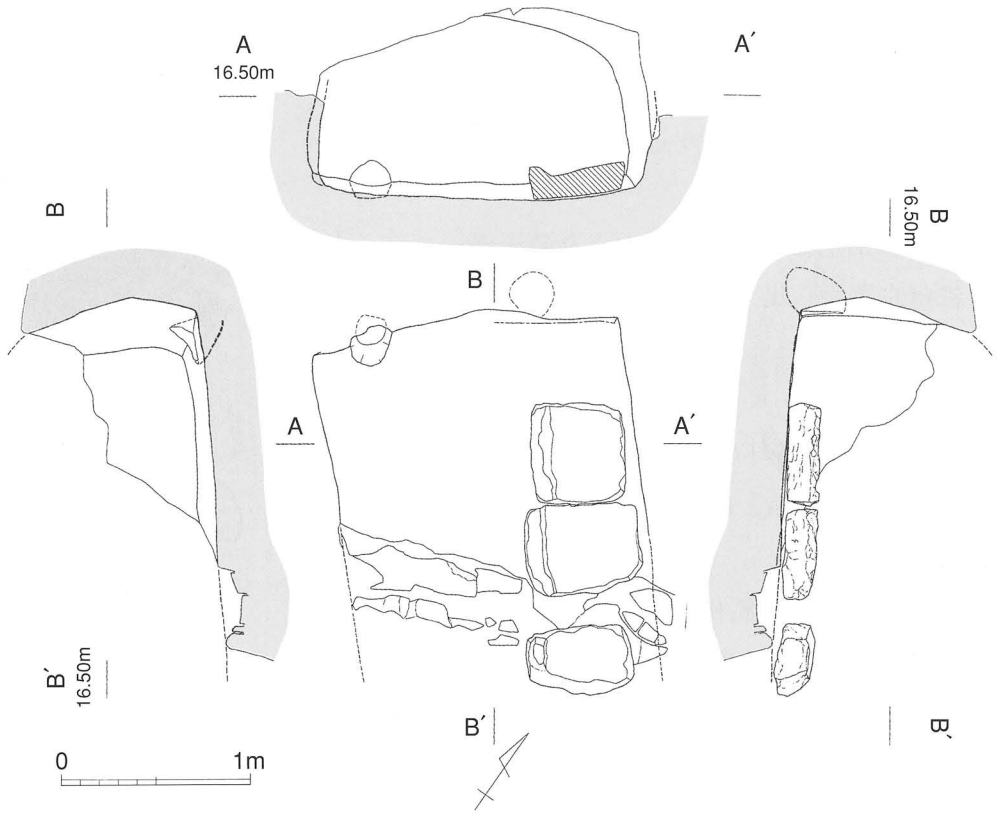
玄室は現存長200cm、奥幅164cmを測り、残存する床面から観察すると両側がほぼ平行して前方へ延びるようなので、平面形態は縦長長方形と考えられる。

奥壁は高さ90cmを測り、直立して立ち上がるが中途から内傾し、界線は明瞭で天井形態はアーチ形と考えられる。天井頂部が突出している状況が観察される。奥壁床面には左右２つの穴が穿たれている。

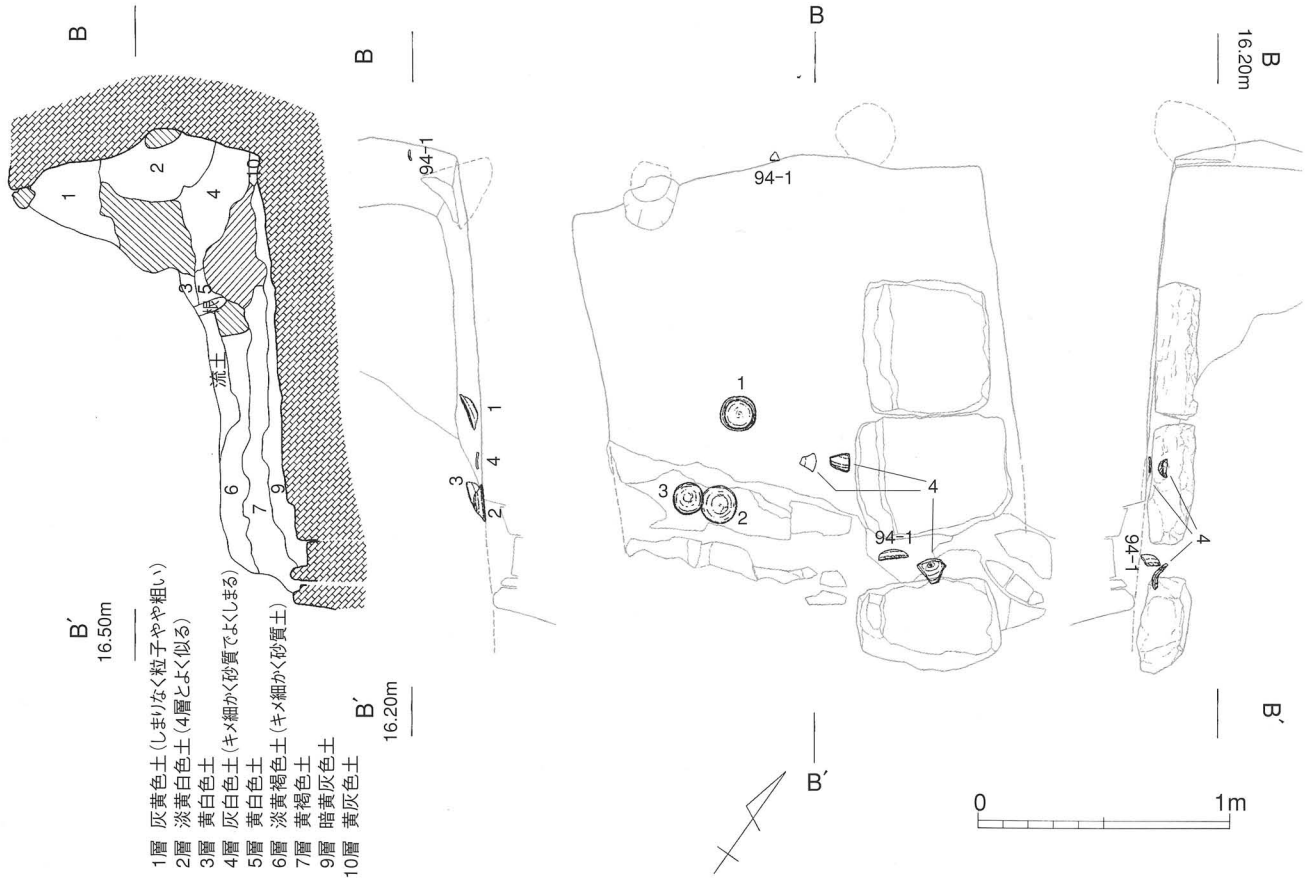
奥壁40cm手前からほぼ右側壁に沿って、復元長130cm、幅50～60cmの石床が設置されている。

加工痕

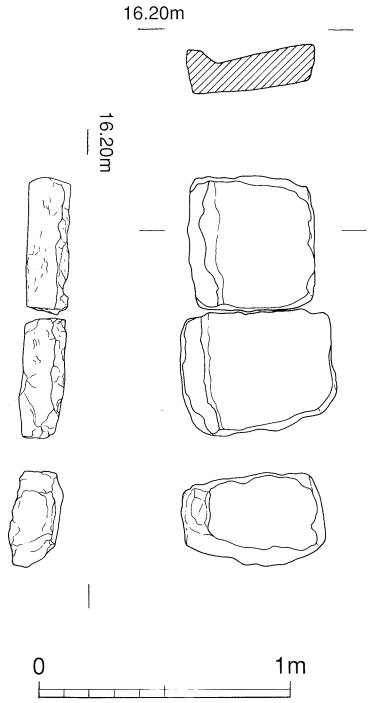
加工痕は明瞭には残っておらず、各壁とも丁寧に平滑な仕上げがなされている。



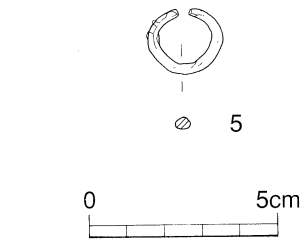
第95図　E－3号横穴墓実測図（S＝1／40）



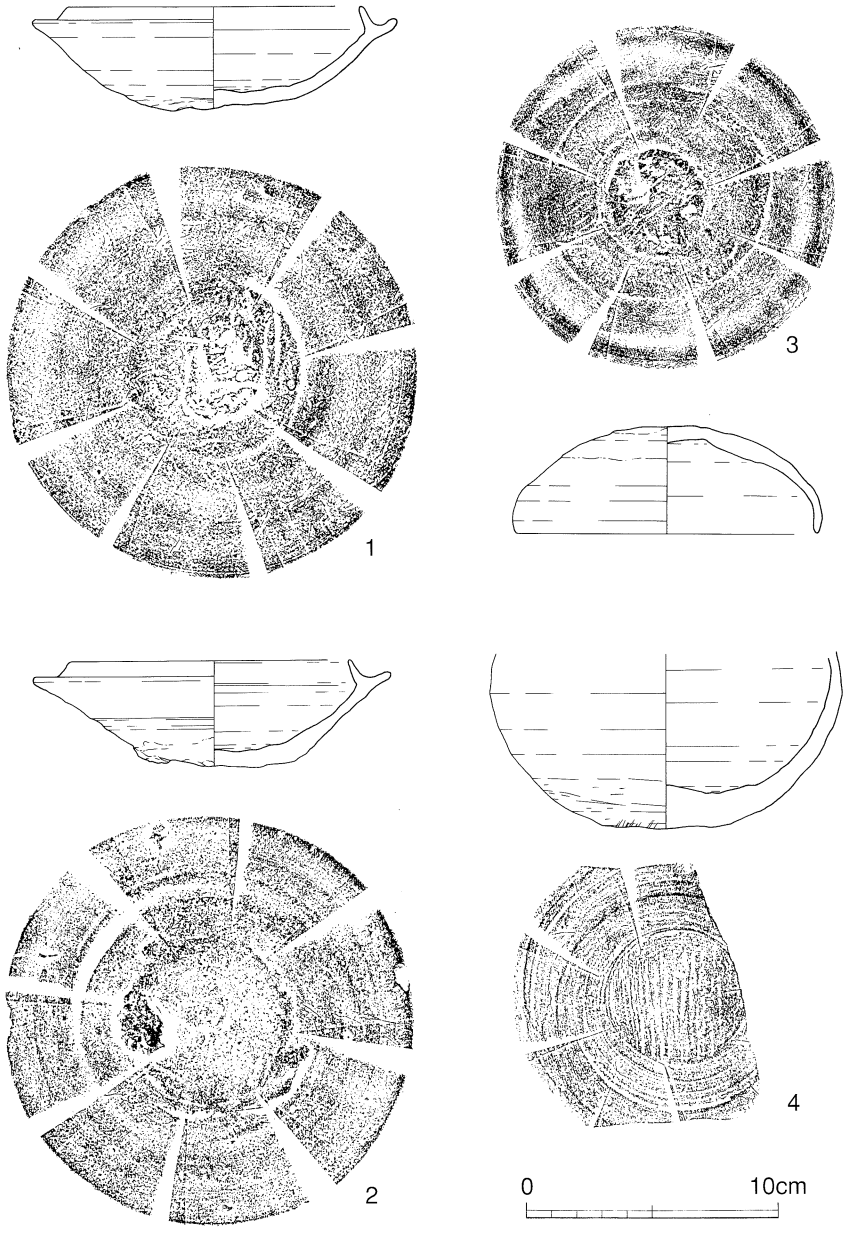
第96図　E－3号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図（S＝1／30）



第97図　E－3号横穴墓
石床実測図（S＝1／30）



第99図　E－3号横穴墓
出土遺物実測図2
（S＝1／2）



第98図　E－3号横穴墓出土遺物実測図1（S＝1／3）

石　床

石床は現状で3枚の切石からなり、断面L字状に加工し縁を作り出している。前方の石は床面の崩壊とともにずれている。奥石は長さ55cm、幅50cm、中石は長さ48cm、幅60cm、前石は長さ35cm、幅55cmを測り、床厚は12～15cmで、高さ5cm、幅5～10cmの縁を片側に作り出している。

遺物出土状況

左床面直上から須恵器蓋坏が3個体出土している。**1**は身で口縁部が上向きであるが、**2・3**は蓋と身がそれぞれ逆位で蓋は口縁部が上向きに、身は口縁部が下向きになっている。バラバラで出土した須恵器壺の底部の一部は石床がずれた時に石床と石床の間に落ちている。2号横穴墓出土のものと接

合する２点は、１点が奥壁中央から、もう１点が石床と石床の間に落ち込んで出土しており、これら２個体はかなり移動しているようである。

１点出土している耳環は、土層横断面付近の７層または９層からの出土である。

出土遺物

94-1・98-1～**4**は須恵器である。**1**～**3**・**94-1**は蓋坏の**3**と**94-1**は蓋、**1**・**2**はかえりのある身である。口径は、蓋が11.7～12.4cm、身が13.0～13.2cmと身の方が若干大きい。**94-1**は口縁部外面をヨコナデののちに平行タタキ目状の工具にて押さえている。**4**は壺の底部で、底面はケズリ調整ののち板状工具によるナデが施されているようである。

99-5は耳環である。外面は風化が著しくメッキは剥がれて不明であるが、銅芯のあるもので、長さ1.7cm、幅1.9cm、厚さ0.4cmを測り、当該横穴墓群出土中最も小さな耳環である。

（４）Ｅ－４号横穴墓（第100図）

Ｅ－３号横穴墓の南に、床面と奥壁、両側壁が一部残存するのみである。床面標高15.45～15.5mを測り、開口方向はS－19°－Eである。出土遺物は皆無である。

土層堆積状況

崩壊したあとの流土が堆積している。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長45cm、奥幅132cmを測るが、平面形態は不明である。奥壁は左側一部を残すのみで崩落しているが、界線は残存部分から明瞭であることが観察された。

加工痕

明瞭な加工痕は観察されない。

（５）Ｅ－５号横穴墓（第101図）

Ｅ－４号横穴墓の南に隣接する。床面と奥壁、両側壁が一部残存するのみである。床面標高15.45～15.5mを測り、開口方向はS－25°－Eである。出土遺物は皆無である。

土層堆積状況

崩壊したあとの流土が堆積している。

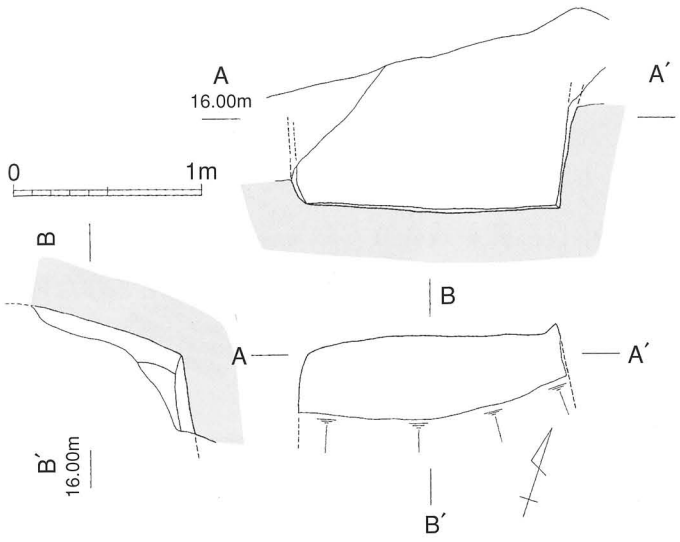
前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

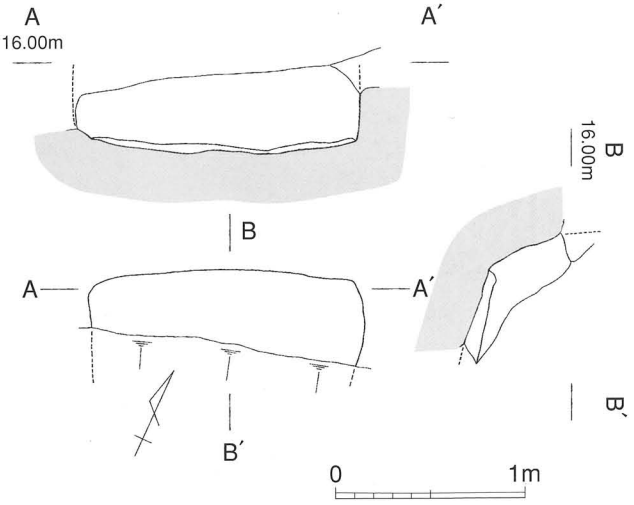
玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長40cm、奥幅139cmを測るが、平面形態は不明である。奥壁は高さは不明であるが、外に膨らむように立ち上がる。



第100図　E－4号横穴墓実測図（S＝1／40）



第101図　E－5号横穴墓実測図（S＝1／40）

加工痕

明瞭な加工痕は観察されない。

（6）E－6号横穴墓（第102～104図）

E－1～5号横穴墓列より一段下がった列、1号横穴墓と2号横穴墓間の下E群中最も低レベルに位置する。玄室天井はほとんど崩壊しているが、床面、奥壁と両側壁は割と残りがよい。床面標高13.7～13.85mを測り、開口方向はS－36°－Eである。

土層堆積状況

礫床とその直上から出土する遺物は、その出土状況から盗掘を受けていない可能性が高く、これらを覆うように堆積する層は埋葬時から堆積したものと考えられる。天井が崩壊している割には崩壊地山レキが見られないので、当該横穴墓は流入土が早くから入り込んでいたものと考えられる。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

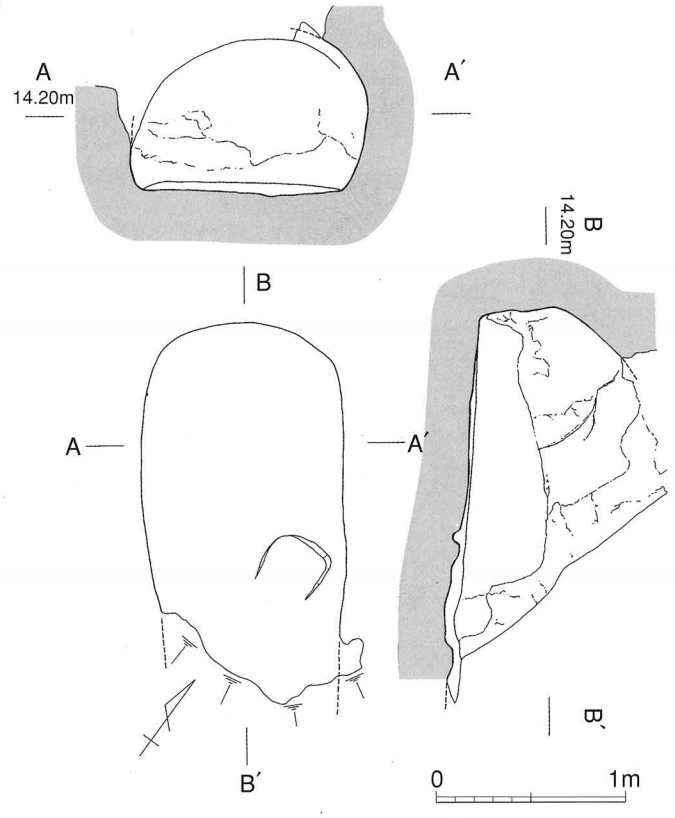
玄室は現存長202cm、奥幅95cmを測る。平面形態は、両側壁が平行に若干狭まるように前へ延びるので、奥隅が丸みを帯びた長方形を呈すると考えられる。

奥壁は高さ75cmで、直立して立ち上がり中途で屈曲し、界線は不明瞭である。横断面は横に膨らんだ半円形を呈し、天井形態はアーチ形と考えられる。

床面右前には一辺約30cmの方形を呈するピットが穿たれている。

加工痕

明瞭な加工痕は観察されない。



第102図　E－6号横穴墓実測図（S＝1／40）

礫　床

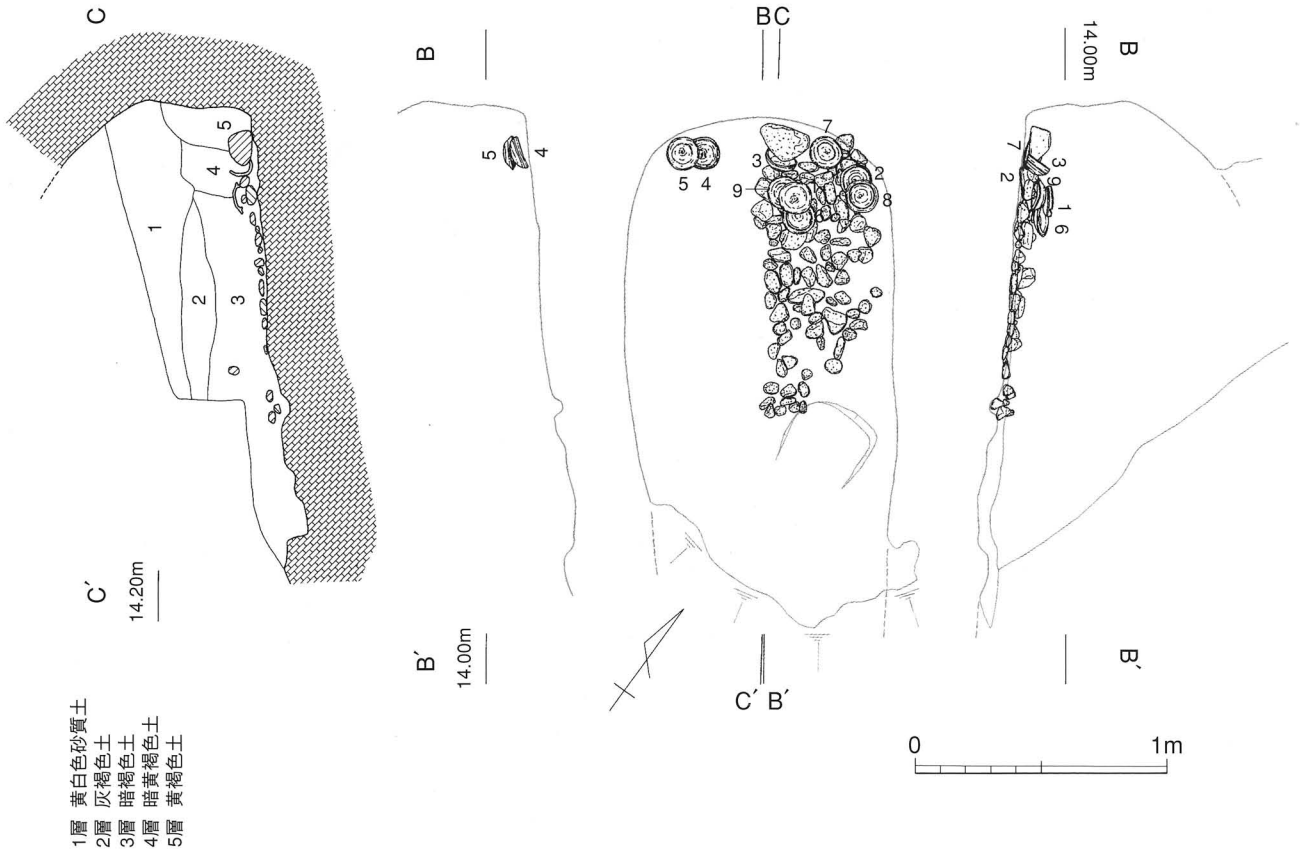
右奥床面に長さ110cm、幅50cmの範囲に5～10cm大の小さな自然礫が敷き詰められている。左奥から出土している蓋坏の下にも2個の自然礫が残存しており、全体に敷き詰められていたものが、盗掘などで掻き出された可能性も考えられる。右最奥部の一番大きな礫は、地山レキと思われる。

遺物出土状況

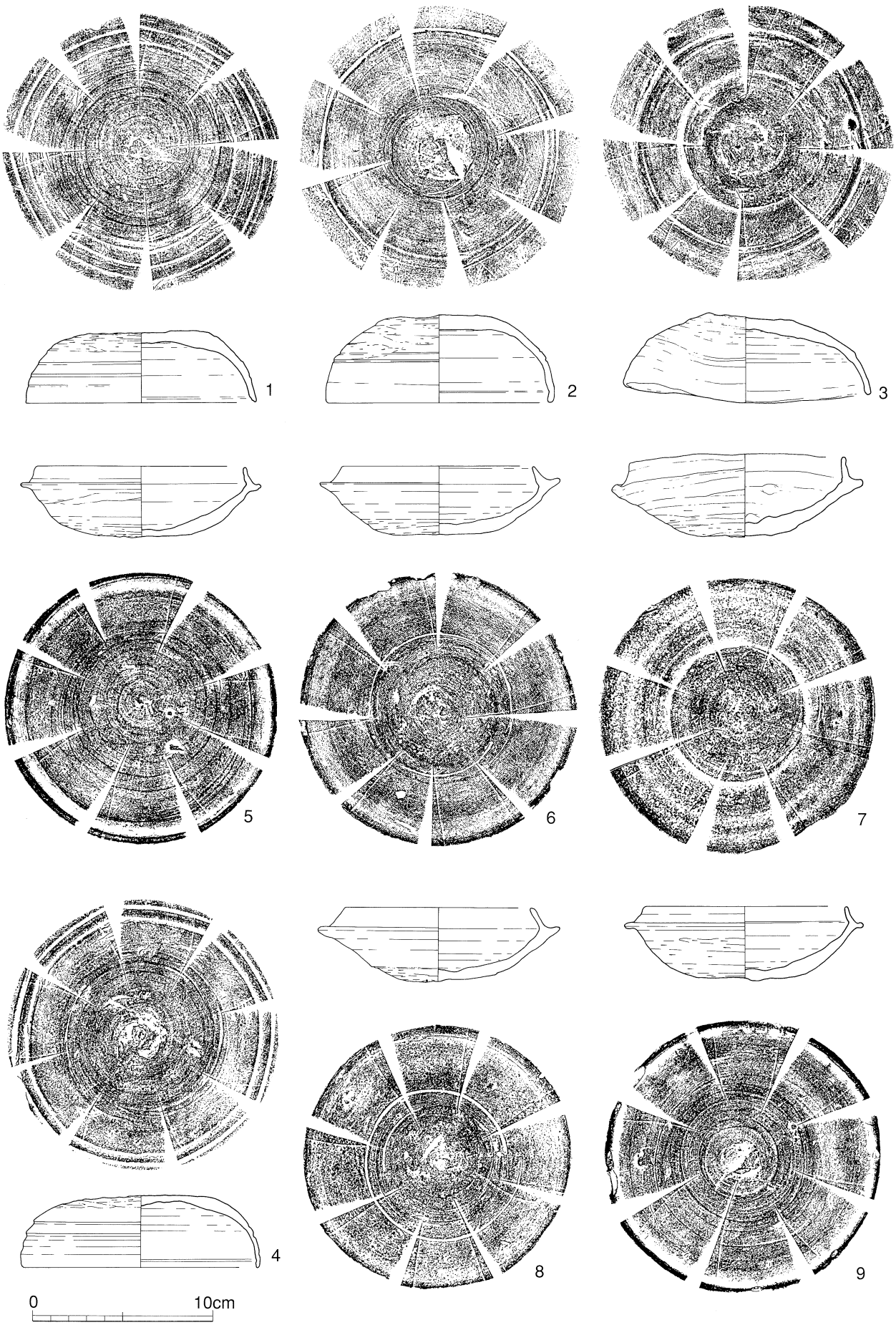
蓋坏9個体は全て礫床上からの出土である。**3**のみは一番大きな礫を挿んで立った状況であるが、他は上向きか下を向いており、1、2個体が半分重なるように出土している。

出土遺物

104-1～**9**は須恵器蓋坏の、**1**～**4**は蓋、**5**～**9**はかえりのある身である。口径が12.0～12.9cm(平均12.4cm)とほぼ同規格である。外



第103図　E－6号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図（S＝1／30）



第104図　E－6号横穴墓出土遺物実測図（S＝1／3）

面天井部と底部調整に回転ヘラケズリを行い、丁寧な調整を施している。2のように器高が4.9cmと高いものもある。

（7）E－7号横穴墓（第105・106図）

E－1～5号横穴墓列より一段下がった列、6号横穴墓の南に位置する。床面と奥壁、両側壁の一部が残存するのみである。床面標高14.5～14.62mを測り、開口方向はS－43°－Eである。

土層堆積状況

最下層の3層が腐食土で軟質であるため、ほとんど流入土と考えられる。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

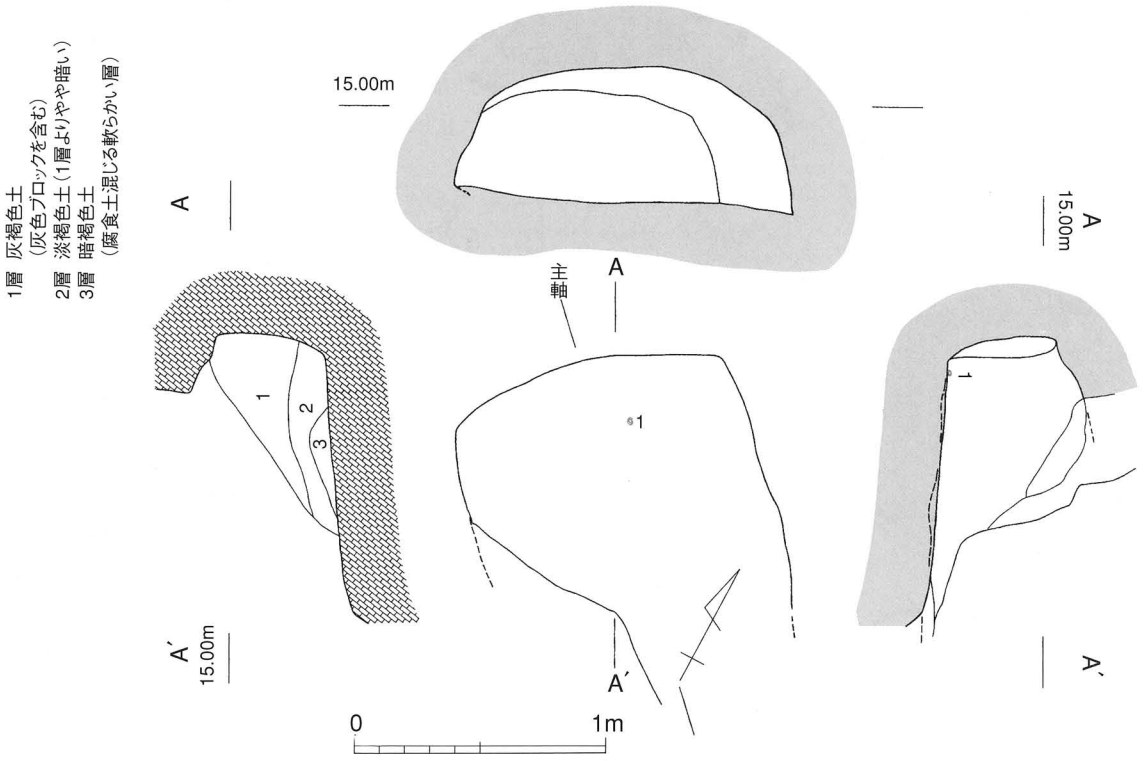
玄門は完全に崩壊している。

玄室は主軸に対して、現存長140cm、奥幅110cmを測り、平面形態は、両側壁が平行に若干狭まるように前へ延びるので、奥隅が丸みを帯びた縦長長方形を呈すると考えられる。

奥壁は高さ44cmを測り、直立して立ち上がる。界線は風化が著しいが、やや明瞭で、天井形態はアーチ形と考えられる。

加工痕

明瞭な加工痕は観察されない。



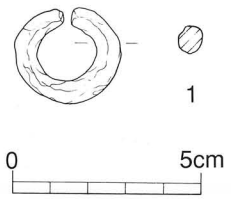
第105図　E－7号横穴墓実測図（S＝1／30）

遺物出土状況

金環と土師器破片が１点ずつ床面近くから出土している。

出土遺物

106-1は金環である。銅芯のあるもので、一部欠損しているが、内側にメッキが残存する。

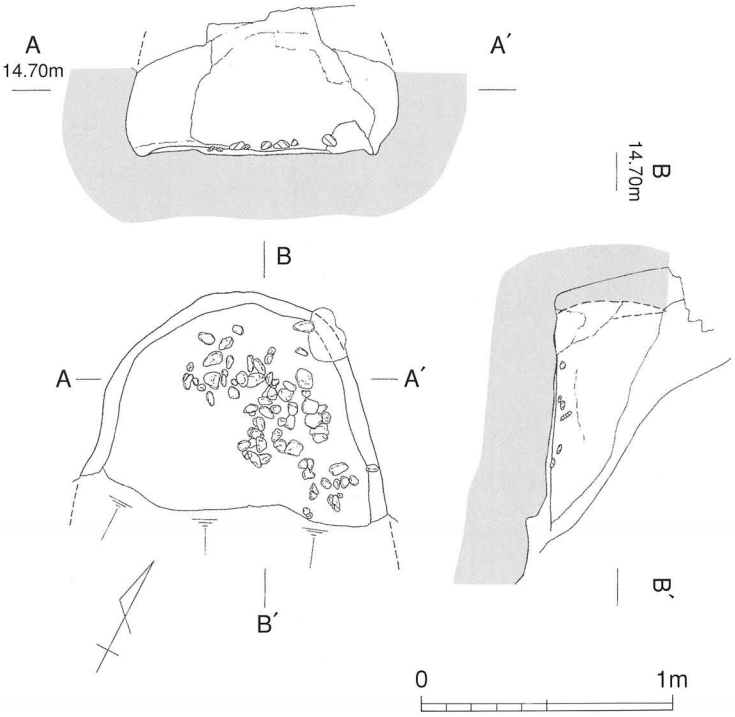


第106図　E－７号横穴墓出土遺物実測図（S＝1／2）

（８）E－８号横穴墓

（第107図）

E－１～５号横穴墓列より一段下がった列、７号横穴墓の南に位置する。床面と奥壁、両側壁の一部が残存するのみである。床面標高14.3～14.45mを測り、開口方向はS－27°－Eである。出土遺物は皆無である。



第107図　E－８号横穴墓実測図（S＝1／30）

土層堆積状況

ほとんど流入土と考えられる。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長85cm、奥幅100cmを測るが、奥壁平面ラインが突出した湾曲を描き、隅が異様に丸い縦長長方形の平面形態を呈する。

奥壁は剥落しているが、直立ぎみに立ち上がるものと考えられる。

加工痕

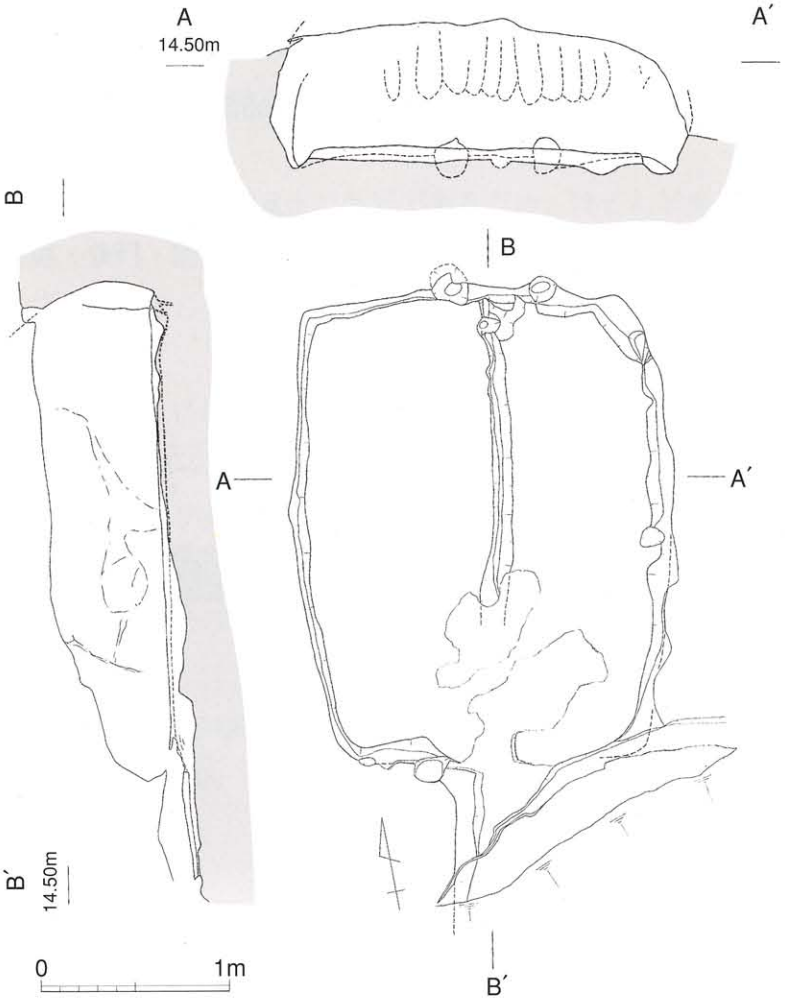
明瞭な加工痕は観察されない。

礫　床

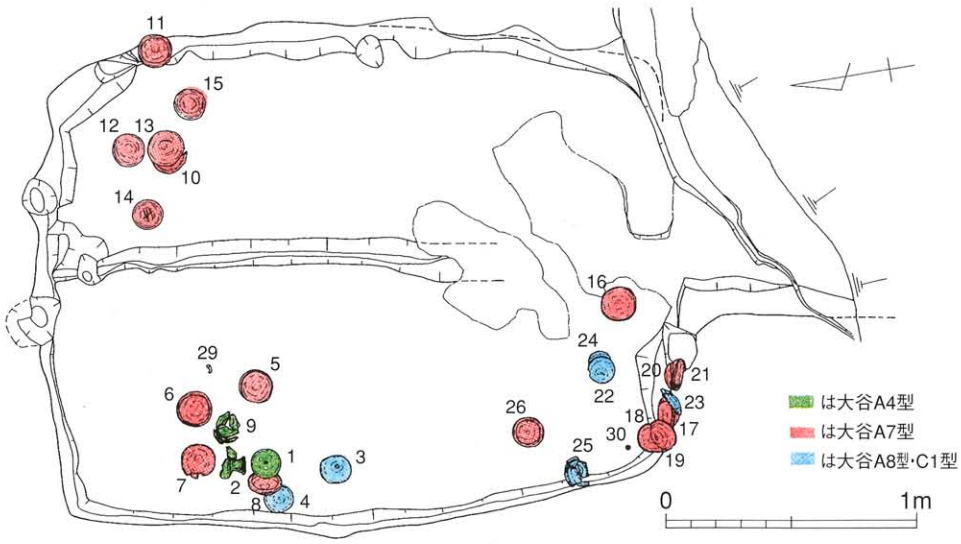
右奥床面を中心に、５cm前後の小さな自然礫が敷かれている。密集せず、疎らな出土状況である。

第６節　Ｆ群の調査

当該横穴墓群が所在する丘陵先端部が南西へ延び、その東側斜面が連続して南を向く頂部付近に所在する２基の横穴墓である。丘陵頂部の破壊削平のため天井は崩落しているが、玄室及び羨道部の一部も残存している。



第108図　Ｆ－１号横穴墓実測図（Ｓ＝１/４０）



第109図　Ｆ－１号横穴墓遺物出土状況検討図（Ｓ＝１/３０）

（１）Ｆ－１号横穴墓（第108～115図）

Ｆ－２号横穴墓と開口部が2.5m離れて、ほぼ並んで検出された。天井は全て崩落し、玄室右袖部分から前方も崩壊している。床面標高13.75～14.0mを測り、開口方向はS－10°－Eである。

土層堆積状況

基本的に天井崩落後に堆積した層である。土層断面Ｅ－Ｅ´では床面にまで地山レキ（天井部）が入っている状況が観察される。遺物が多く残っているため未盗掘の状況で崩壊し埋った可能性もあるが、明確にはできなかった。

前庭・羨門・羨道

前庭部と羨門は完全に崩壊している。

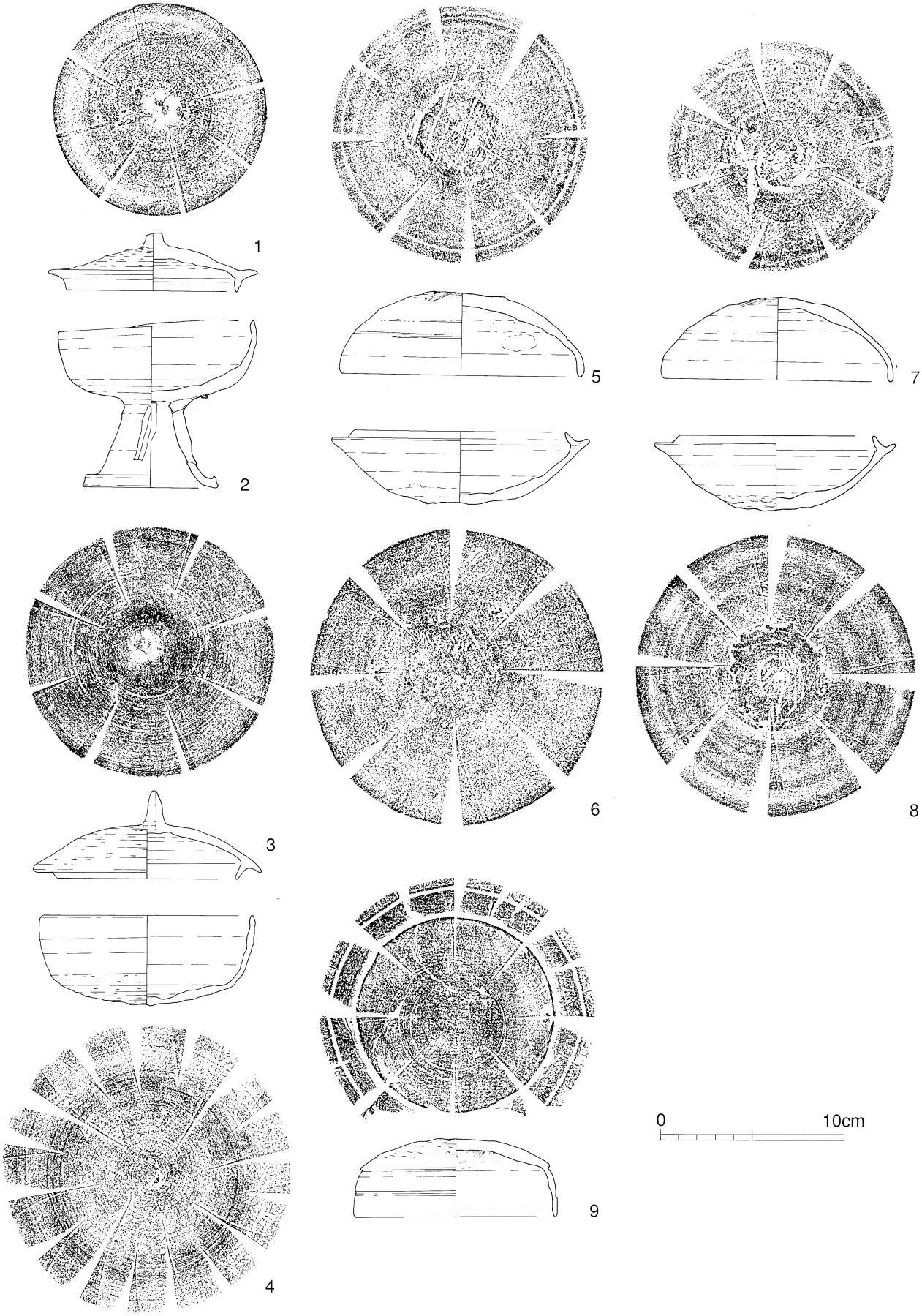
羨道部もほとんど崩壊しているが、床面左側に長さ55cmを確認できる。床面中央には溝の痕跡が残存する。

玄門・玄室

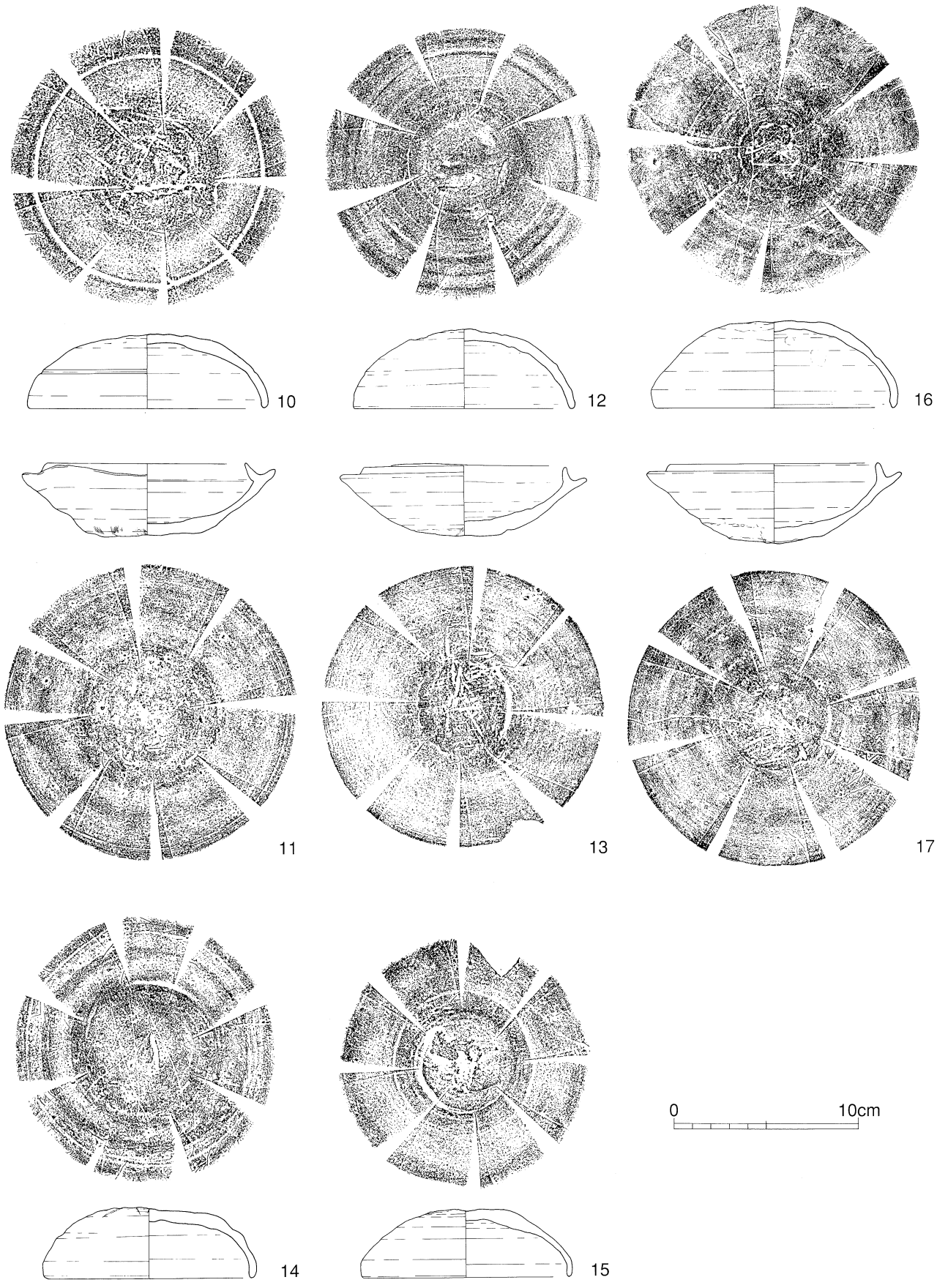
玄門は玄室右袖が破壊されているが、復元幅70cmと考えられる。

玄室は長さ250cm、前幅160cm、奥幅166cmを測り、平面形態は前側のややすぼまる縦長長方形

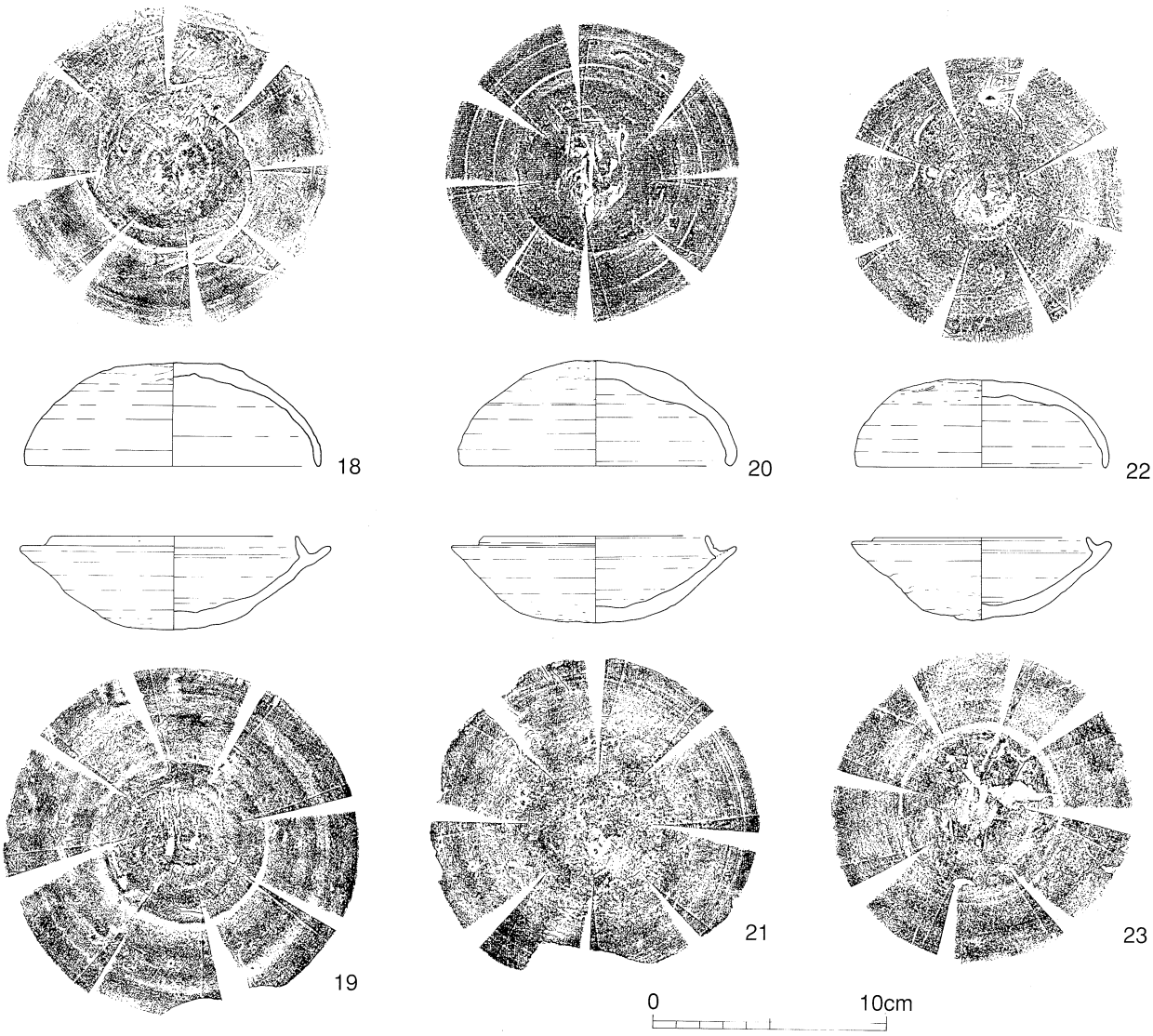
第110図　F－1号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図（S＝1／30）



第111図　F－1号横穴墓出土遺物実測図1（S＝1／3）



第112図　F－1号横穴墓出土遺物実測図2（S＝1/3）



第113図　F－1号横穴墓出土遺物実測図3（S＝1/3）

を呈する。

奥壁は高さ75cmまで残存しており、界線はやや不明瞭で、30cm弱程直立して立ち上がり、屈曲して内湾し、天井形態はアーチ形と考えられる。

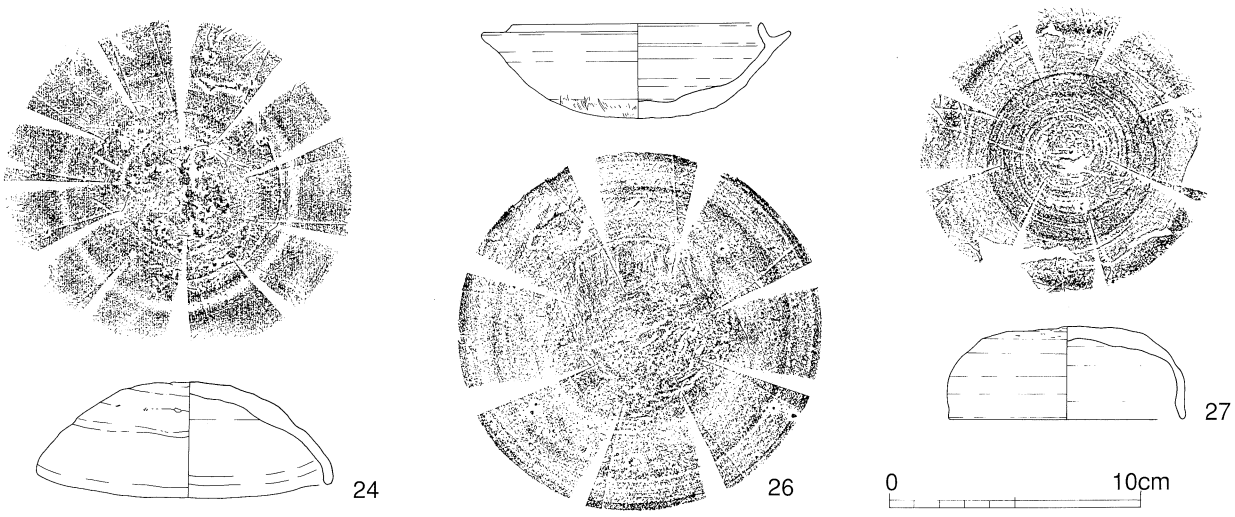
床面には、中央軸に沿って幅10cm前後、深さ5cmの溝が、また前・奥壁、両側壁沿いにも幅5～15cm、深さ5cmの溝が廻っており、玄門中央でそれぞれ合流し、前側は羨道部の中央溝へと続くようである。中央溝は床面を2分し、右と左に屍床を造り出している。

加工痕

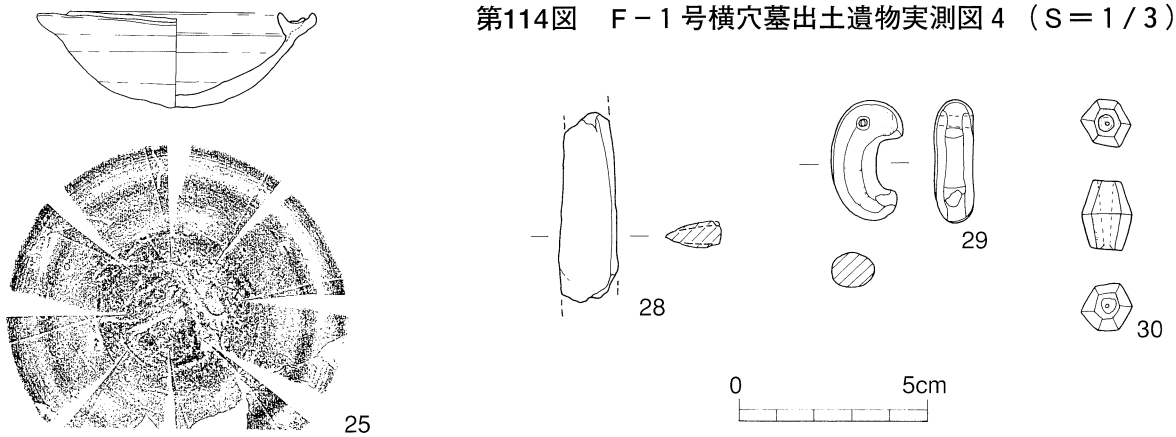
奥壁に幅10～15cmの円刃状の加工痕が観察される。

遺物出土状況

須恵器蓋坏24個体と有蓋高坏1セットと勾玉1点、切子玉1点はそれぞれ3つのグループに大別できる集中した出土状況を呈している。



第114図　F－1号横穴墓出土遺物実測図4（S＝1/3）



第115図　F－1号横穴墓出土遺物実測図5（S＝1/2）

第1グループは、玄室右奥に集中する蓋坏6個体（**10**～**15**）である。全て床面直上からの出土で、**11**は正位の上向きであるがそれ以外は蓋も身も伏せた状態である。**11**は周溝の上に位置しており、元位置から移動したものと考えられる。元々は他の5個体と共に床面に伏せた状態であったものと想定される。

第2グループは、玄室左奥に集中する蓋坏7個体（**3**～**9**）と有蓋高坏1セット（**1**・**2**）と勾玉1点である。**5**・**6**と勾玉は床面から3～4cm浮いているが、他の左寄りの遺物は床面直上から出土している。**1**・**3**・**4**・**9**は伏せた状態、**5**～**8**は上向きの状態である。

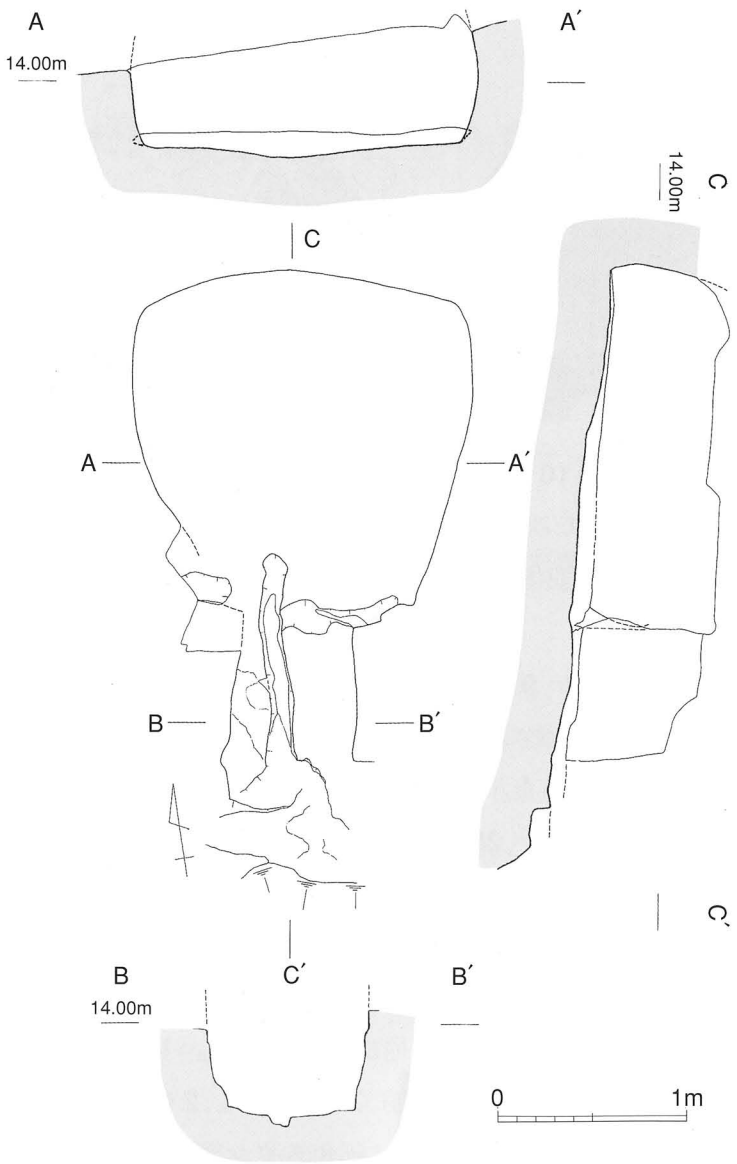
第3グループは、玄室左前に集中する蓋坏11個体（**16**～**26**）と切子玉1点で、前壁に立てかけた**17**・**19**～**21**・**23**、床面上に位置する**16**・**22**・**24**～**26**に小別することが出来る。**17**～**19**・**23**と切子玉は床面に接しており、他の7個体は数cm～5cm床面から浮いている。

出土遺物

111-1～**114-27**は須恵器の**1**・**2**は有蓋高坏、**27**は短頸壺の蓋、他は蓋坏である。**1**の高坏蓋は乳頭状のつまみの付く低平なもので、口唇部は跳ね上がりかえりは真直ぐ下に向く。**2**の高坏は立ち上がりが深く椀状を呈しており、脚部は短くて太い低脚状で、3ヶ所に三角スカシが施されている。**3**はかえりのある坏蓋で1.8cmの長い山形つまみの付くもので、**4**のかえりのない、底部が若干尖底を呈

し立ち上がりの直立な坏身とセットであったと考えられる。**5・7・9・10・12・14～16・18・20・22・24**は坏蓋で、**9**のみは平たい天井部から体部が直立ぎみに立ち上がり、その境には明瞭な沈線を、また体部にも沈線を施すものである。他は、天井部から体部へ連続した山形を呈するもので、その境には形骸化した沈線を施すものやナデによる窪みを施すものや全く境を意識しないものなどがある。口径は10.2～13.0cmと幅をもつが、平均12cm（**5・7・10・12・14・16・18・20**）と11.1cmの**15**と平均10.2cm（**22・24**）のものに分類できる。**6・8・11・13・17・19・21・23・25・26**はかえりのある坏身で、口径は9.6～13.0cmと幅をもつが、平均12cm（**6・8・11・13・19・17・21・26**）のものとかえりの短い9.8cm（**23・25**）のものに分類できる。**27**の短頸壺の蓋は、口径9.1cmを測り、天井部から体部は直立ぎみに立ち上がり、口唇部が外反するものである。

115-28は鉄製品である。断面三角形を呈しており、刀子の刃 部と考えられる。**115-29・30**は水晶製の勾玉と切子玉で、それぞれ長さは3.1cmと1.8cmを測る。



第116図　F－2号横穴墓実測図（S＝1／40）

（2）F－2号横穴墓

（第116～118図）

F－1号横穴墓の西に並んで検出された。天井が大きく破壊されている。床面標高13.45～13.75mを測り、開口方向はS－8°－Eである。

土層堆積状況

基本的に天井崩壊後の堆積した層である。玄室内に流入土が堆積する以前に天井の崩壊が起きたようで、最下層の3層も地山レキが風化したものと考えられる。

前庭・羨門・羨道

前庭部と羨門は完全に崩壊している。

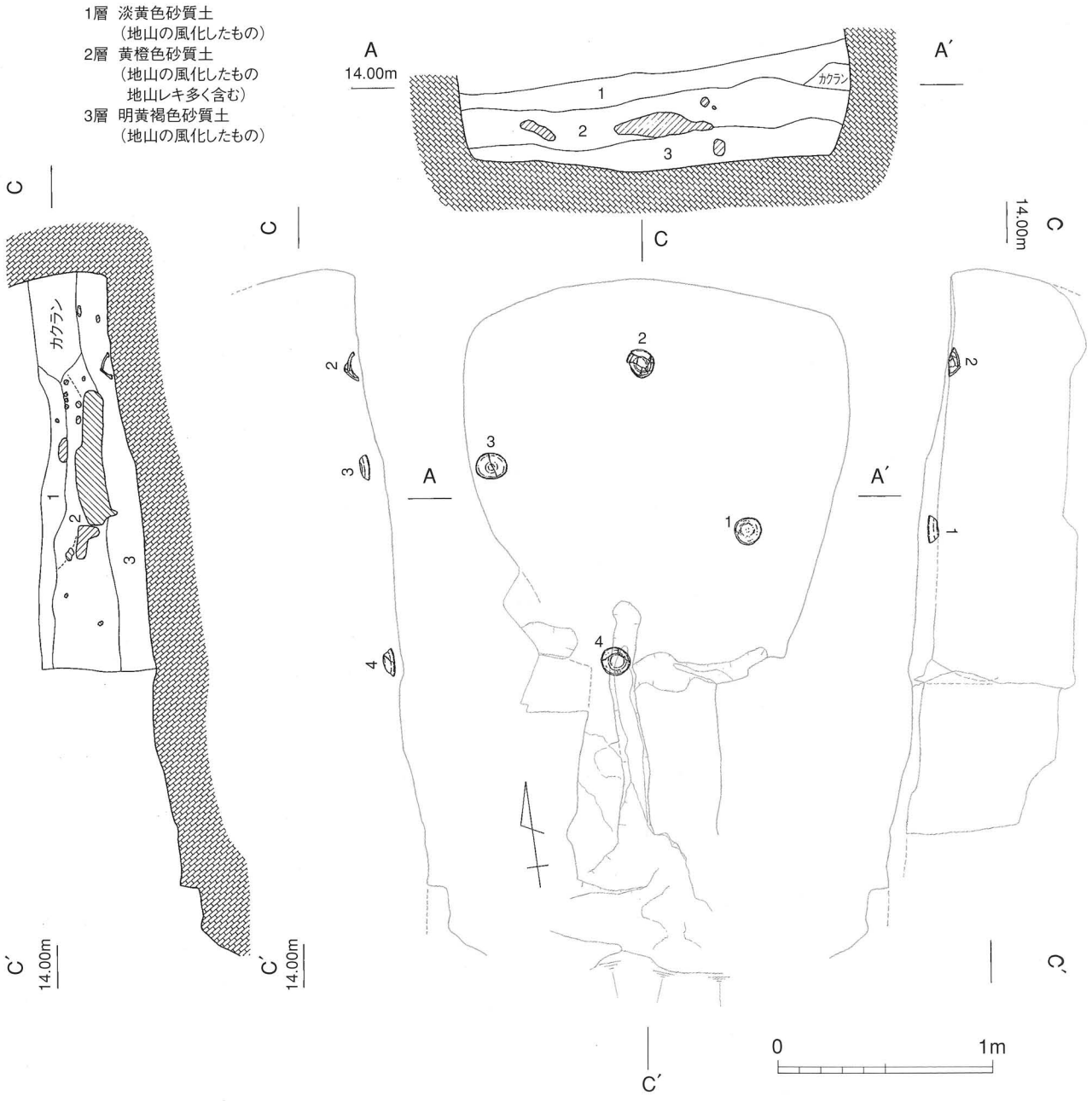
羨道部は現存長85cm、幅62～66cmを測る。平面形態は内側へ若干狭まる長方形を呈している。床面中央より若干左寄りには、幅10cm強、深さ5cmの溝が造られ、玄室入り口付近まで延びている。

玄門・玄室

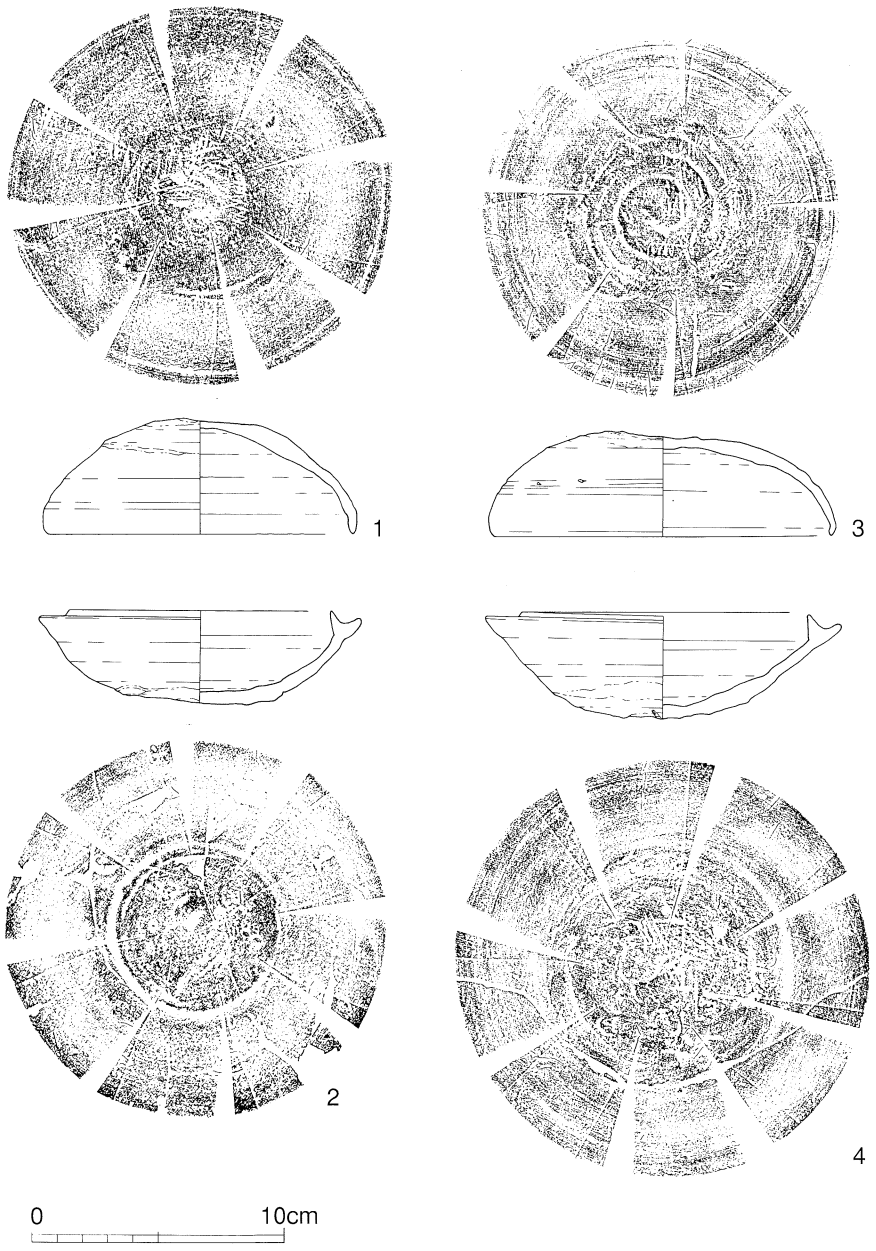
玄門は天井が崩壊しているが、床面幅60cmを測る。床面には幅約10cm、深さ数cmの溝が中央溝から右側に施されている。

玄室は長さ176cm、前幅110cm、奥幅167cm、右袖31cmを測り（左袖は不明）、平面形態は前幅の狭くなる四隅の丸い正方形を呈する。

奥壁は高さ60cmまで残存しており、界線は不明瞭で、直立ぎみに立ち上がり、天井形態はアーチ形と考えられる。



第117図　F－2号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図（S＝1／30）



第118図　F－2号横穴墓出土遺物実測図（S＝1／3）

加工痕

明瞭な加工痕は観察されない。

遺物出土状況

玄室床面から須恵器蓋坏4個体が全て伏せた状態で出土した。玄門中央溝上に**4**が、玄室中央奥に**2**が、玄室右中央に**1**が、玄室左中央に**3**が出土した。

出土遺物

118-1～**4**は須恵器の蓋坏で、**1**と**3**は蓋、**2**と**4**はかえりのある身である。蓋の天井部と体部の境は不明瞭で、身のかえりは短くはなっているが上向きに作られている。口径は11.3～13.3cmを測り平均12.4cmである。

第７節　Ｇ 群の調査

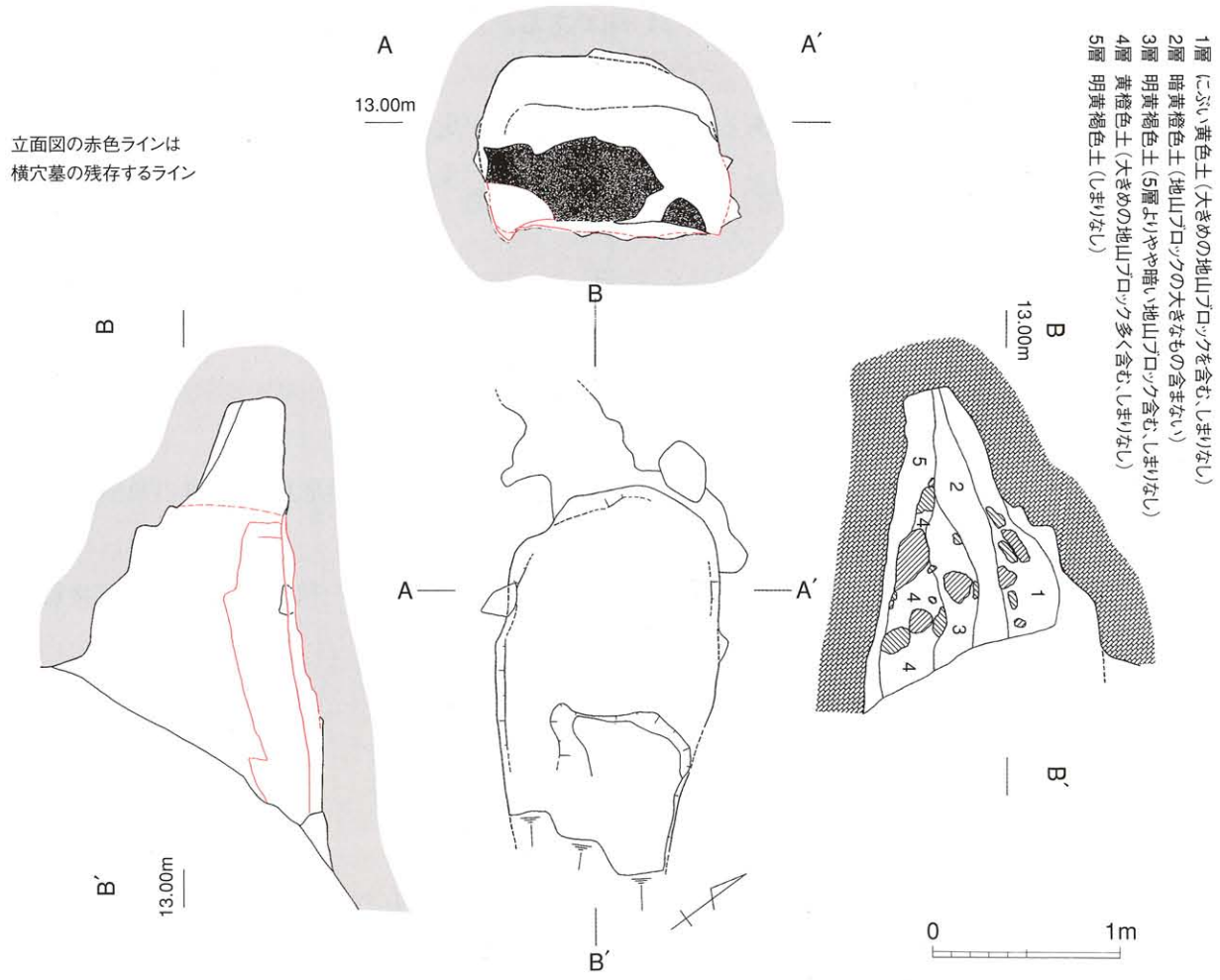
東側斜面南に位置するＥ群の下列に所在する。６基からなり、Ｇ-３号横穴墓が若干下がる他はほぼ同一レベルに並ぶ。丘陵斜面の破壊削平が著しく、ほとんどの天井が崩壊し、玄室のみが残存しているという状況である。

（１）Ｇ-１号横穴墓（第119図）

Ｇ群内で最も北側に位置するが、若干距離を空けて構築されている。玄門から前側は破壊されており、玄室の上部構造も奥壁と若干の天井を残すのみである。奥壁には大きな穴が掘り込まれ、その時にも奥壁に加工を施した痕跡が見られる。床面標高は12.25～12.45mを測り、開口方向はS−52°−Eである。出土遺物は皆無である。

土層堆積状況

奥壁に掘り込まれた大きな穴には玄室と同様な堆積をしており、奥壁の大きな穴が掘り込まれる以前の埋葬当時の堆積土は、その時に掻き出されたものと考えられる。４層には地山ブロックの大きなものを多く含み、この時点で天井の崩壊が起こったものと考えられる。



第119図　Ｇ−１号横穴墓実測図（Ｓ＝１/４０）

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長205cm、現存する前幅は90cm、奥幅107cmを測る。平面形態は、奥隅が丸くて前方へ幅が狭くなる縦長長方形を呈する。

奥壁は左側下に一部分のみ埋葬当時の面を残す。他の面は奥壁の大きな穴が掘削された時点で、再掘削が行われているが、埋葬当時の奥壁ラインは床面及び天井の活きた面から想定した。そのラインを第119図に赤色ラインで記したが、直立ぎみに立ち上がるようである。

床面には、奥壁と側壁沿いに溝の痕跡が見られる。

加工痕

玄室床面に幅10cm弱の平刃状の加工痕が観察される。奥壁に見られる加工痕は奥壁の大きな穴を掘削した時のものと思われる。

（2） G－2号横穴墓（第120～123図）

G－1号横穴墓の南2.5m、E－6号横穴墓の真下に位置する。天井及び玄室前半分は破壊されている。床面標高は11.9～12.0mを測り、開口方向はS－31°－Eである。

土層堆積状況

基本的に天井崩壊後の堆積した層である。玄室内に流入土が堆積する以前に天井の崩壊が起きたようで、最下層の3層には人頭大の地山レキを多く含んでいる。床面直上で出土している遺物は元位置である可能性が高い。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長170cm、現存する前幅は135cm、奥幅165cmを測る。平面形態は奥隅の角張り前幅が徐々に狭まる形態を呈する縦長長方形である。

奥壁は半分以上が剥落し、天井も崩壊しているが、天井部との界線が一部残っている。天井形態は不明である。

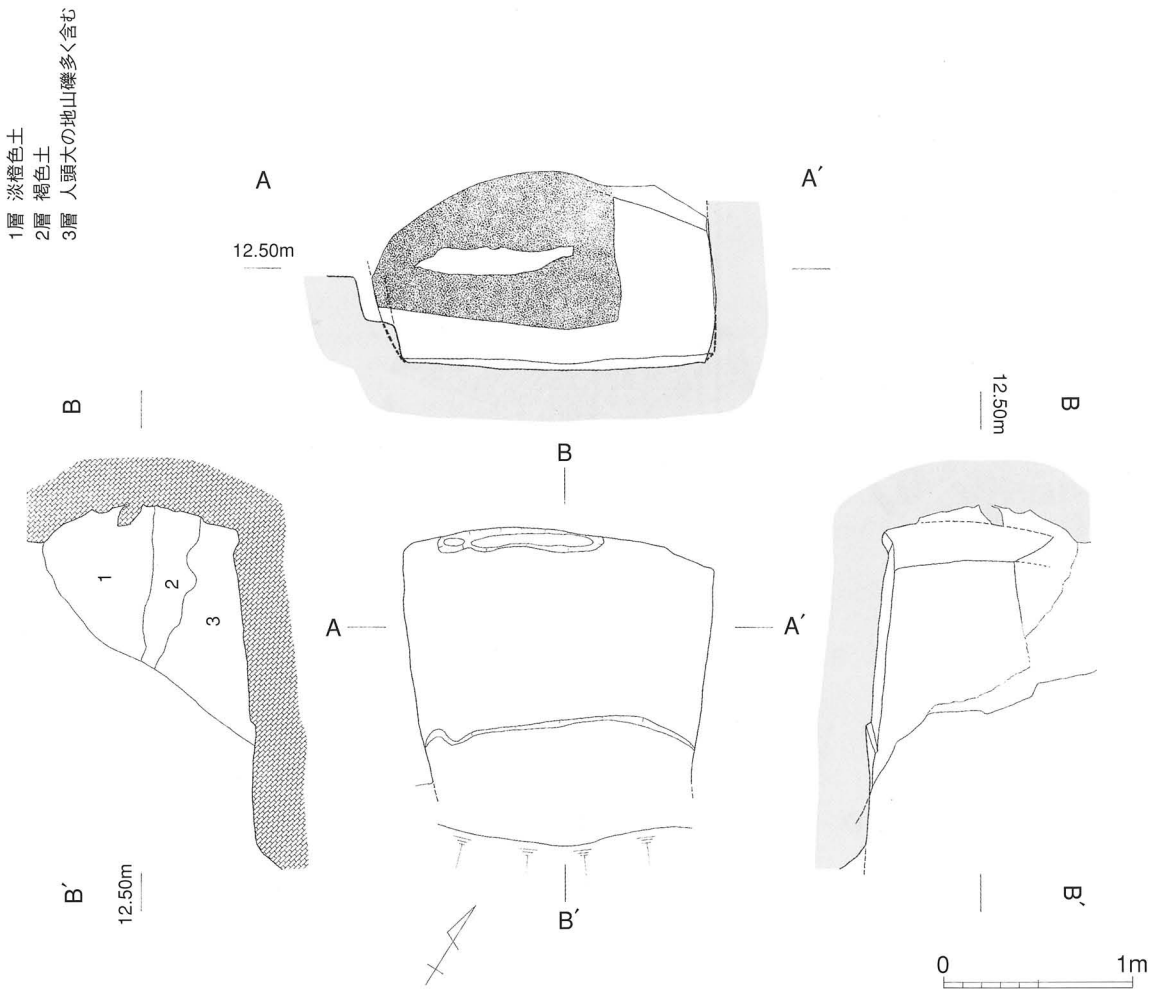
床面奥壁沿いに長さ82cm、幅10cm、深さ5cmの溝が施されている。

加工痕

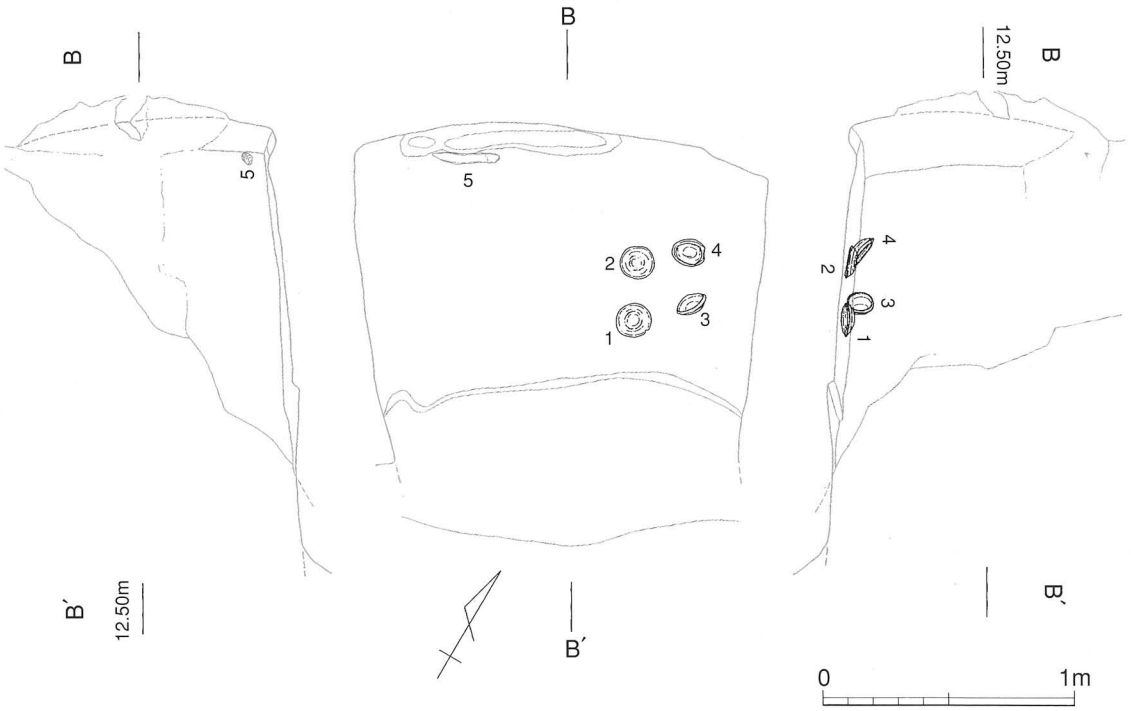
明瞭な加工痕は観察されない。

遺物出土状況

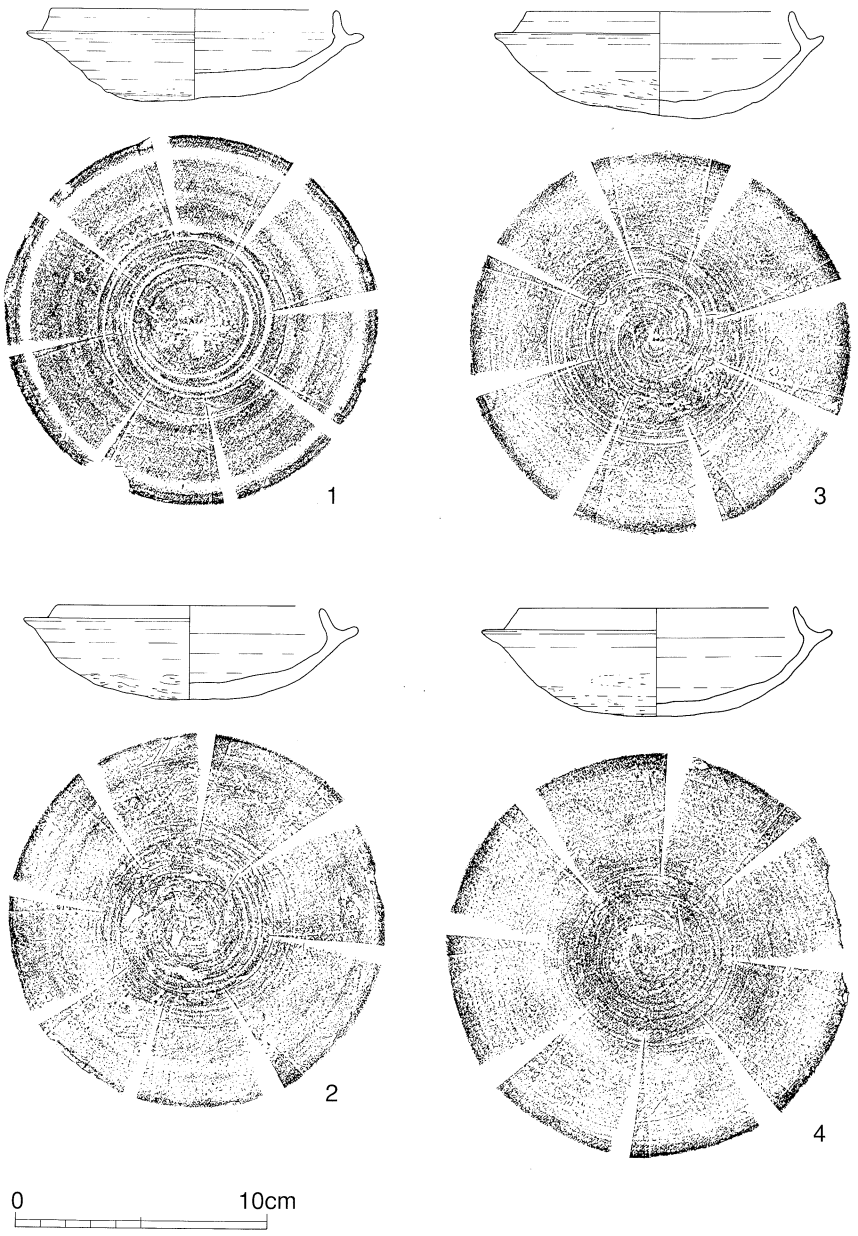
玄室右奥から4個体の坏身が、床面直上にほぼ菱形の頂点に置かれた状態で出土した。左側の2個体（**1**・**2**）は伏せて、右側の2個体（**3**・**4**）は斜め上向きから立位である。玄室左奥からは1点の鉄製品が床面から1cm程度浮いて出土している。



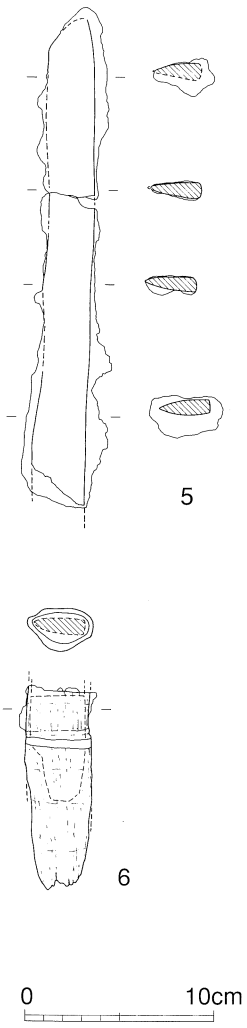
第120図　G－2号横穴墓実測図（S＝1／40）



第121図　G－2号横穴墓遺物出土状況図（S＝1／30）



第122図　G－2号横穴墓出土遺物実測図1（S＝1/3）



第123図　G－2号横穴墓
出土遺物実測図2（S＝1/4）

出土遺物

122-1～**4**は須恵器の坏身である。かえりのあるもので、口径は12.0～12.9cm、平均値12.35cmである。底径がやや広く平べったい**1**・**2**、底径がやや小さく深みのある**3**・**4**に分類される。

123-5・**6**は鉄製品の大刀で、**5**は幅2.5～2.8cmの刃部、**6**は柄部である。柄部の現状は円筒状の鉄の塊であるが、X線により、全体は木質で覆われていることが判明した。上位から、鋂が残存し、その周りは鞘の木質に覆われている。鋂の下位には幅5mm弱の抉れが巡っているのが観察され、鍔の痕跡と考えられる。その下位には柄縁金具が残存し、柄木が延びている。柄の内部には刀身の茎部が観察される。

（3）G－3号横穴墓（第124～126図）

G－2号横穴墓と4号横穴墓の中央で、G群中最も低レベルに位置する。天井及び玄室前半分は破壊されている。床面標高は11.65～11.75mを測り、開口方向はS－19°－Eである。

土層堆積状況

天井崩壊後の流入土である。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長160cm、現存する前幅は90cm、奥幅89cmを測る。平面形態は奥隅の丸い前幅が徐々に狭まる形態を呈する縦長長方形である。

奥壁は上半部が崩壊しているが、高さ45cmまで確認でき、直立ぎみに立ち上がる。界線は加工の過程による粗いものである。 天井形態はアーチ形と考えられる。

加工痕

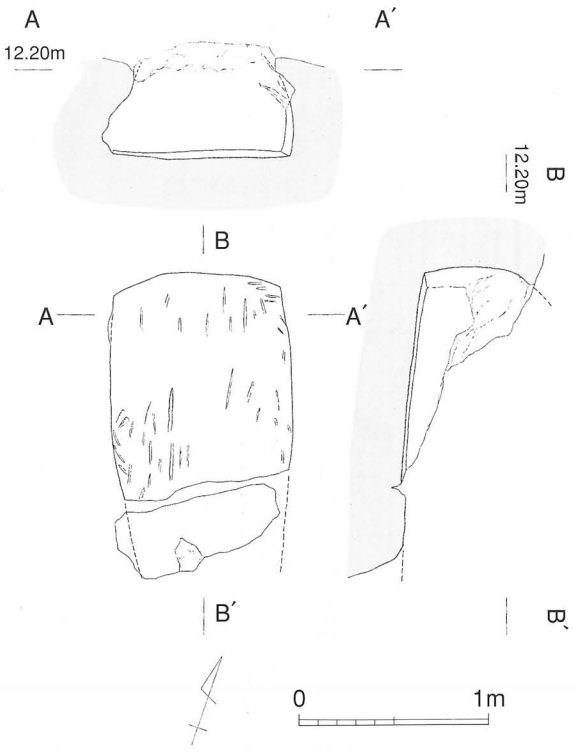
床面に1～2cm幅で、短い溝状の加工痕が観察される。

遺物出土状況

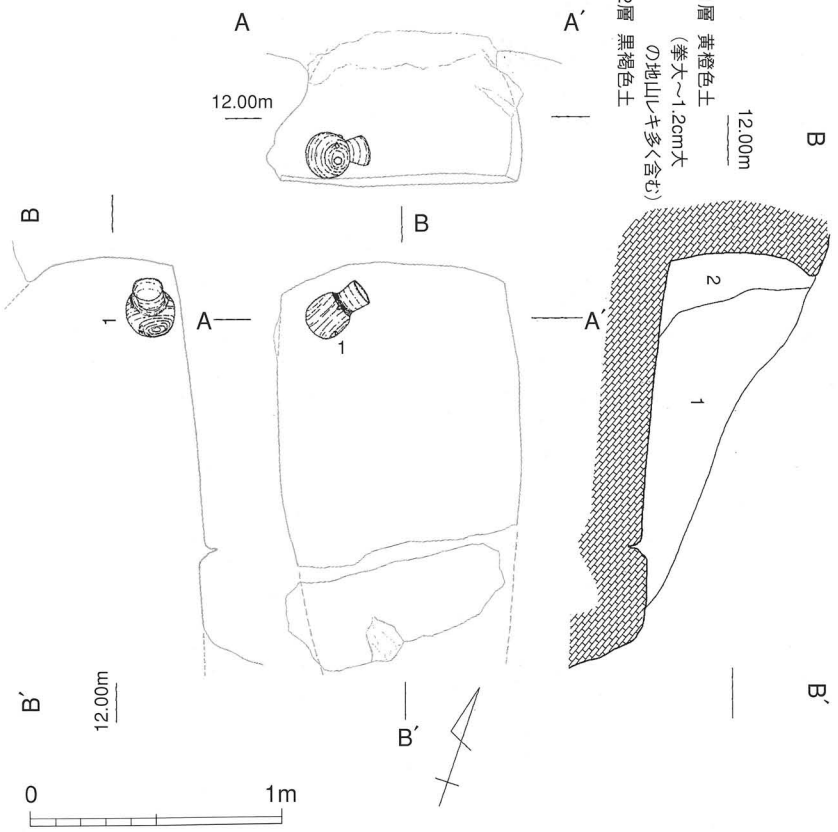
玄室左奥から提瓶が1個体完形で出土した。わずかに床面から浮いているが、ほぼ床面出土であろう。倒位で把手の位置を上下に向けた状態である。

出土遺物

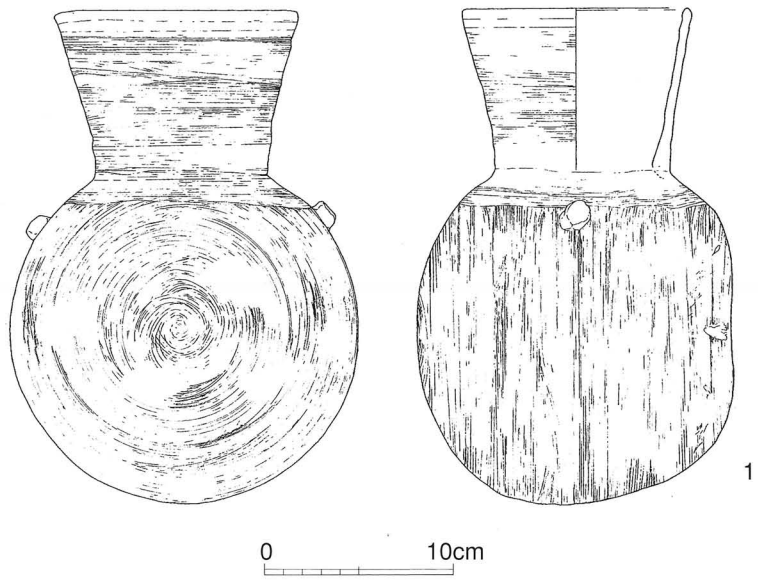
126-1は須恵器の提瓶である。口縁部は直立する単純な筒状で、把手は瘤状を呈するものである。体部は片面が膨らみ、



第124図　G－3号横穴墓実測図
（S＝1／40）



第125図　G－3号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図
（S＝1／30）



第126図　G－3号横穴墓出土遺物実測図1（S＝1/4）

片面は平らである。

（4）G－4号横穴墓

（第127～129図）

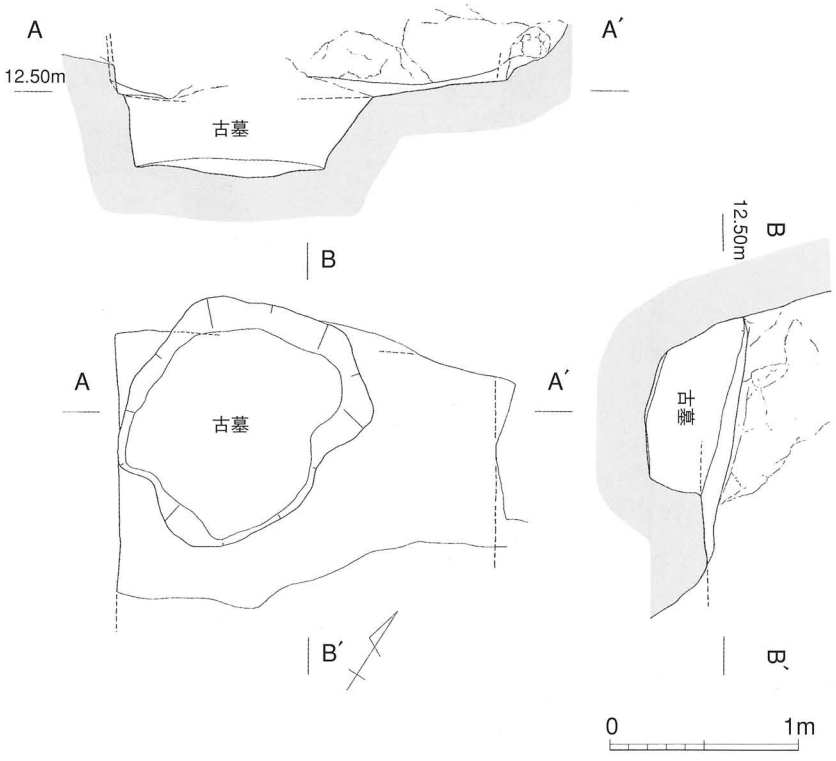
G－3号横穴墓の西に、一段高いが接するように位置する。天井及び玄室前半分は破壊されている。また直径130cmの楕円形の土壙により玄室左奥も壊されている[註1]。床面標高は12.4～12.6mを測り、開口方向はS－33°－Eである。

土層堆積状況

1層のみが当該横穴墓の残存する堆積土で、2～6層は土壙の堆積土である。1層は地山ブロックを含んだ砂質土で、天井崩壊後の流入土と考えられる。

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。



第127図　G－4号横穴墓実測図（S＝1/40）

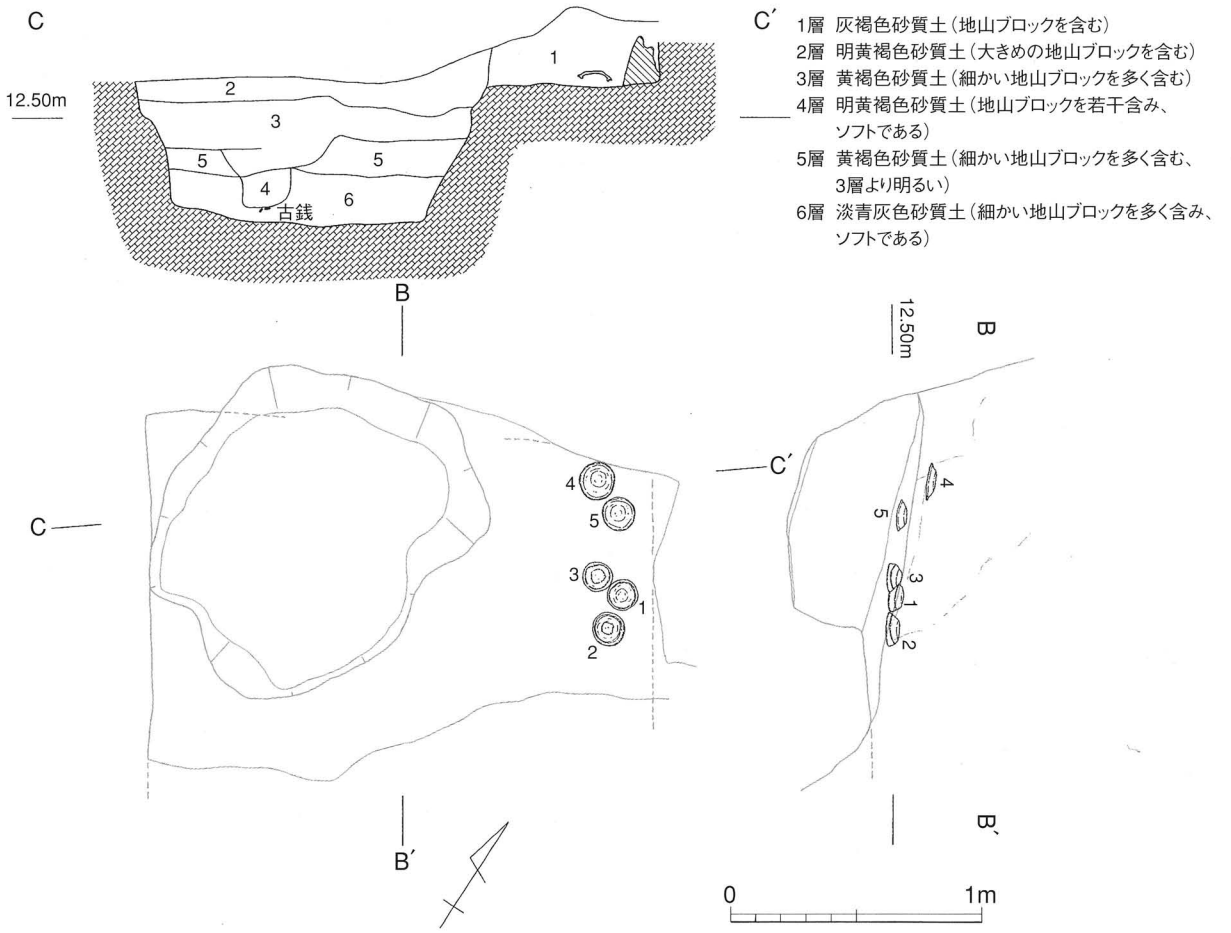
玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長140cm、現存する前幅は200cm、奥幅200cmを測る。平面形態は奥隅が角張り両側壁が平行する形態を呈している。

奥壁はほとんどが崩壊しているが、一部確認できる。高さ30cm強まで確認でき、直立ぎみに立ち上がる。

註1　この土壙の詳細は古墓として後述する。



第128図　G－4号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図（S＝1／30）

加工痕

明瞭な加工痕は観察されない。

遺物出土状況

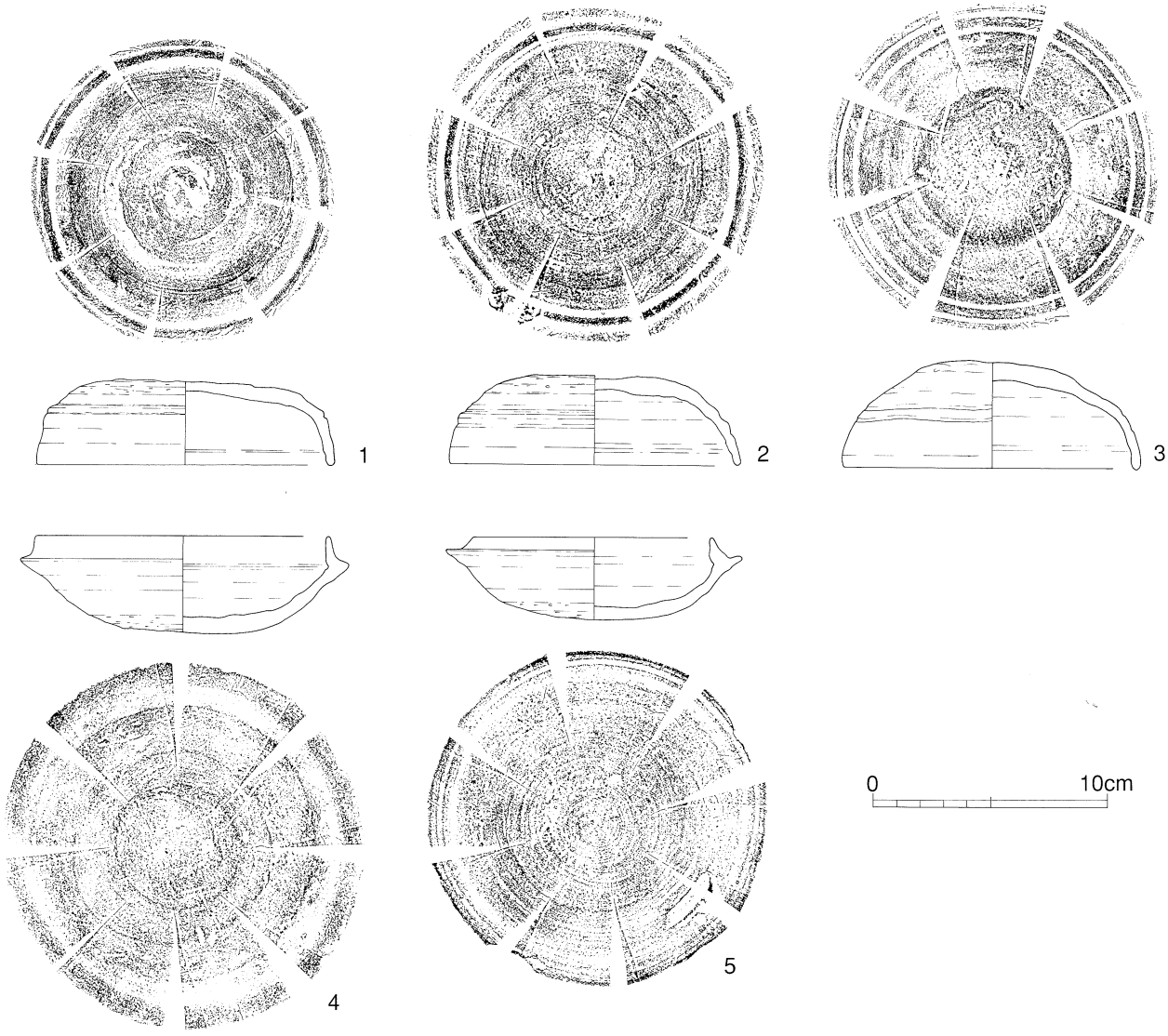
玄室右奥から蓋坏が5個体全て伏せた状態で出土している。**4**のみが床面から10cm程浮いているが、他の4個体は床面直上である。元位置かどうかは不明である。

出土遺物

129-1～**5**は須恵器の蓋坏で、**1**～**3**は蓋、**4**・**5**はかえりのある身である。**4**のかえりは直立して伸びるもので、蓋の天井部と体部の境には沈線とナデによる1条の突帯が施されている。口径は**4**が若干大きく、**5**が若干小さいが、11.7～12.8cmで、平均値は12.25cmである。蓋は平均した大きさであるが、身は最大のものと最小のものである。

（5）G－5号横穴墓　（第130～132図）

G－4号横穴墓の西に、若干高く接するように位置する。天井及び玄室前半分は破壊されている。床面標高は12.3～12.45mを測り、開口方向はS－31°－Eである。



第129図　G－4号横穴墓出土遺物実測図（S＝1／3）

前庭・羨門・羨道

完全に崩壊している。

玄門・玄室

玄門は完全に崩壊している。

玄室は現存長194cm、現存する前幅は230cm、奥幅234cmを測る。平面形態は、奥隅が角張り前にいくにつれ幅がわずかに狭まる形態を呈している。

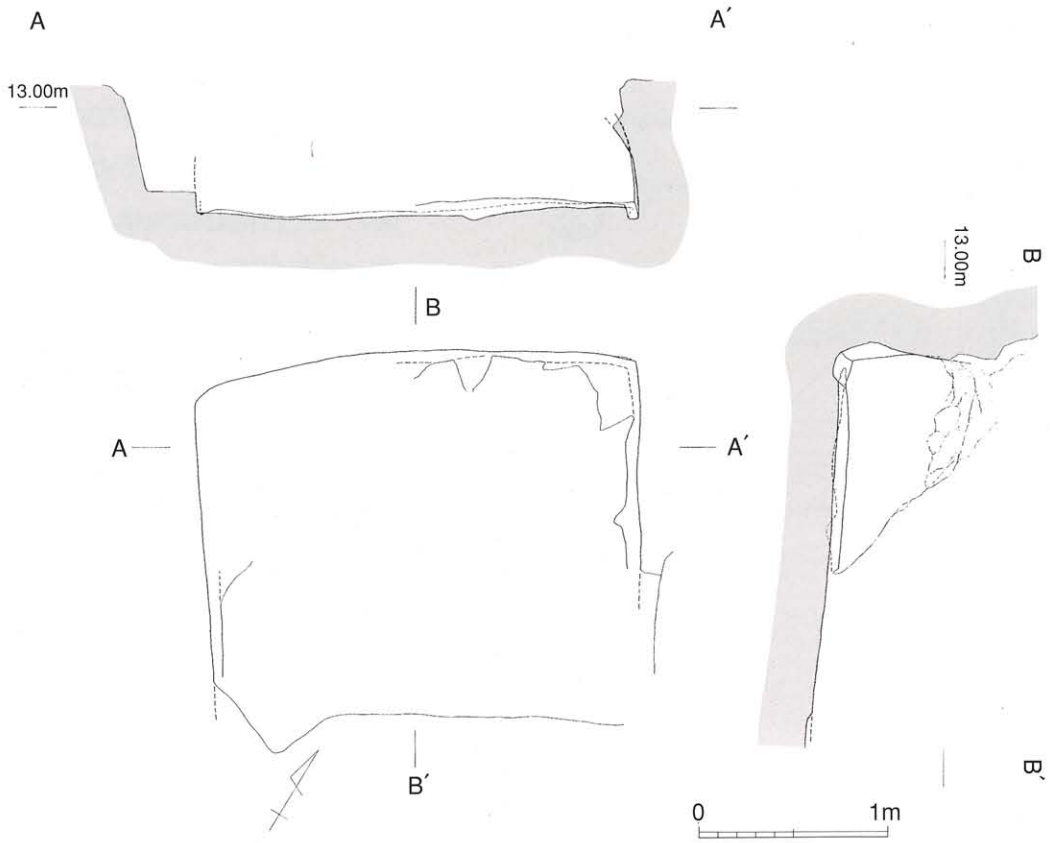
奥壁は高さ40～50cm程度残存しており、直立ぎみに立ち上がるようである。奥壁と右側壁の残存する界線は明瞭である。

加工痕

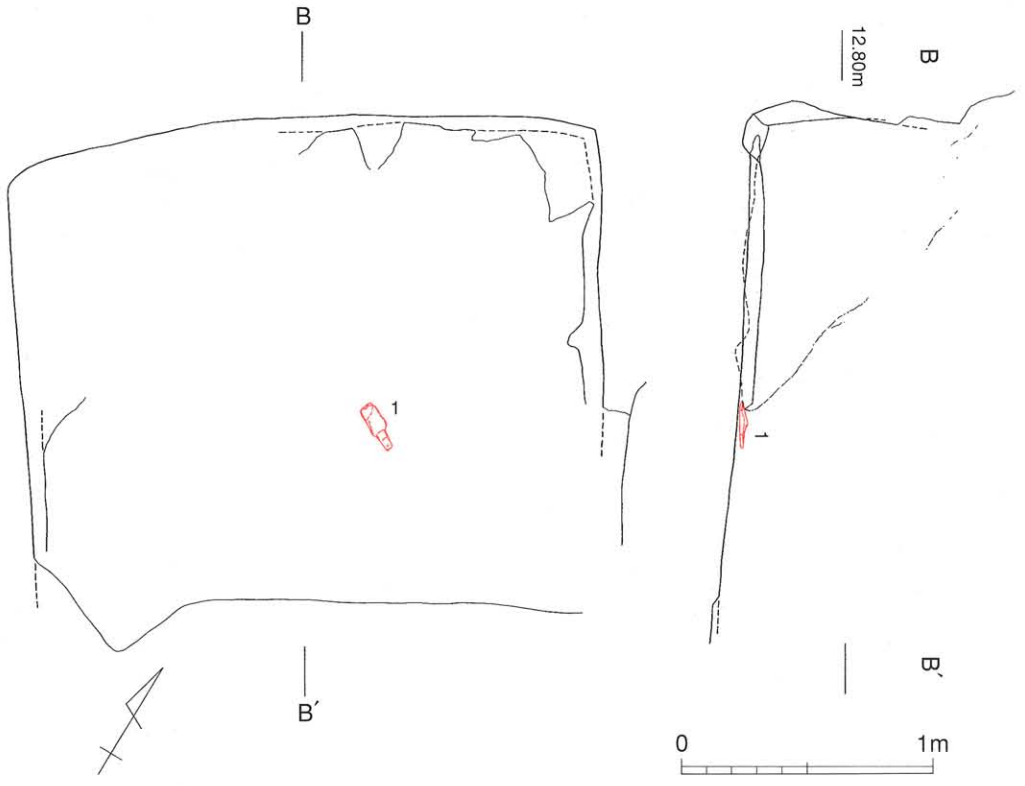
明瞭な加工痕は観察されない。

遺物出土状況

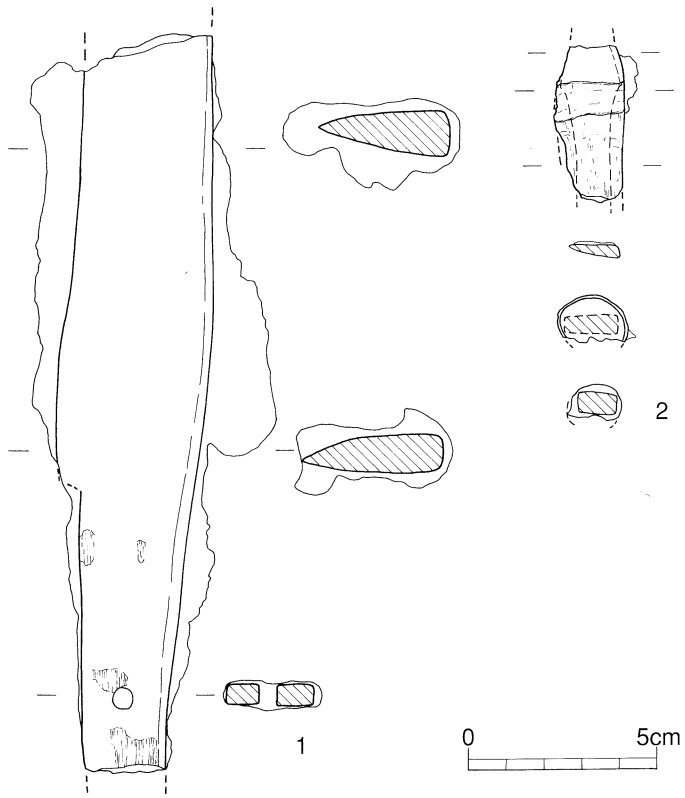
玄室右側中央付近から鉄器が出土している。



第130図　G－5号横穴墓実測図（S＝1／40）



第131図　G－5号横穴墓遺物出土状況図（S＝1／30）



出土遺物

132-1・2は鉄製品である。**1**は大刀の刃部から茎部にかけての部分で、茎部に目釘孔が１穴あるのをＸ線により確認した。関部は欠損していて詳細不明、茎部表面には所々木質が観察される。刃部幅3.1～3.9cm、最大厚1.2cmを測る太めのものである。**2**は刀子で、刃部から茎部にかけての部分で、柄縁金具及び柄木の残存したものである。

第132図　G－５号横穴墓出土遺物実測図（Ｓ＝１／２）

（６）Ｇ－６号横穴墓（第133～138図）

Ｇ群中最も南西に位置し、Ｇ－５号横穴墓と床面レベルをほぼ同じくし、並んでいる。天井と羨道部の前半部は破壊されている。床面標高は12.7～12.9mを測り、開口方向はS−30°−Eである。

土層堆積状況

１・３層は地山レキの大きめのものを多く含んだ層で天井崩壊後に堆積したものである。石棺内に直接３層が入り込んでいるということは、石棺には蓋石が載っていた可能性が高いため、盗掘時に蓋石を外されたあとに天井の崩壊が起こったものと考えられる。石棺の前から出土する遺物は、ほとんど床面から数cm浮いて４層から出土しており、この層は盗掘など開口されてから堆積したものと考えられる。最下層の５層は床面が風化したものか。

前庭・羨門・羨道

前庭部・羨門は完全に崩壊している。

羨道部は床面のみ若干残存する。現存長40cm、幅65cmを測り、平面形態は長方形を呈するものと思われる。

玄門・玄室

玄門は床面で幅70cmを測るが、床面には施設がなく羨道部から玄室へと連続している。

玄室は長さ242cm、前幅140cm、奥幅230cmを測り、平面形態は四隅がやや角張り前幅の狭まる縦長長方形を呈する。

奥壁は高さ75cmまで残存しており、界線はやや不明瞭で、直立して立ち上がる。

奥壁沿いには外長194cm、外幅78cmを測る組合わせ式箱式石棺が、若干右寄りに埋置されている。

加工痕

明瞭な加工痕は観察されない。

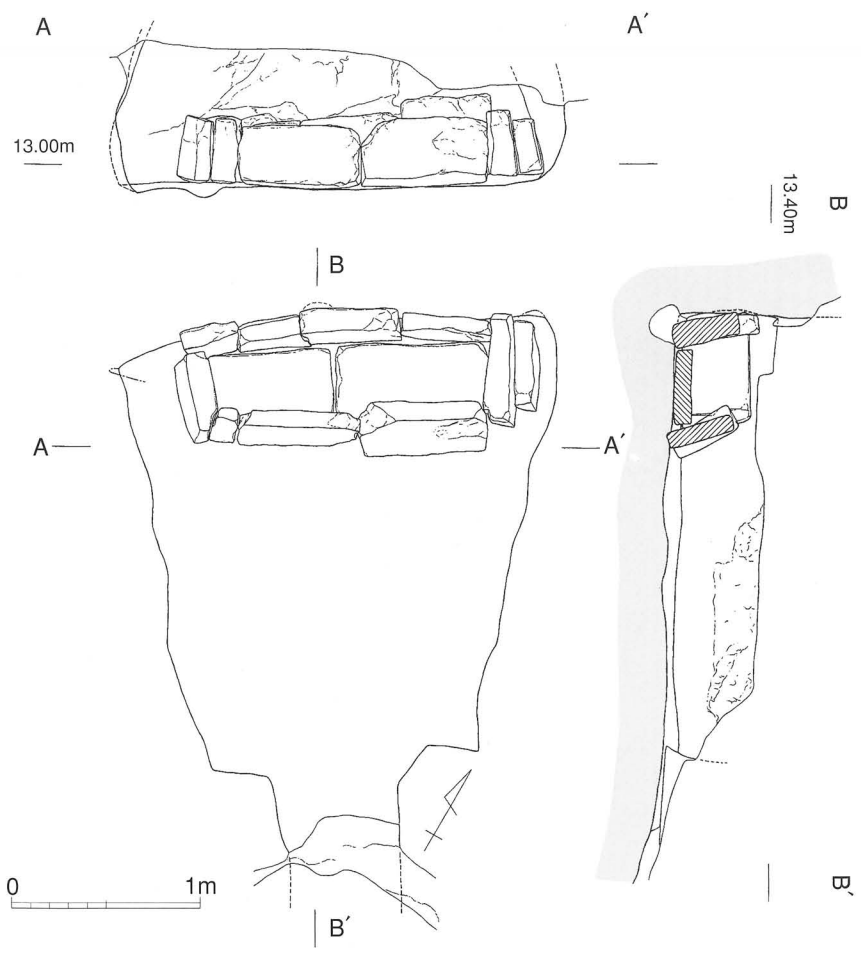
石　棺

石棺は板状に加工した石を利用して、床石２枚、前側石３枚、奥側石３枚、右小口石１枚と押さえ用の１枚、左小口石１枚で構成されている。床石を側石と小口石で挟む構造である。内長152cm、内幅39～43cmを測る。

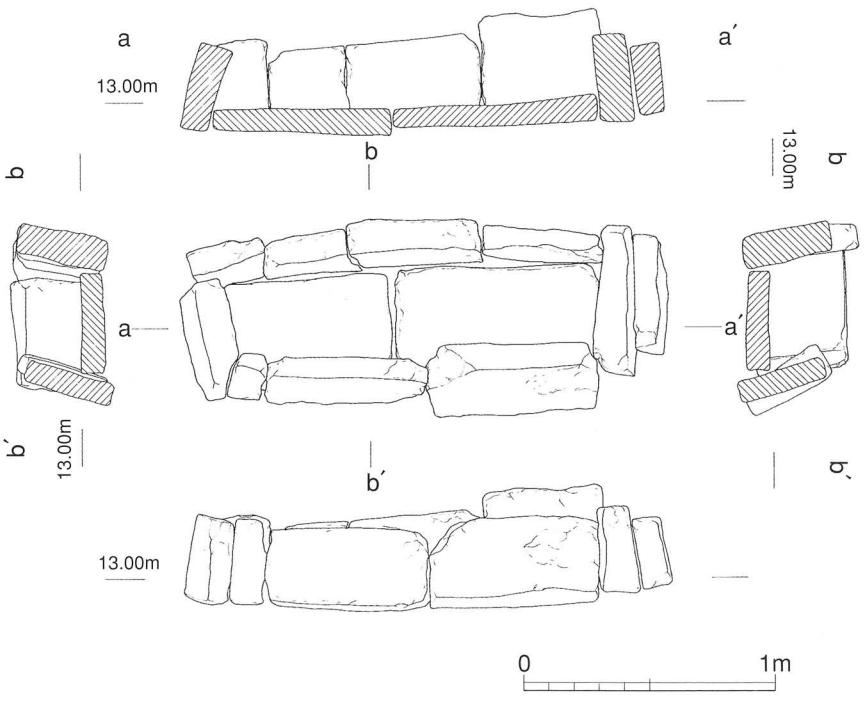
床石は右から長さ81cm、幅41～43cm、厚さ８～10cmのものと長さ70cm、幅39cm、厚さ８～10cmのもの２枚が床面に直接置かれている。

奥側石は右から高さ45cm、幅47cm、厚さ10cmのものと高さ33～37cm、幅85cm、厚さ13cmのものと高さ35cm、幅30cm、厚さ10cmのもの３枚が奥壁に接して立てかけたように置かれており、左側は小口石を挟むために床石より長くしてある。

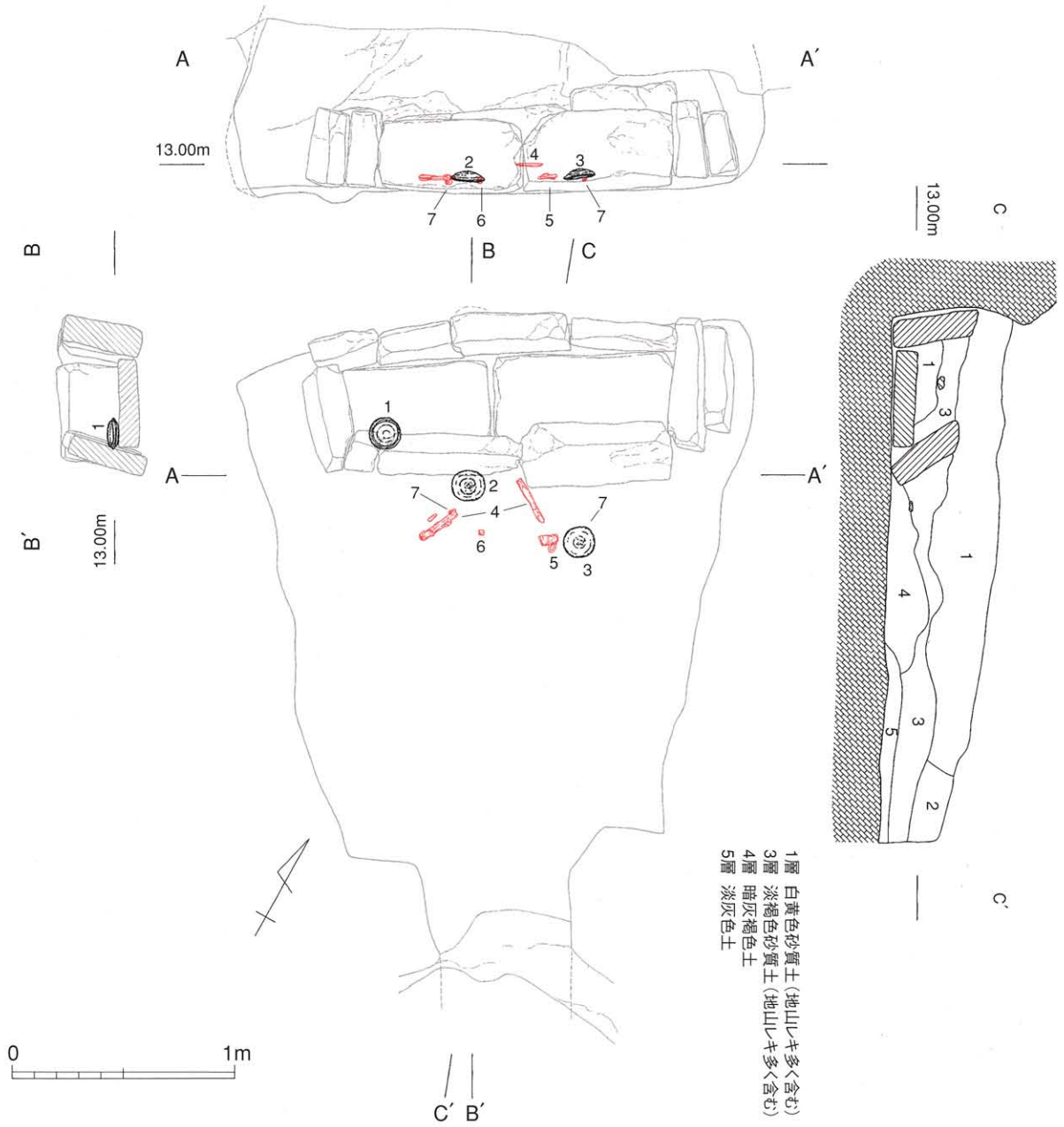
前側石は右から高さ36cm、幅68cm、厚さ14cmのものと高さ35cm、幅65cm、厚さ９cmのものと高さ35cm、幅13cm、厚さ７cmのもの３枚が置かれ、小口石が挟むように床石より若干短くしてある。



第133図　G－６号横穴墓実測図（Ｓ＝１／40）



第134図　G－６号横穴墓石棺実測図（Ｓ＝１／30）



第135図　G－6号横穴墓土層断面図及び遺物出土状況図（S＝1／30）

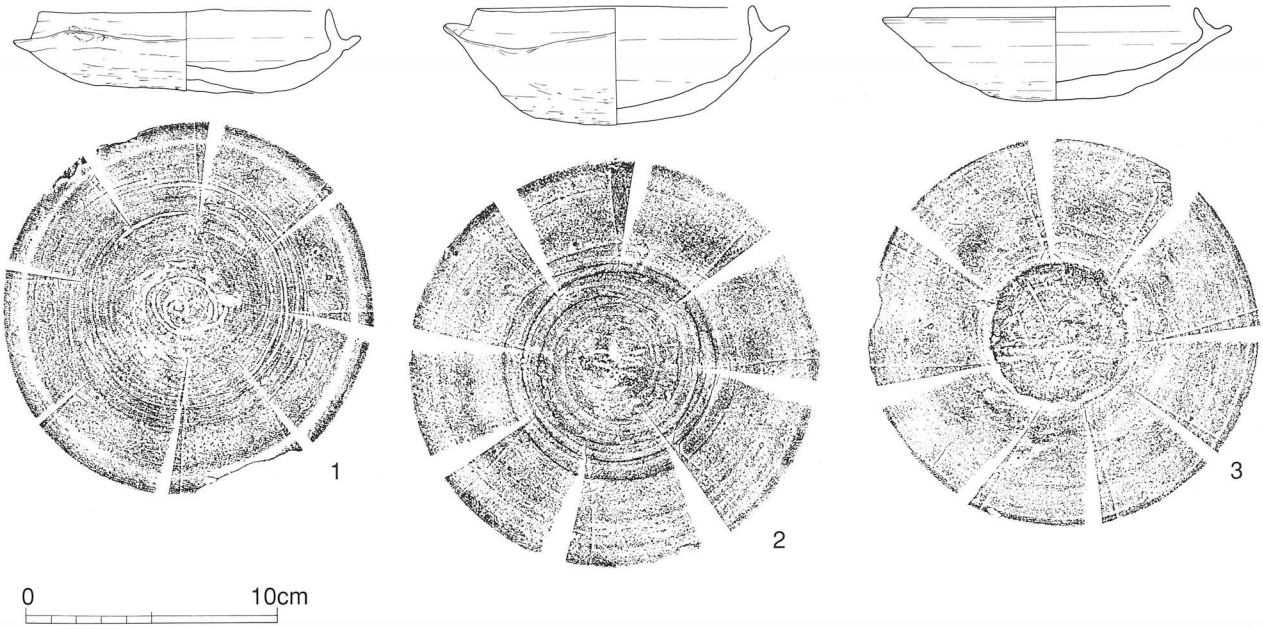
右小口石は高さ35cm、幅63cm、厚さ12cmを測る。前側には明瞭な刳り込みを作って側石を挟み、奥側も刳り込みにより側石が密着するように、それぞれ両側石を押さえている。この小口石の外側には、小口石を押さえるための高さ28cm、幅45cm、厚さ11cmの石が置かれている。

左小口石は高さ35cm、幅41cm、厚さ13cmを測る。前側には右小口石と同様な刳り込みが作られ、側石を挟みながら押さえている。

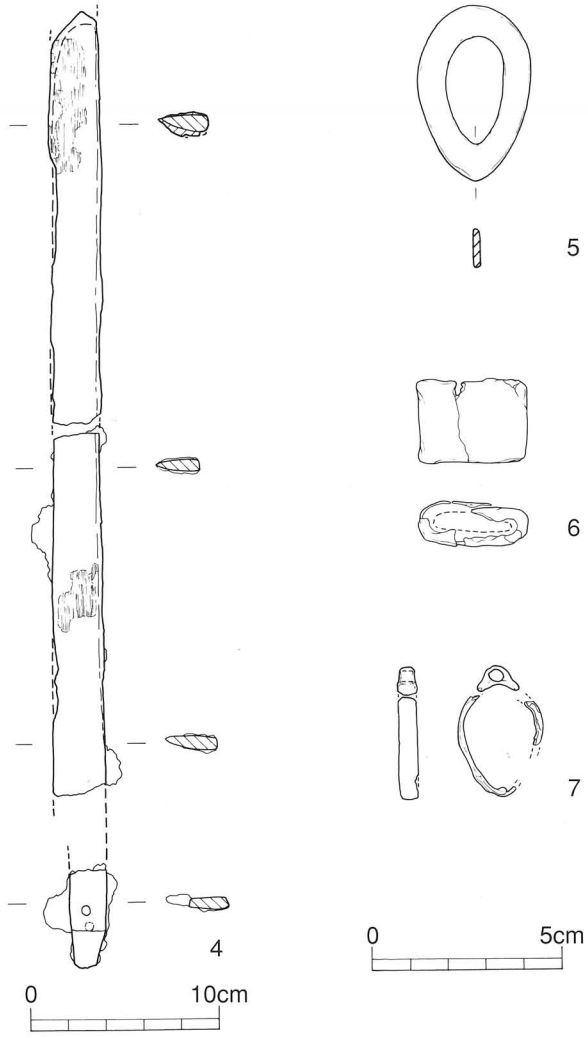
石棺は右側を若干広くし、床石のレベルも右側を高くしているので、頭位は右側であると考えられる。

遺物出土状況

石棺内から坏1個体（**1**）のみが出土している。石棺内出土の坏身は、左寄りで前側石に接し、ほぼ床面直上の正位で出土している。石棺の前には集中して出土しており、坏身が2個体（**2・3**）伏せた



第136図　G－６号横穴墓出土遺物実測図１（Ｓ＝１／３）



第137図　G－６号横穴墓出土遺物実測図２
（４：Ｓ＝１／４　５～７：Ｓ＝１／２）

第138図　G－６号横穴墓
出土遺物実測図３（Ｓ＝１／３）

状態で、床面から５、６cm浮いて出土しており、**2**の方は石棺に接している。これらの周りには鉄刀が１点ばらばらの状態で出土している。**4**の１点のみが若干レベルが高く４層上面に載っているが、他は床面から数cm～５cm浮いて４層中からの出土である。

遺物

136-1～**3**は須恵器の坏身である。**1**の底部は外から押さえられて上げ底状の平べったい器形を呈し、**2**は両側から押さえられて平面は楕円形を呈

する。**1**・**2**のかえりは上向きでやや長いものであるが、**3**のそれはやや短く内向きのものである。口径は**1**・**2**が正円ではないが平均値をとると12.6cm、**3**は12.7cmとほぼ同じである。

137-4～**7**は大刀で同一個体の各部位である。**5**～**7**は銅製である。**4**は刀身、**5**は鍔、**6**は鎺、**7**は吊金具である。**4**は刃部２点と茎部１点の破片状で、３点は直接接合しないが、想定現存長50.5cm、幅2.6cm、厚さ７mmの細身のものである。部分的に木質が残存している。茎部にはX線により２ヶの目釘穴が確認できる。**5**の鍔は長さ4.5cm、幅3.0cm、厚さ２mmを測り倒卵形を呈する。**6**の鎺は１mm厚さで片端が内側に折り曲げてあるもので、外面に金箔が施されている。**7**の吊金具は、環部の半分と吊部が残存したものである。環部には金箔を施した痕跡が観察される。

138-8は土師器の皿である。底部は回転糸切りで、器壁への立ち上がりが明瞭であり、口縁部は厚みのあるものである。混入品である。

（７）古　墓（第127・128・139・140図）

G-４号横穴墓を破壊して造られたものである。古銭が多数出土しており、古墓であると考えられる。平面形態は歪な楕円形を呈し、直径は130cm強、深さ60cmを測る。壁面はやや直立ぎみに立ち上がり、底面直径は90～120cmを測る。

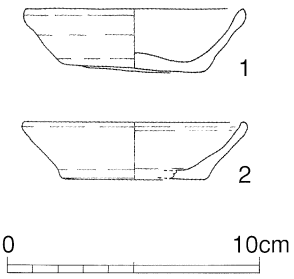
土層堆積状況

全体的に地山ブロックを含む砂質土で、５・６層が堆積した後にピット状に掘り込まれた４層、そこへ自然に落ち窪んだような３層が堆積する。

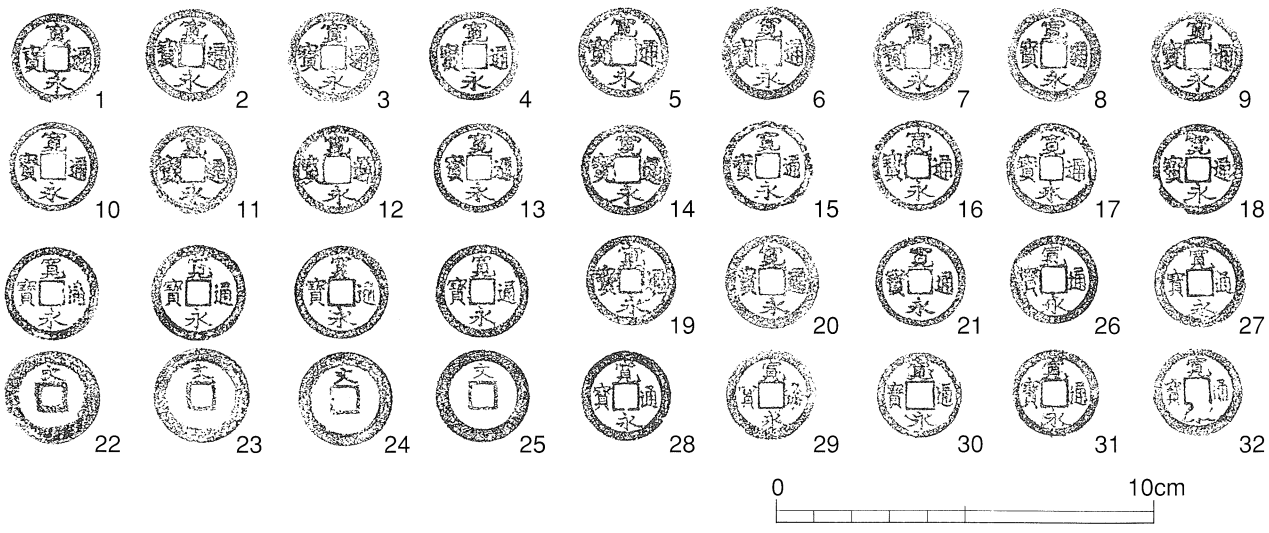
出土遺物

139-1・**2**は土師器の小皿である。底部は糸切りで、器壁への立ち上がりが明瞭であり、**1**は直立ぎみに立ち上がるが、**2**は外反ぎみに立ち上がり、口唇部外縁に丸みをもつ。

140-1～**32**は古銭である。合計38枚出土したもののうち、拓影可能なもの



第139図
古墓出土遺物実測図
（S＝１/３）



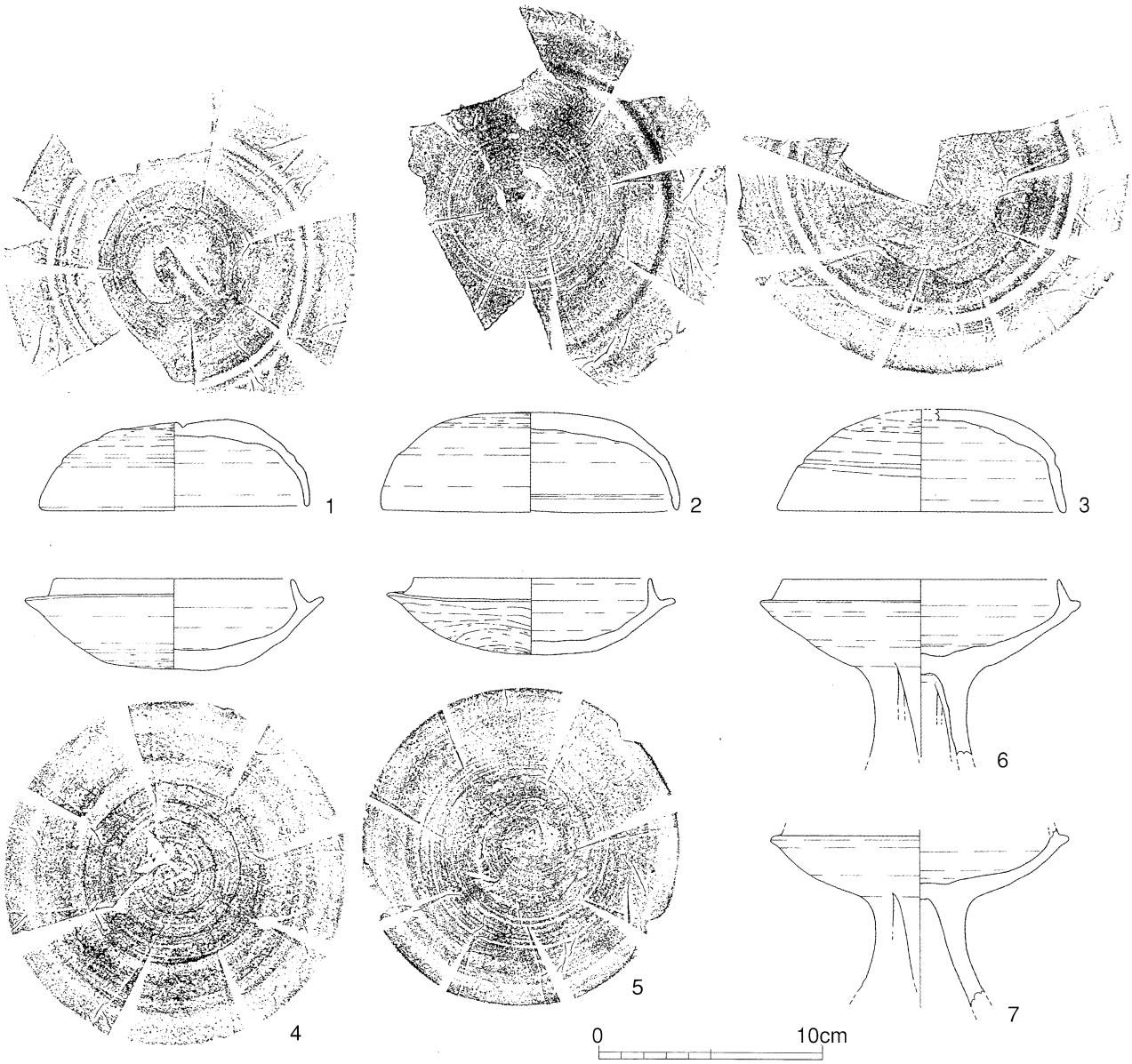
第140図　古墓出土古銭拓影（S＝１/２）

を掲載した。全て「寛永通寶」である。**1**～**21**は「寶」の足股が付く山形を呈するもので、直径2.3～2.5mm、平均2.4mmのもの。**22**～**32**は「寶」の足股が開いてハの字状を呈するもので、**22**～**25**は裏面に「文」が鋳出された文銭で、直径2.5mmのもの。**26**～**32**は裏面が無文のもので、直径2.3～2.4mm、平均2.35mmのものである。

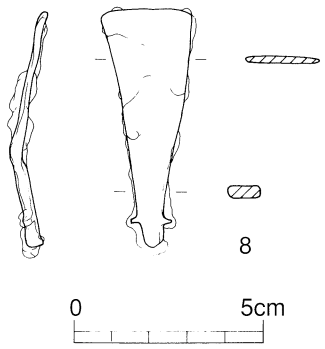
第８節　遺構外出土遺物（第141・142図）

遺物出土状況

表土掘削時に出土した遺物を以下に掲載する。3/4以上残存するもので、本来は横穴墓のものと考えられる。**141-1**・**6**・**7**は丘陵頂部から東側斜面を表土掘削している際に約１m下がった地点から



第141図　遺構外出土遺物実測図１（S＝1/3）



第142図　遺構外出土遺物実測図２（Ｓ＝１/２）

出土したもので、Ｃ群の上部に位置する。**141-2・3**はＣ-２・３号横穴墓の間からの出土で、**141-4**はＤ群の表土剥ぎをしている際に南隣のＥ-２号横穴墓らしき床面から出土したものである。Ｅ-１～３号横穴墓は連続した位置関係にあり、出土した土器からＥ-１号横穴墓の土器と考えた方が良さそうである。**141-5**はＥ群の上段レベル列の下方を表土掘削している際にＥ-７・８号横穴墓付近から出土したものである。

出土遺物

141-1～**7**は須恵器で、**1**～**5**は蓋坏の**1**～**3**は蓋、**4**・**5**はかえりのある身である。**3**と**5**は押しつぶされて歪な形態を呈している。**6**・**7**は当該横穴墓群内で唯一出土した有蓋高坏である。蓋坏と比較すると丁寧な作りである。平べったい坏部にかえりを有し、脚柱部には三角形スカシを３方に入れている。

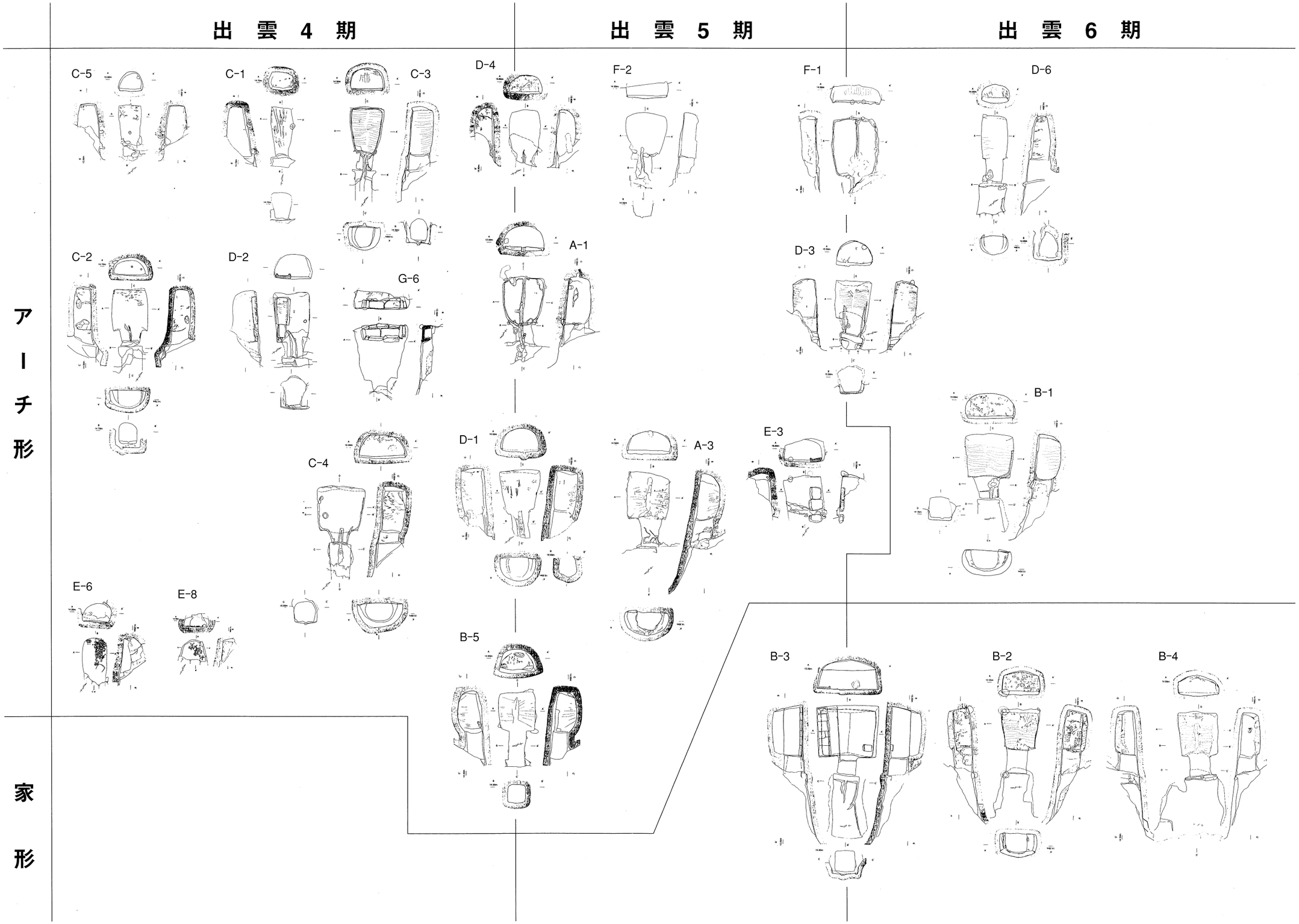
142-8は鉄鏃である。短頸鏃で、頭部が平頭で、関が無くそのまま棘箆被が付き茎部へ続くものである。中央部で折れ曲がり反っている。

表２－１　小浜山横穴墓群一覧表

横穴墓名	時期（大谷編年）	玄室 平面形態	天井形態	特徴	副葬品《土器》（大谷型式）［蓋坏の（ ）は主でない型式］ 蓋坏	高坏	瓶	提平瓶	長頸瓶	その他	副葬品《金属器》（個数） 大刀	鉄剣	刀子	鉄鏃	鉄斧	耳環	副葬品《玉類》（個数） 勾玉	切子玉	丸玉	小玉
A－１号横穴墓		縦長長方形（両袖不明瞭）	アーチ形	周溝・中央溝あり												１点				
A－２号横穴墓				製作途中																
A－３号横穴墓	出雲５	正方形（やや縦長）	（アーチ形）	肋骨状加工	Ａ７型					直口壺 平瓶Ｃオ型				１点（短頸）						
B－１号横穴墓	出雲６	正方形	アーチ形	右側壁沿いに周溝 肋骨状加工	Ｃ１型															
B－２号横穴墓	出雲６	正方形（左袖短い）	切妻家形	肋骨状加工・軒が両側壁にあり	Ａ８型	低脚無蓋 Ａ７型														
B－３号横穴墓	出雲５～６	横長長方形	切妻家形	閉塞石残存・左側に屍床、その上に石床	Ａ７型 Ａ８型				１型 ２型							金環４点				
B－４号横穴墓	出雲６	縦長長方形	切妻家形	肋骨状加工・奥壁と両側壁に不明瞭な軒あり・床面に溝状加工	Ｃ型					甕破片										
B－５号横穴墓		縦長長方形（正方形に近い）	アーチ形	肋骨状加工												１点				
C－１号横穴墓		縦長長方形（無袖）	アーチ形	羨道部が不明瞭 床面に溝状加工									１点							
C－２号横穴墓	出雲４	縦長長方形	アーチ形	丁寧な仕上げ	Ａ４型	長脚無蓋 Ａ３型	Ａ５型			台付長頸壺			４点		有肩袋状１点	**金環２点**				
C－３号横穴墓	出雲４	縦長長方形（両袖不明瞭）	アーチ形	周溝あり・肋骨状加工・須恵器床	Ａ５型					須恵器床の甕							１点	１点	１点	４８点
C－４号横穴墓	出雲４	正方形	アーチ形	前半部に周溝あり	Ａ４型	長脚無蓋 Ｂ２型				土師器椀		１点（鍔・鎹）	１点							
C－５号横穴墓	出雲４	縦長長方形（無袖）	アーチ形		Ａ４型（Ａ３a・Ａ５型）					甕破片						１点				
D－１号横穴墓	出雲５	縦長長方形	アーチ形	両側壁の長さ違う 床面に溝状加工	Ａ７型					直口壺 平瓶オ型						金環１点 不明１点				
D－２号横穴墓	出雲４	縦長長方形	アーチ形	両側壁の長さ違う・入口付近に中央溝・石床	Ａ４型（Ａ５型）						１点（鍔・鎹・鞘尻・鞘尻留金具）		７点	２３点（短頸・長頸）						
D－３号横穴墓	出雲５～６	縦長長方形（右袖短い）	アーチ形	両側壁の長さ違う・前半部に平行溝・肋骨状加工	Ａ７・Ａ８型（Ａ４型・不明）					甕破片						金環１点				
D－４号横穴墓	出雲５	縦長長方形（両袖不明瞭）	アーチ形		Ａ７型（Ａ６型）			提瓶 Ｂ３型					２点			金環４点				
D－５号横穴墓	出雲４	縦長長方形	アーチ形	右側周溝	Ａ４型								１点			１点				２点
D－６号横穴墓	出雲６	縦長長方形	アーチ形	床面に溝状加工	Ａ７型 Ａ８型		台付 Ａ８型			大型直口壺・直口壺と甕破片			１点	１点（長頸）	無肩袋状１点					
E－１号横穴墓	出雲４～５	縦長長方形	アーチ形	床面及び右側壁に溝状加工	Ａ４型 Ａ７型											１点				
E－２号横穴墓	出雲４～５	縦長長方形	アーチ形	右側周溝	Ａ６型 Ａ７型								１点			金環１点				

表２－２　小浜山横穴墓群一覧表

横穴墓名	時　期	玄　室			副葬品《土器》（大谷型式）［蓋坏の（ ）は主でない型式］						副葬品《金属器》（個数）						副葬品《玉類》（個数）			
	（大谷編年）	平面形態	天井形態	特　徴	蓋　坏	高　坏	瓶	提平瓶	長頸瓶	その他	大　刀	鉄　剣	刀　子	鉄　鏃	鉄　斧	耳　環	勾　玉	切子玉	丸　玉	小　玉
Ｅ－３号横穴墓	出雲５	縦長長方形	アーチ形	石　床	Ａ７型					壺底部						１点				
Ｅ－４号横穴墓		不　明	不　明	奥壁のみ残存																
Ｅ－５号横穴墓		不　明	不　明	奥壁のみ残存																
Ｅ－６号横穴墓	出雲４	縦長長方形	アーチ形	礫　床	Ａ４型															
Ｅ－７号横穴墓		縦長長方形	アーチ形													金環１点				
Ｅ－８号横穴墓		縦長長方形	不　明	礫　床																
Ｆ－１号横穴墓	出雲５～６（出雲４）	縦長長方形	アーチ形	周溝・中央溝あり	Ａ７型Ａ８型	低脚無蓋Ａ４型				高坏の蓋短頸壺の蓋			１点				１点	１点		
Ｆ－２号横穴墓	出雲５	正方形	アーチ形	短い中央溝	Ａ７型															
Ｇ－１号横穴墓		縦長長方形	不　明	周　溝？																
Ｇ－２号横穴墓	出雲４	縦長長方形	不　明	奥壁沿周溝？	Ａ４型						１点（柄）									
Ｇ－３号横穴墓	出雲４	縦長長方形	アーチ形	床面に溝状加工				Ｃエ型												
Ｇ－４号横穴墓	出雲４	不　明	不　明		Ａ４型Ａ５型															
Ｇ－５号横穴墓		不　明	不　明								１点		１点							
Ｇ－６号横穴墓	出雲４	縦長長方形	不　明	組合式箱式石棺	Ａ４型Ａ６型						１点（鍔・鎹・吊金具）									



第143図　小浜山横穴墓群（第10支群）遺構一覧図（S＝1/160）

第6章　小浜山横穴墓群の調査から

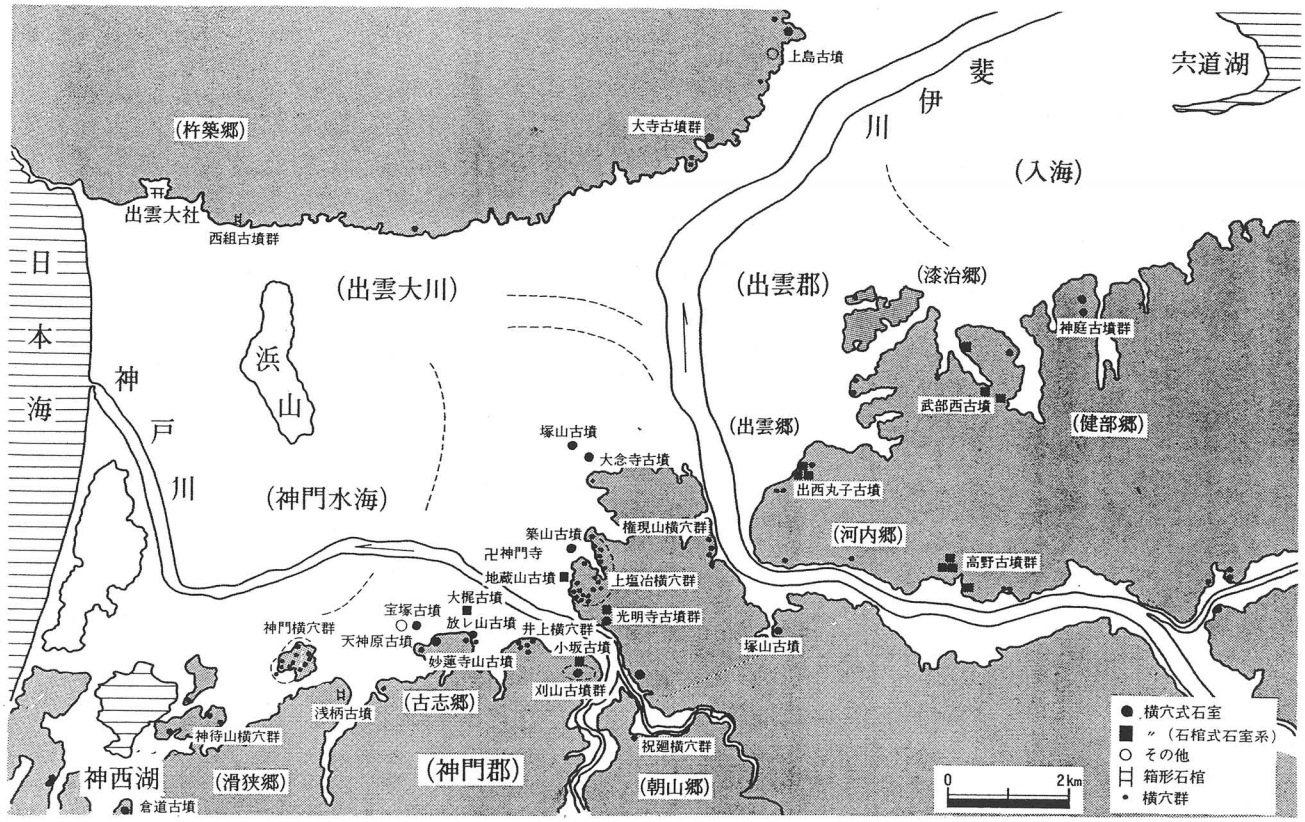
今回調査を実施した小浜山横穴墓群は出雲平野の西方にあたり、神門川下流の左岸にある独立丘陵に開口している。当時は出雲国風土記における神門水海が現在の平野に大きく入り込んでいたと考えられることから、この丘陵の西側は入海が近接していたものと考えられる。

今回、小浜山横穴墓群として調査した横穴墓は35基であるが、調査範囲外にも数基の横穴墓が開口しているし、この真幸ヶ丘丘陵の各所には古くから知られている福知寺山横穴墓群や東谷横穴墓群など、多くの横穴墓が存在しており、丘陵全体が一つの横穴墓群として神門横穴墓群と称されている。

また、神門横穴墓群の東には妙蓮寺山古墳・放れ山古墳・宝塚古墳など横穴式石室をもつ古墳が知られている。これらの石室を持つ古墳は神門川右岸の大念寺古墳・上塩冶築山古墳・地蔵山古墳などの首長墓に次ぐ系列の古墳として捉えられている。また、神戸川右岸の首長墓の背後に位置する丘陵にも上塩冶横穴墓群があり、神門川を挟んだ両岸のそれぞれに系列をなす古墳と大規模な横穴墓群が形成されていることが分かる。

このように小浜山横穴墓群も神門横穴墓群の一支群にすぎないわけであるが、しかしながら神門横穴墓群においては初めて行われた本格的な調査であり、時期や形態にもバリエーションがあることから、神門横穴墓群の大まかな特徴をおそらくは示しているものと思われる。

以下、この横穴墓群のいくつかの特徴について考えてみたい。なお、以後は神門横穴墓群の一支群として捉え小浜山支群とよぶこととする。



第144図　出雲平野の主要古墳と横穴墓分布図（『えとのす』19より）

第１節　横穴墓の掘削技法

神門横穴墓群は岩盤が比較的軟質であることもあってか、掘削痕が良好に残っている横穴墓が多く、調査対象となった小浜山支群も同様に加工状況が観察できる状態であった。このため横穴墓の図化にあたっては玄室の造墓技法を出来る限り読みとるよう心がけた。ここでは、掘削技法について他の横穴墓群も含めて整理する。また、掘削技法と玄室形態との関係についてもあわせて検討してみたい。

（１）掘削痕について

小浜山支群において見られる掘削痕は、幅５～８cmほどで先端が弧状を呈するものがほとんどであった。これを円刃痕と呼ぶこととする。また、床面などによく見られる掘削痕として溝状の掘削痕がある。これは幅２～３cm、深さ２～３cmほどの溝が玄室の主軸方向に平行に何条もほどこされるものである。これを溝状掘削痕と呼ぶこととする。今回の調査で確定できた加工痕については基本的にはこの２種類である。幅５cm程度の先端が平刃の掘削痕と見られるものもあったが、これらを型取りして観察したところやはり先端は湾曲していることから、これらも円刃痕の一部であった。工具の数は各壁の界線や軒の段などの細部にも幅広の円刃痕がのこっていることから、荒彫りから細部の加工まで幅広の円刃の工具で行っていると考えられる。横穴墓造墓における工具の数は２・３種類程度であったと考えられる。

（２）掘削技法

次に、前記の工具の特性を組み合わせて行う加工や、特徴的な加工方法を技法として取り上げておきたい。

・溝切技法

この技法は溝状の加工を５～10cmほどの間隔で同じ方向に入れておき、この溝と溝の間の凸部を円刃の工具でハツル方法である。小浜山支群Ｃ-１号穴床面では溝状加工がよく残っており（写真２）、この方法によって掘削されたものと思われる。神門横穴墓以外でも地蔵堂２支群１号穴（松山1994）では溝状加工とその間を削り取った円刃痕がよく残っている（写真４・５）。小浜山支群B-４号穴の床面でも溝状加工と円刃痕が残っている。

写真１　小浜山Ｃ－３号穴

・肋骨状加工

この技法は天井から側壁にかけて最終的な仕上げの段階での加工

写真２　小浜山Ｃ－１号穴
（溝状加工痕）

写真３　小浜山Ｂ－４号穴
（溝状加工と円刃痕）

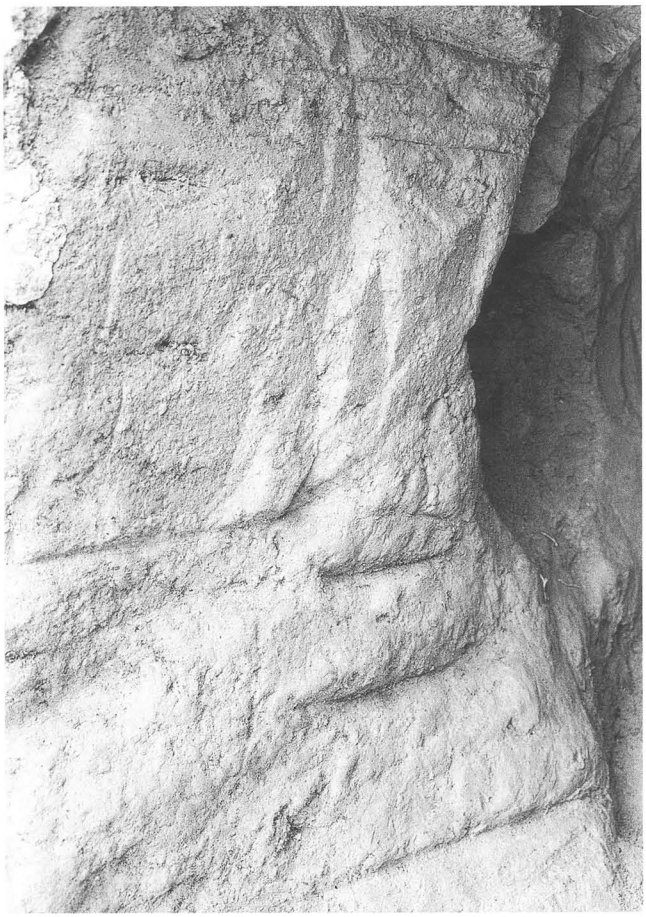


写真４　地蔵堂第２支群２号穴
（溝状加工と円刃痕）

写真５　地蔵堂第２支群２号穴
（円刃痕）

方法である。天井の頂部から左右の側壁に削りおろしていくもので、掘削痕が幅10cmほどの断面皿状の溝になる。これが平行に天井全面に入れられ、天井頂部の棟線部分にも同じ溝が入れられる。全体として肋骨状を呈することになる（写真１）。小浜山支群Ａ-３・Ｂ-２・Ｂ-１・Ｂ-４・Ｂ-５・Ｃ-３・Ｄ-３号穴で見られる。神門横穴墓群の他の支群でも類例は多い。

このような加工方法は出雲平野の横穴墓の中では上塩冶横穴墓（27支群２号穴）でも見ることが出来るが、横穴墓の掘り込まれている岩盤が神門横穴墓と同じ凝灰質砂岩であることから、この加工方法と横穴墓の掘削される岩質とが対応することが分かる。また、出雲平野以外では佐田町尾崎横穴墓でも見ることが出来る。尾崎Ｉ支群５号穴は玄室形態が縦長長方形プランで天井はテント形を呈しており、神門横穴墓など出雲平野とは異なる形態をしているが掘削技法は共通している。佐田町には原山１号横穴など縦長長方形プランアーチ形で袖が徳利形を呈するものがあり、形態も出雲平野の横穴墓と共通するものがあり、神西湖南岸の丘陵を挟んで両地域の関係が注意される。

この掘削技法の時期は小浜山支群Ｃ-３号穴が最も古い例となる。この横穴墓から出土した坏蓋は天井部の周辺のみを削るもので大谷Ａ５類にあたり出雲４期[註1]に中でもやや後出するものである。尾崎横穴墓でもやはりＡ６類の坏蓋が出土していることから、出雲平野での横穴墓の出現からやや遅れてこのような掘削技法が用いられるようである。また、家形の出現は出雲５期であることから家形の出現より一足早くこの技法が出現しており、家形に加工するために採用されたわけではないことが分かる。

第２節　横穴墓の形態と掘削技法

今回の小浜山横穴墓群の調査では、合計35基の横穴墓を調査した。この横穴墓は比較的軟質な岩盤に掘削されていたこともあってか、横穴墓の各所に掘削痕がよく残っており、工具の形や大きさなどが観察できる状態であった。調査においても、このような掘削痕を極力記録にとり横穴墓の造墓の工程を観察した。調査の中で横穴墓の形態と造墓の方法がある程度対応することがわかった。横穴墓の分類にあたっては形態と造墓工程という技術的な点を加味して行うこととする。

横穴墓の形態は天井の形態によって大きくはアーチ形と家形にわけることができる。以下それぞれの形態の特長と典型的な横穴墓について概観しておきたい。

（１）アーチ形

アーチ形としたのはいわゆる蒲鉾形を呈するもので、この横穴墓群では蒲鉾を縦長にし、垂直になった面に玄門を設けている。横断面が半円形を呈するが、奥壁は側壁と明確に区別される形で作られており、垂直に立ち上がるものである。なお、前壁については明確な区別をもたないものがある。

アーチ形の中にも細かく見ると、平面プランが正方形と縦長長方形の両者がある。また、掘削技法においても肋骨状加工のあるものとないものがあり、平面プランと掘削技法を合わせると４タイプに分類することができる。

出雲4期

地蔵堂２支群１号穴

出雲4期（後半）

底部は周辺のみへら削り

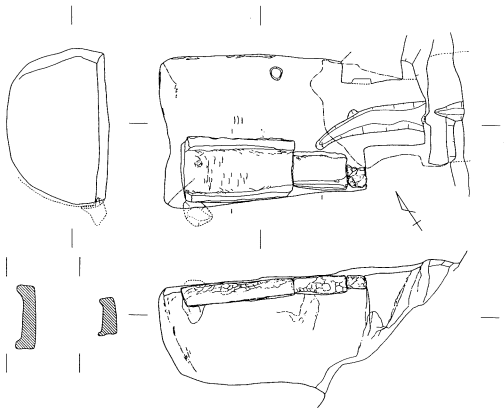
小浜山支群Ｃ－３号穴

出雲5期

小浜山支群Ｄ－３号穴

第145図　長方形プランアーチ形の変遷

- アーチ形
  - 正方形プラン
    - 肋骨状加工あり
    - 肋骨状加工なし
  - 縦長長方形プラン
    - 肋骨状加工あり
    - 肋骨状加工なし



第146図　小浜山Ｄ－２号穴

縦長長方形プランアーチ形

このタイプのうち、肋骨状加工を施さないものとしては小浜山支群Ｃ－２号穴・Ｄ－２号穴があげられる。また、その他の横穴墓群のなかでは地蔵堂２支群１号穴などがある。

小浜山Ｃ－２号穴

玄室は、奥幅1.35ｍ・前幅1.45ｍで前幅が広くなっている。アーチ形については奥幅の方が広い場合がほとんどなので、例外的な平面形態である。長さは1.72ｍで縦長長方形プランを呈する。奥壁は高さ0.62ｍで各壁との界線は明確にされている。前壁は袖部分は明確にされているが、天井との境は不明瞭でそのまま羨道へと移行する。このため玄室から羨道にかけての天井のラインはあまり段差がない。床面はほぼ水平に近くやや奥から前へと傾斜する。羨道は床面の中央に細い溝があり、羨門側の12㎝部分が急傾斜している。羨門部では羨道と前庭で20㎝の段差ができ、前庭の幅を広くすることで羨門ができる。閉塞石を受ける刳り込み等の加工はない。

各壁は最終的にはかなり平滑に仕上げられているが、幅10㎝ほどの円刃の加工痕が右側壁の前側や床面等でみることができる。

小浜山Ｄ－２号穴

前庭は大半が失われているが幅1.15ｍを測る。羨道は長さ0.65ｍ・幅0.68ｍで中央には浅い排水溝が設けられている。

玄室は奥幅1.7ｍ。前幅1.2ｍでやや奥が幅広になる羽子板形のプランである。長さは1.84ｍ・高さ1.05ｍを測る。奥壁は内傾しているが界線は天井部を除けば明確にされている。袖は右側が狭いが、明確に作られている。ただし、左右で袖の位置がずれている。

内部には石床が左側壁に沿って置かれている。大小二つの石材によって構成されるが、それぞれの大きさがかなり異なっており、かなり異質な感じのする石床で、転用材の可能性も考えられる。両方ともに両側に縁を持っており、奥側の大型のものは奥が幅広になっている。また、石床と袖との間にも岩盤と同じ石が置かれている。

地蔵堂２支群１号穴

この横穴墓は妙蓮寺山古墳の西側谷奥に位置し13穴からなる横穴墓群である。２支群１号穴の玄室は奥幅1.14ｍ・長さ２ｍ・高さ１ｍを測る。縦長長方形プランで、袖部分が明確に無く徳利状になっている、このため前壁といえる部分はない。奥壁はやや膨らんだ三角形を呈し、垂直に立ち上がり界線も明確である。床面には各壁に沿って排水溝が造られており、玄門で合流し羨道、前庭へと抜ける。

玄室床面には礫床が施されている。

玄室の加工状況は、天井部は上から下へと削り落とすように加工されており、その他の壁は水平方向に加工されている。

縦長長方形プランアーチ形（肋骨状加工）

このタイプの形態的特長は基本的には肋骨状加工を施さないものと共通しており、最終的な仕上げの差で分類したものである。小浜山支群ではC-3号穴・D-3号穴がある。

小浜山C-3号穴

玄室は長さ1.93m・奥幅1.38m・前幅0.8m・高さ0.95mを測る。平面プランは奥が広く前に向かって徐々に狭まる羽子板状で、袖部分は明確になくカーブしながらそのまま羨道に移行する徳利形である。奥壁はほぼ垂直に立ち上がっており界線も明確である。前壁は袖がわずかしかない徳利形の平面プランであることからわかるように明確には造られていない。横断はほぼ半円形で天井形態はアーチ形である。床面には外周に溝がめぐっており、玄門中央で合流し羨道へと続く。溝の幅は5～10cmで深さ3.4cmである。

掘削技法としては、天井は肋骨状の加工が施されており、天井頂部から両側壁に平行に削り落とされた加工痕が幅10cmの溝状に残っている。出土した須恵器から肋骨状の加工としては最も古い段階のものである。

小浜山D-3号穴

この横穴は縦長長方形アーチ形を呈するが、玄室内から出雲5期の須恵器を出しており、このタイプでは新しい時期のものである。玄室平面プランは奥幅の広い羽子板状をしている。奥壁は内湾するが、しっかり立ち上がっており各壁との界線も明瞭である。前壁は右袖が幅狭になっているが下半については界線が明瞭にある。床面には排水溝があるが、羨道側壁に沿って、そのまま玄室内に伸びる。玄室の側壁に沿わずに直線的で玄室中央で終わるなど、かなり簡略化されているといえる。前庭は主軸が玄室よりやや北に振っている。床面と側壁には閉塞用の溝が設けられているが、羨道と前庭の境界をなす床面の段より手前にある。天井は崩落していて分からないが、床面と天井とでは羨道と前庭の境がズレていた可能性が考えられる。

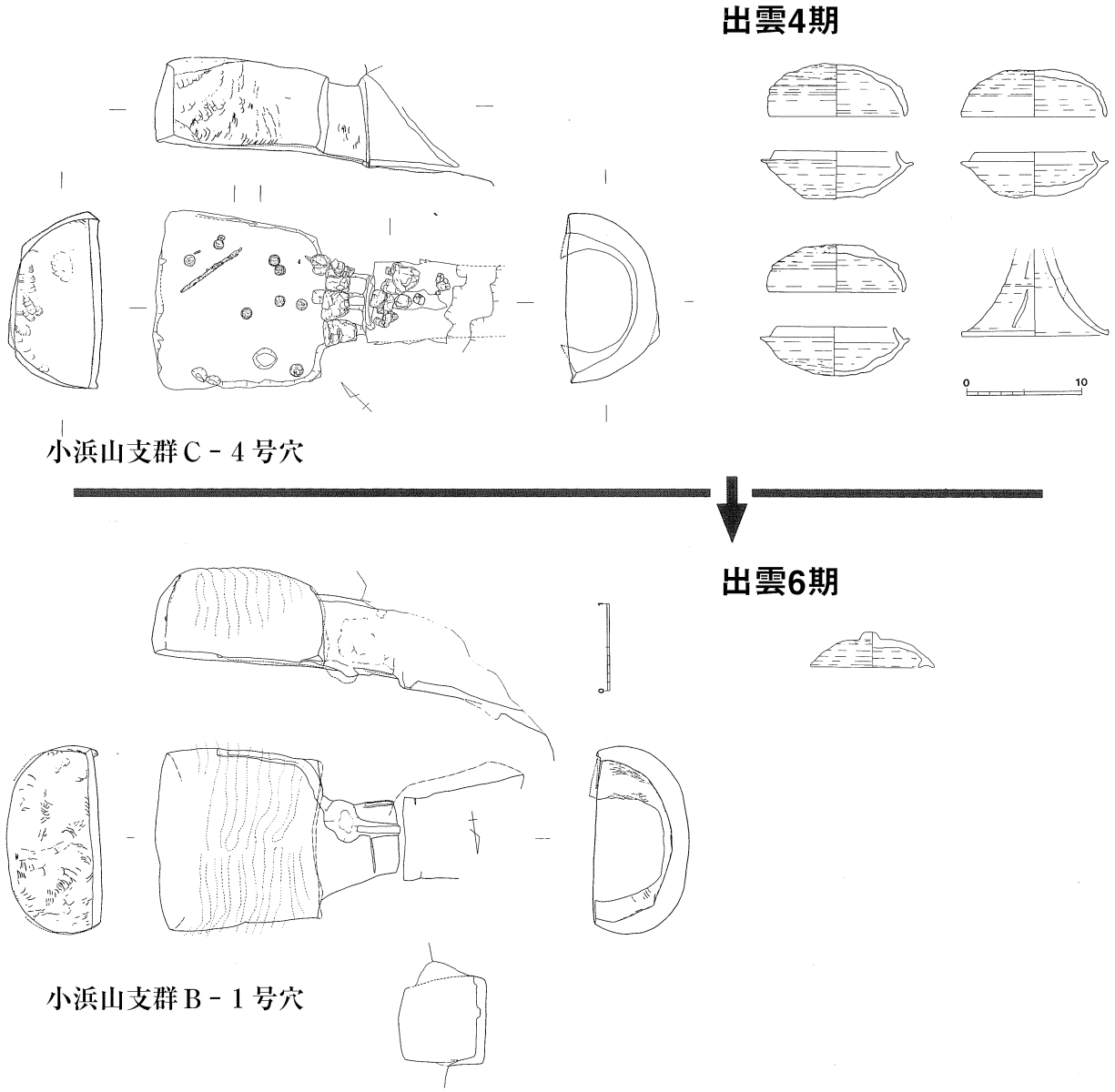
玄室天井は肋骨状の加工がなされており、棟を示す溝もあるが軒を示す加工は施されていない。

正方形プランアーチ形

小浜山B-1・C-4号穴などアーチ形の中でも正方形プランを呈するものが小浜山支群にはある。C-4号穴は出雲4期の須恵器を持っていることから、横穴墓の出現期より平面プランは正方形と縦長長方形の2者が存在していることになる。ただし、正方形プランアーチ形の数は現状では少ない。

小浜山C-4号穴

前庭は幅0.9m・長さ1mを測る、もともとは狭長なプランであったと推定される。床面中央には幅8～20cm・長さ83cm・深さ4cmの排水溝がある。溝の横断はU字形で、底には垂直にあたった円刃痕が連続して残っていることから、U字の鍬のようなもので掘削されたものと思われる。



第147図　正方形プランアーチ形の変遷

羨門は幅0.7mで床面には幅10cm・長さ70cm・深さ２～５cmの溝が設けられている。この溝と羨道床面とでは８cmの高低差がある。この溝は羨道と前庭の溝をつなぐ位置にあることから、閉塞板受けではなく、排水溝の可能性がある。また、前庭部の羨門付近には横穴墓の掘削されている砂岩のブロックが置かれている。これは閉塞のために使用されたと考えられる。

羨道は前幅0.7m・奥幅0.1m・長さ0.45m・高さ0.88mを測り、逆台形のプランである。玄室からの溝がそのまま側壁に沿って続いており、さらに中央にも溝が設けられている。

この横穴墓でも、羨道には玄門のラインより手前に石を設置して玄室の内外を分けている。幅30cm・高さ30cm程度の石を３個横並びにし、右端の石の上には小さめの石がいくつか置かれている。これらの石は横穴墓の掘削されている砂岩で、自然石のようにも見えるが加工痕が見られ、特に側面

は平らに加工されている。これは玄門の幅に合わせるために石材の幅を調整したためと思われる。この石の機能は明確にはしえなかったが、羨門からは離れているため閉塞施設に関わるものではないようである。玄門のラインを意識して石を設置しているようなので玄室内外を分けるものと考えておきたい。

玄室は長さ1.92m・前幅1.63m・奥幅2.06m・高さ1.05mを測り、開口方向はS−47°−Eである。平面プランはほぼ正方形であるが、奥が広く徐々に前が狭まる羽子板状を呈する。奥壁は高さ0.9mで界線は明瞭で、垂直に立ち上がっている。玄室横断は半円形で天井形態はアーチ形である。前壁も、高さ0.81mで界線が明確で垂直に立ち上がり、袖部分も明確に造られており、左袖0.33m・右袖0.3mを測る。しかしながら天井から玄門までの幅が7cmしかなく、奥壁に比べると幅・高さとも小さくなっていることがわかる。

床面は奥から玄門に向かって5～10度で傾斜している。また、床面の各壁には羨道に延びる溝が施されている。奥壁より65cm手前から加工され奥壁には達していない。溝は幅5～7cm・深さ5cmである。

正方形プランアーチ形（肋骨状加工）

小浜山支群ではB-1号穴と簡略化されたアーチ形であるがA-1号穴がある。

小浜山B-1号穴

前庭は幅0.95m、現存長1.38mを測る。外に向かって開く台形プランである。羨門は幅0.95mで床面には幅8cm、高さ12cmの閉塞施設を受けるための溝状の加工がある。この加工は中央部ではほとんど前庭とフラットな面になっているが、両側では深さ10cmの段がついている。また、羨道床面よりも12cm低くなっている。羨道は長さ0.9m・前幅0.82m・奥幅1.2mを測る。床面には右半分に径50cm・深さ15cmのピット状の加工があり、このピットには玄室からの溝が繋がり、ピットからさらに羨門まで溝が出ている。この溝は羨道の中央やや右寄りにあり幅15cm・深さ5cmである。また床面には羨門より1.81cm奥に軽い段差がついている。

玄室は前幅1.81m・奥幅2.04m・長さ1.93m・高さ1.09mで床面積が比較的広く、奥が広いがほぼ正方形プランである。開口方向はN−83°−Wである。奥壁は高さ0.9mでほぼ垂直に立ち上がっているが、上部は側壁との界線が曖昧になり内湾している。基本的には奥壁を明確に造っていることから玄室形態はアーチ形を呈する。前壁は上部はやや内側に内湾しているが、ほぼ垂直に立ち上がり、右袖は幅0.41m、左袖は0.21mで、玄門頂部から前壁頂部までは16cmとわずかであるが、前壁・天井との界線は明確である。

床面には右側壁から右袖に沿って幅12cm・深さ5cmの溝が設けられている。この溝は奥壁までは達しておらず、奥から0.6mのところが端になっている。また床面は前庭部に比べると水平に近い。

掘削技法としては最終的な仕上げの加工として天井から側壁にかけては肋骨状加工が見られる。幅7～12cmで断面U字形の掘削溝が天井の中心から床面に向けて平行に施されている。

奥壁もやはりU字形の工具痕が見られる。特に一定の方向に加工しているような様子は見られない。

アーチ形の特徴

縦長長方形プランアーチ形の特徴としては、平面プランは奥幅が広く、玄門側に徐々に幅狭になる羽子板状の平面形をなす。また前壁がまったく意識されず、袖部分が徳利状に丸く処理されるものもある（地蔵堂２支群１号穴）。前壁は明確に作られていても袖の幅が狭かったり、平面図では明確に袖が表現されていても、天井は羨門と玄室との境がなく前壁のつくりはルーズになるものが多い。玄室の前側ほど作りが簡略化される傾向があるといえる。このような形態の特徴を生む理由としては、玄室を造る工程として、最初に完成時の玄室の高さと幅で奥壁を完成させ、これに合わせながら前方に向かって玄室を広げながら掘削する方法が想定される。このために前側が簡略される傾向が生じたのではないだろうか。

また、正方形プランも数は少ないが当初より存在していることになる。このプランの差の要因については分からないが、掘削技法の差は無いようである。

（２）家形

- 家形
  - 切り妻
    - 長方形プラン
    - 正方形・横長長方形プラン
  - 寄せ棟
    - 長方形プラン
    - 正方形プラン

縦長長方形プラン切り妻家形

小浜山支群では天井形態が家形を呈するものがあるが、その多くは縦長長方形プランである。Ｂ-２号穴が典型例である。また同じ神門横穴墓群の東谷支群でも家形石棺を内蔵する同一形態の玄室がよく知られており、神門横穴墓群に特徴的な玄室形態であることが分かる。

小浜山Ｂ-２号穴

前庭は幅1.1m～1.67mで長さ1.81mを測る。現状では不整形な床面となっているが、幅1.1mの長方形を呈していたと思われる。羨門は羨道床面より６cm低くなっているが、刳り込み等の加工はない。羨門左端には径26cmのピットがあるが、用途は不明である。羨道は幅0.94m・長さ1.09m・高さ0.85cmで断面は長方形である。

玄室は前幅1.33m・奥幅1.7m・長さ1.67m・高さ1.05mで、奥が広く前の狭い羽子板形の平面プランを呈している。開口方向はN−84°−Wである。

奥壁は、高さ0.8mで天井まで直線的に立ち上がり、天井との界線のない一連の面になっている。このため天井は切り妻型になっている。側壁は高さが右側壁0.75m・左側壁0.7mを測り、垂直に立ち上がり天井との境には軒を示す段を有する。この段は幅が一定せず高さもやや上下する粗い造である。天井は高さ1.0mと低く、縦断・横断ともやや丸みを持っている。天井は肋骨状加工によって仕上げられており、天井中央から両側壁に向かって幅10cmの平行な掘削痕が見られる。前壁は右袖31cm・左袖８cmで、玄門から天井界線まではわずかに数cmで、明確なのは右袖のみである。

各壁面には整形段階の工具痕がよく残っており、幅10cmの刃部の丸い工具であることわかる。奥壁・側壁では水平方向に連続して削っているようである。各壁の界線部分も同じ工具で角付けしていることが分かる。天井部の肋骨状加工も加工痕の断面がU字形になっていることから同じ工具によるものと思われる。また、軒の段の加工も先端も丸くなっており同様の工具の可能性がある。

このような天井形態が切妻になるタイプの家形が神門横穴墓には多く、この横穴墓群に特徴的な玄室形態といってもよい。前壁が明確に造り出されないことや、肋骨状の加工痕などからアーチ形との共通点が見て取れる。掘削技法や造墓の工程はアーチ形と変わらず、最終段階で軒の加工を施し家形にしたものと思われる。

横長長方形プラン切り妻家形

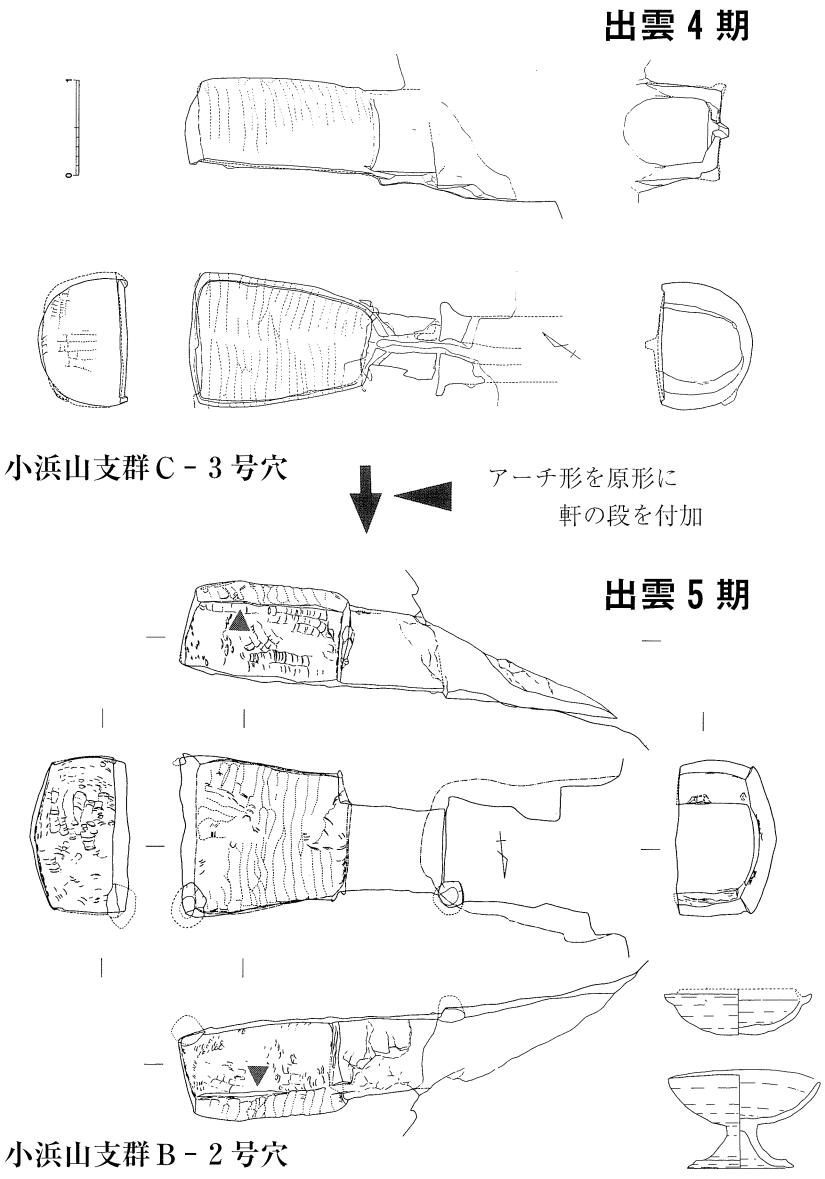
神門横穴墓群では横長のプランを呈するものはほとんどなく、小浜山B-3号穴は例外的な玄室形態である。

小浜山B-3号穴

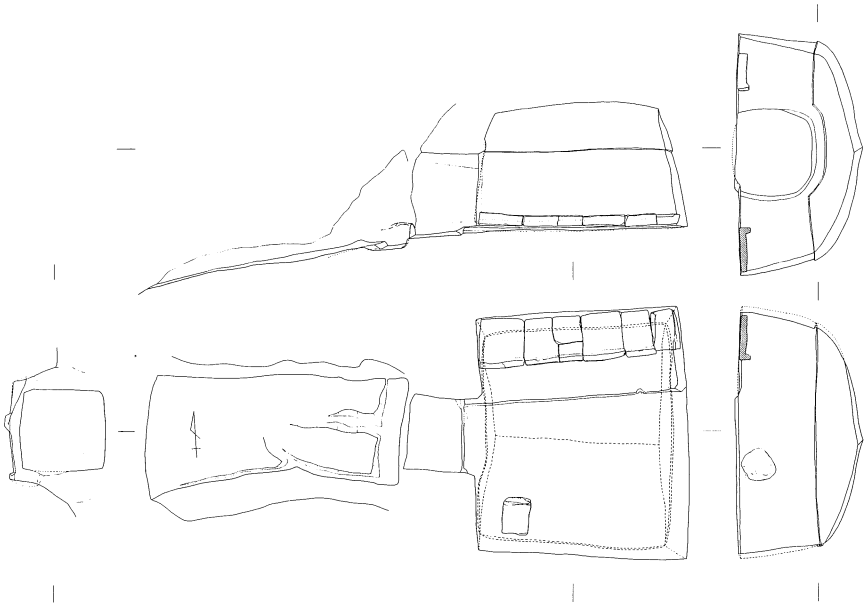
前庭は幅1.15m・長さ2.67mを測り前方に傾斜している。床面には閉塞石の受ける部分から、中央と右側壁に沿って排水用の溝が設けられている。側壁沿いの溝は途中で分岐している。

この横穴墓では閉塞石が残っていた。床面に幅0.2m・長さ1.15m・深さ0.1mの閉塞石を受けるために溝状に掘り込み、そこに長さ110cm・幅15cm・高さ25cmの長方形の柱状の石を台としておき、その上に閉塞の2枚の板石をのせている。閉塞石は右側が幅45cm・長さ85cm・厚さ10cmを測り、2枚並べると台形になる。

玄室は前幅2.45m・奥幅2.68m・長さ2.23m・高さ



第148図　アーチ形からアーチ系家形へ



第149図　小浜山Ｂ－３号穴

1.35ｍを測り、前側が若干狭くなるが、ほぼ横長長方形プランである。横長長方形プランをとるものは今回の調査中で一例のみである。開口方向はN－86°－Wである。非常に整美な横穴墓で、全面を最終的には幅の狭い工具で平滑にし磨いたような状態になっている。

奥壁は高さ80㎝で天井との境には幅２cmの軒の段を有するが、天井にあたる部分の高さは44cmである。天井が傾斜せずに奥壁から直線的に立ち上がっている。高さが80㎝を測る奥壁の途中に段を加工したものである。寄棟の天井形態を意図したものと思われるが、構造上は切り妻形の天井になっている。

前壁も奥壁同様であるが、軒の加工段が玄門の上部では幅２cmで縁取るように加工されている。側壁は右側壁が高さ85cm・左側壁が高さ80cmで、幅２cmの刳り込みが水平に加工されている。

天井は構造的には切り妻形で、側壁から外反ぎみに立ち上がり、横断はやや膨らんだ形になっている。また頂部には棟のラインが明瞭にあり、縦断では中央やや奥側が高くその前後にやや傾斜している。この棟の付近の横断が若干深く掘り込まれているのは明確に棟を加工したためと思われる。

この横穴墓は四壁に軒の段を加工していることから、寄せ棟の天井形態を意識したものであることが分かるが、奥壁から天井までが直線的であることや、天井横断の膨らんだ丸みのある形態は、Ｂ-２号横穴などの切り妻形の天井と共通した特徴がある。つまりは肋骨状の加工方法と同じ手法によるものと考えられる。横長プランで非常に整美な加工がされており、この横穴墓群の中では特異なものであるが、造墓技術などは共通したものと考えられる。

床面はほぼ水平に造られ、左側に幅90cm・高さ８cmのベット状の段がある。このベッドの幅は左袖幅より大きいためベッドの右側縁が羨道部の段まで延びている。左側壁に沿って、幅0.4m・長さ2.1mの６枚の石材からなる石床が設置されている。また、右袖から28cmのところには石床と同じ加工をした切石が一枚置かれている。この石のみを枕に使用した可能性が考えられる。

切り妻家形の特徴

神門横穴墓群での家形は天井のほとんどが切り妻になっている。これはアーチ形を原型にし、そこから家形へと加工を進めていく造墓技法によるためと思われる。極端な言い方をすればアーチ形を作

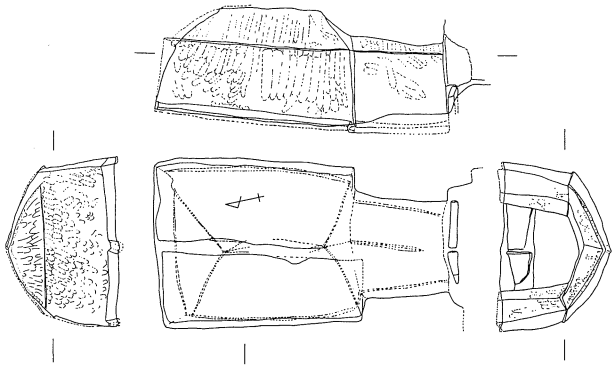
りそれに軒の段を加工し家形にリフォームしている。アーチ形は奥壁を垂直に立て、それに合わせて天井頂部から左右に削り込んでいくため、天井奥側がどうしても内傾してこない。軒の段は全周させ寄せ棟を意識したものもあるが、天井が切り妻になるのは掘削技法に制約された面があったものと考えられる。切り妻家形については技術的な系譜からアーチ系の家形と捉えることができる。

縦長長方形プラン寄せ棟家形

神門横穴墓群では１基の天井形態が寄せ棟を呈するものがある。

小浜山Ⅰ-１号穴

玄室は奥幅1.75m・前幅1.6m・長さ2.25mを測る縦長長方形プランである。各壁には天井との境に軒を示す段があり、天井は寄せ棟になる四注式になっている。ただし、平面プランが縦長長方形であることや奥壁から天井にかけての縦断面は奥壁がかなり内傾しており天井から奥壁にかけては屈曲せず、連続した感じになっている。また、天井は肋骨状の加工によって仕上げられており、形態・技法にアーチ形との共通点があることからアーチ形を基本形にしている可能性がある。



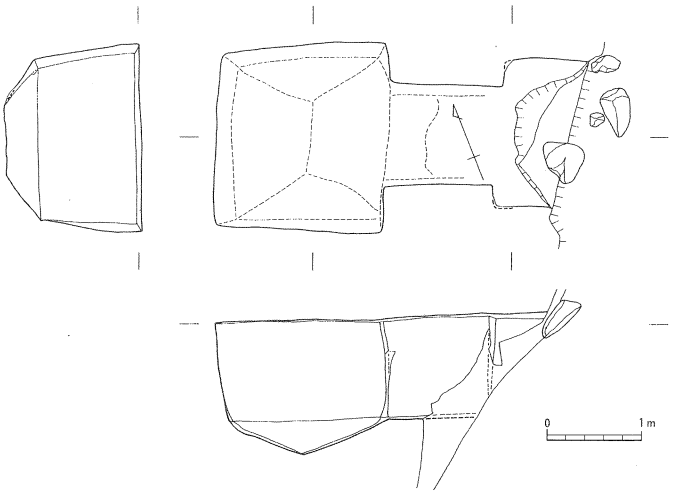
第150図　小浜山Ⅰ－１号穴

正方形プラン寄せ棟家形

このタイプは出雲西部では上塩冶横穴墓群でよく見られるもので、他では元権現山横穴墓群でも知られている。両者はともに凝灰岩の岩盤に造墓されており、神門横穴墓群とは地層が異なっている。

上塩冶第17支群11号穴（門脇1980）

玄室は長さ２ｍ・幅2.1mの正方形プランである。高さは1.5mを測り神門横穴墓群と比べると天井が高く、玄室空間が広く感じられる。各壁は垂直に立ち上がり、天井と壁の境は屈曲しており、整備な寄せ棟になっている。また、天井部分の高さが低い。また、加工痕には幅２cmほどの鑿でついたような穴が各所で見られる。これは荒彫り段階で細い工具で突くことで岩盤をある程度のブロックで削り落としていったものと思われる。このように寄せ棟家形正方形プランは凝灰岩に掘削されることや、



第151図　上塩冶横穴墓群第17支群11号横穴

工具痕や掘削工程がアーチ系のものとは大きく異なっているものと考えられる。

（3）その他

ドーム形縦長長方形プランを呈するものがある。しかしながら、これらはいずれも天井が低く、床面積の小さい小規模な玄室空間を呈していることから、意図的にドーム状の天井形態にしたというよりもアーチ形の簡略されたものと考えられる。

第3節　横穴墓の形態と変遷

神門横穴墓群の出現時期は出雲4期である。上塩冶横穴墓も同じ時期に出現しており、出雲西部では松江市や安来市など出雲東部に比べて横穴墓の出現が遅れることになる。

出雲4期の横穴墓

この時期の横穴墓の玄室形態は縦長長方形プランアーチ形と正方形プランのアーチ形である。天井形態はアーチ形にほぼ限られるが、平面プランは正方形・長方形の両方がある。また、細部を見ると袖が明確にあるものと徳利形を呈するものがある。また玄室床面には四壁に沿って外周には排水溝がめぐるものがある。

この時期の後半には肋骨状加工を施すものが出てくる。小浜山支群C-3号穴は周辺ヘラ削りによる坏身が出土していることから、この技法が横穴墓出現から若干遅れて現れることがわかる。

出雲5・6期の横穴墓

この時期には天井形態が家形のものが現われる。小浜山支群ではB-2・3号穴、H-1号穴、I-1号穴である。このうちI-1号穴以外の3基は寄せ棟ではなく切妻になっている。

B-2号穴は両側壁には天井との境に軒をしめす段を設けているが、奥壁にはこのような加工はなく、天井は肋骨状加工を施すものである。この横穴墓は軒の加工を除けばほぼアーチ形と変わるところがない。おそらくはアーチ形の空間を確保した後に、軒の加工を施し肋骨状加工を行ったものと思われる。このタイプは東谷支群にも見られるし、上塩冶横穴の27支群にもあり、この時期の主流をなす形態である。

B-3号穴も一見すると非常に整備な家形に見えるが、軒の段は奥壁にもあるものの天井は切り妻である。天井の横断もやや丸みをもっており、やはりアーチ形の空間から家形に加工したものと思われる。このようにB-3号穴も基本的な造墓技法はアーチ形の延長にある。ただし、このような横長長方形プランで工具痕を最後には綺麗に消すような整美なものは神門横穴墓群には他に例がない。

また、D-2号穴・B-1号穴のようにアーチ形を呈するものも引き続き造られているが、いずれも肋骨状の加工が施されている。

また、時期を示す遺物はないがI-1号穴は神門横穴墓群では唯一の寄せ棟の家形である。

第4節　石棺・石床・礫床・須恵器床

小浜山支群では石棺・石床などが内蔵されているものがあるが、ここでは玄室内の施設について簡単に整理する。

石床・石棺

石床はB-3・D-2・E-3号穴で検出されているが、3者はかなり様相を異にしている。これらはいずれも出雲4期の横穴墓で、この段階の石床はそれぞれに個性がある。また石材も横穴墓が掘削されている岩盤と同じ凝灰質砂岩である。ところが出雲5期のB-3号穴の石床は上塩冶横穴墓で見られるものと同じもので、横穴墓群を越えて定型化したものが使用されていることがわかる。石材は上塩冶横穴墓群で整美な寄せ棟家形が造墓される凝灰岩である。

石棺はG-6号穴で確認されたが箱式石棺の可能性が高く、石材は凝灰質砂岩である。出雲4期段階では家形石棺は使用されていない。H-1号穴は凝灰岩製の横口式の家形石棺が安置され、時期は出雲5期である。この家形石棺も上塩冶横穴墓群で見られるものと共通している。出雲5期になると上塩冶周辺で凝灰岩製の石床・石棺が製作され、上塩冶横穴墓群以外の横穴墓にもそれらが使用されることになる。

礫床・須恵器床

また、玄室床面に施される施設として須恵器床・礫床がいくつか検出されている。須恵器床を持つものはC-3号穴で大甕1個体の破片が使用されている。その他の例では地蔵堂2支群1号穴などがある。礫床はE-6号穴で検出された、その他にはやはり地蔵堂2支群2号穴に例がある。これらの横穴墓はいずれも出雲4期のもので、出雲5期には続かない。

第5節　上塩冶横穴墓群との比較

上塩冶横穴墓群は100基を超える島根県下最大規模の横穴墓群である。上塩冶築山古墳や地蔵山古墳など出雲西部の首長墓の背後にあり、神門横穴墓群とは神門川を挟んで対照的な位置にある横穴墓群である。ここでは上塩冶横穴墓群の典型的な横穴墓と神門横穴墓群とを比較してみたい。

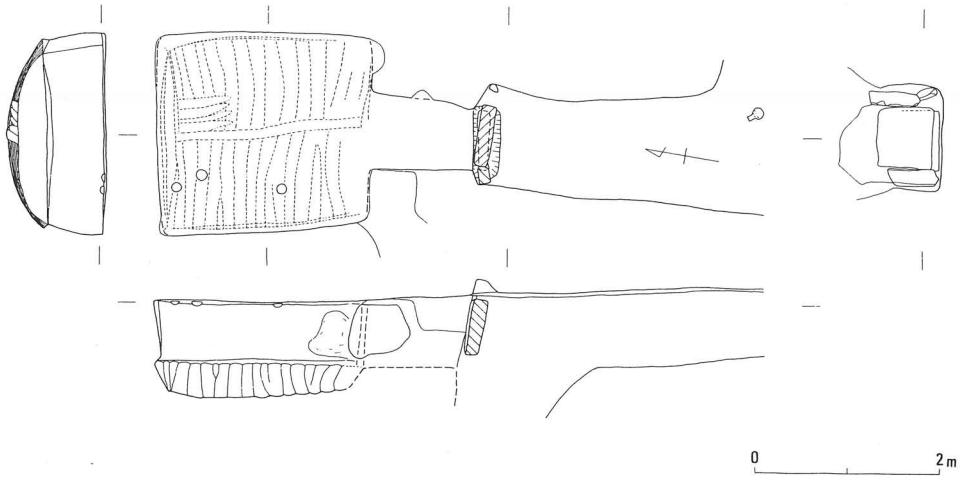
上塩冶横穴墓群における2者

上塩冶横穴墓群は凝灰岩の岩盤に造墓されており、軟質な凝灰岩質砂岩に掘削されている神門横穴墓群とは、造墓されている地層にまず大きな差がある。そこに造られている横穴墓は21支群3号穴などの家形のものが大半である。ただし天井は寄せ棟になっており、切妻を主とする神門横穴墓群とは形態的に大きなちがいがある。また、工具痕も幅の狭い突き刺したようなものが見られることから[註2]、硬質な凝灰岩を掘削するための工具の使用や掘削技法が想定される。このように上塩冶横穴墓群では、

地層・形態・工具痕など神門横穴墓群とは根本的な違いがあることがわかる。

上塩冶横穴墓群の一帯には凝灰岩質砂岩にも造墓がなされており、27支群２号穴（西尾1979）はその一例である。玄室は奥幅2.1m・長さ2.3mの縦長長方形プランである。天井は切り妻で肋骨状加工がなされている。各壁には天井との境に軒を示す段が加工されており四注式を意識しているものの、肋骨状加工から分かるように神門横穴墓群と同様にアーチ形を基本形にして造られていることが分かる。

このように上塩冶横穴墓群では凝灰岩と凝灰質砂岩の地層の差に対応して、形態差や掘削技法の差が生じていることが分かる。



第152図　上塩冶横穴墓群27支群2号穴

第６節　小浜山支群について

以上のように出雲平野の横穴墓の特徴を整理してきたが、これらをもとに小浜山支群について検討を行う。

（１）小浜山支群内の小単位

小浜山支群として調査した35基をさらに７個の小単位に分けＡ～Ｇとした。分類の根拠は平面分布のまとまりと、横穴墓の高低差によっている。西側斜面ではＡ群とＢ群の間は6.5mあり平面的に二つの単位に分けることが出来る。東側斜面ではＣ群は玄室床面の標高がほぼ14mであるのに対して、Ｄ群の玄室床面は１基を除いて15mで、比高差が1mあることになる。このような垂直分布の差も造墓単位を意図的に区分したものととらえることとした。Ｇ群は玄室床面が標高12mにあり最も低いレベルのものを一単位とした。Ｆ群は同レベルのＥ群とは平面的に区分することができ、平面的には近距離のＧ群とは比高差がある。Ｆ群は現状では２基しかないが玄室上半2/3は削平されていることから、西側にも横穴墓が存在した可能性がある。Ｅ群としたものは上下2段に分布しており、上段は

D群に下段はG群として捉えることも出来るが、上段はD-5号穴とE-1号穴間で比高差があることからD群と分けることとした。下段については根拠がないが便宜的に上段と合わせてE群とした。以上E群については明確でないものの支群内を7単位にわけた。また、東側斜面ではC-1号穴の隣に1段レベルを下げた形で1基開口している。この横穴墓は以前からよく知られているもので、家形石棺を内蔵しており、この横穴墓から東には別の一群があると予想される。この小単位をH群とし、家形石棺をもつものをH-1号穴としておく。さらに、H群の東側30mにも標高14m あたりに3基開口しているものがある。これらが小浜山支群から隙間なく続いているのか別の支群に区分できるのかは、現状では分からないが、これらが従来小浜山横穴墓として周知されてきたものであることから、これをI群とする。西側斜面にもB群の北5mのやや低い位置に開口していない横穴墓が2基あり(J群)[註3]、これら3群を加えると小浜山支群では10単位まで確認できる。これらは、横穴墓群における最小の単位と考えられる。

(2) 小単位について

小浜山支群を10単位に区分したが、次に調査を行ったそれぞれの単位について見ていくこととする。

A群

3基からなるが、造墓途中のものが1基含まれる。3基が1段ずれるように高低差をもって並んでいる。A-1・2号穴とも遺物がほとんどないことや玄室内の風化が著しいことから、両横穴とも玄室内は完全に掻きだされ一定期間開口していたものと思われる。A-2号穴が造墓途中のまま終わった理由は不明であるが、硬質な岩盤等にあたった形跡はない。造墓の順は不明である。この丘陵自体かなり後世の改変やがけ崩れを起こしており、A-1号穴は羨門から前庭部の間は完全に失われている。A-1号穴は土器が出土していないが、玄室が縦長長方形プランのアーチ形で徳利形の袖部をもち、床面には排水溝が全周するなど古い様相をもっており肋骨状加工など新しい様相がないことから、出雲4期の可能性が高い。A群は出雲4から5期に形成された一群である。

B群

5基からなり、ほぼ同レベルに並んでいるが、隣り合う横穴は弱冠高さを変えており，一穴おきに同レベルとなることがわかる。丘陵自体が改変しており前庭部が残るものが少ないなか、この一群は1基を除き比較的良好に前庭部が残存している。

B群も遺物の残りが悪いことから、後世の改変が及んでいると思われる。B-3号穴は閉塞石が残っているがその上部の一部は破壊されており、その部分は前庭部の床面近くで検出されている(第21図の土層断面図にあるもの)。おそらく前庭部の土は一度完全に取り除かれたものと思われる。閉塞石も後世の改変時に動かされている可能性もある。

B-3号穴は出雲5期から6期の須恵器が出土するが石床上にいずれの時期の須恵器も出土していることから、出雲6期の造墓である可能性が高い。その他の横穴墓からは出雲6期でも新しい段階の須恵器が伴うことから、B群は出雲6期を中心に形成された支群中最も新しい一群である。B-5号穴も肋骨状加工があることからほぼ同じ時期と考えられる。

C群

5基がほぼ同一の高さに並んでいる。東側斜面もかなりがけ崩れを起こしているが、前庭の一部が残存している。いずれの横穴墓からも、他の小単位に比べて遺物が多く残っていたが、未盗掘の状況を示すものがあるのかは確実ではない。C-3号穴は調査したなかで唯一須恵器床を持つものであるが(第43図p49)、大甕は破砕され10cm前後の破片が敷き詰められていたが、重なり合う部分や隙間が多く見られることや、同一個体の破片が羨道から前庭にかけての高い位置から出土していることから、改変を受けている可能性が高い。また、前庭部の床面付近の石も凝灰質砂岩で軟質なこともあり、どこまでが同一のブロックか判別がつかないほどかなり風化していた。一定期間開口していた可能性もあり、これらの石もその段階で崩落したものである可能性もある。

C-2・5号穴では羨道部に岩盤を加工した人頭よりやや大きな石を並べており、石の玄室側の面がちょうど玄門のラインに揃うように配置されている。またそれぞれの石の側面はカットされ垂直な面になっていることから、玄門幅に収まるよう大きさが整えられている。おそらく閉塞をする段階などで、この玄門のラインが意識されていた可能性がある。B-3号穴でもこの部分が段をつけている。C群では須恵器を伴うものはすべて出雲4期のものである。支群中最も早くに形成された一群である。

C-1号穴は袖がつくられておらず、床面の溝状加工が深く残ることから造墓途中の可能性もある。刀子が1点のみ出土している。

D群

6基からなる。この支群から西側については丘陵自体の崩落が激しく、D群も前庭部をわずかに残すものがあっても床面のみで、多くは羨門から前庭にかけては失われている。このため玄室内には崩落以後にかなりの流入土があったようで、岩盤の礫を含んだり岩盤が風化したような砂質土がかなり堆積している。D-2号穴では大半が岩盤の風化した砂質土であり、その下には崩落時の岩盤を含む層がある。丘陵が崩れ開口した後に急速に岩盤の風化土が堆積したものと思われる。この横穴墓では丘陵崩落後は改変を受けなかったようで、遺物の残存状態がよかった。その他の横穴墓についてはあまり遺物の残存状態はよくはなく、比較的多く土器が出土したD-3号穴も岩盤崩落時の礫が残っておらず、全体的にしまりのない土が堆積していたことから崩落後にかなり改変を受けたものと考えられる。このように多くのものは丘陵崩落によって開口し遺物の多くは失われている可能性が高い。

E群

8基が2段にわたって分布する。このあたりが最も崩壊が著しく、玄室の床面を残すのみのものが大半である。

E群上段は出雲5期の須恵器を持つものが多いのに対し、下段はE-6号穴で出雲4期の須恵器が伴い、E-6・8号穴では古い様相である礫床をもつことから、E群下段は上段とは別の小単位である可能性が高い。E群のさらに下段のG群に出雲4期の須恵器をもつものがあることから、G群とともに一群を形成している可能性もある。

F群

東側斜面の南端に位置しており2基を検出したが、いずれも上半分は残っていない。各小単位は数基からなるものが多いため、これ以外にもすでに完全に削平されたものもあるかもしれない。また、

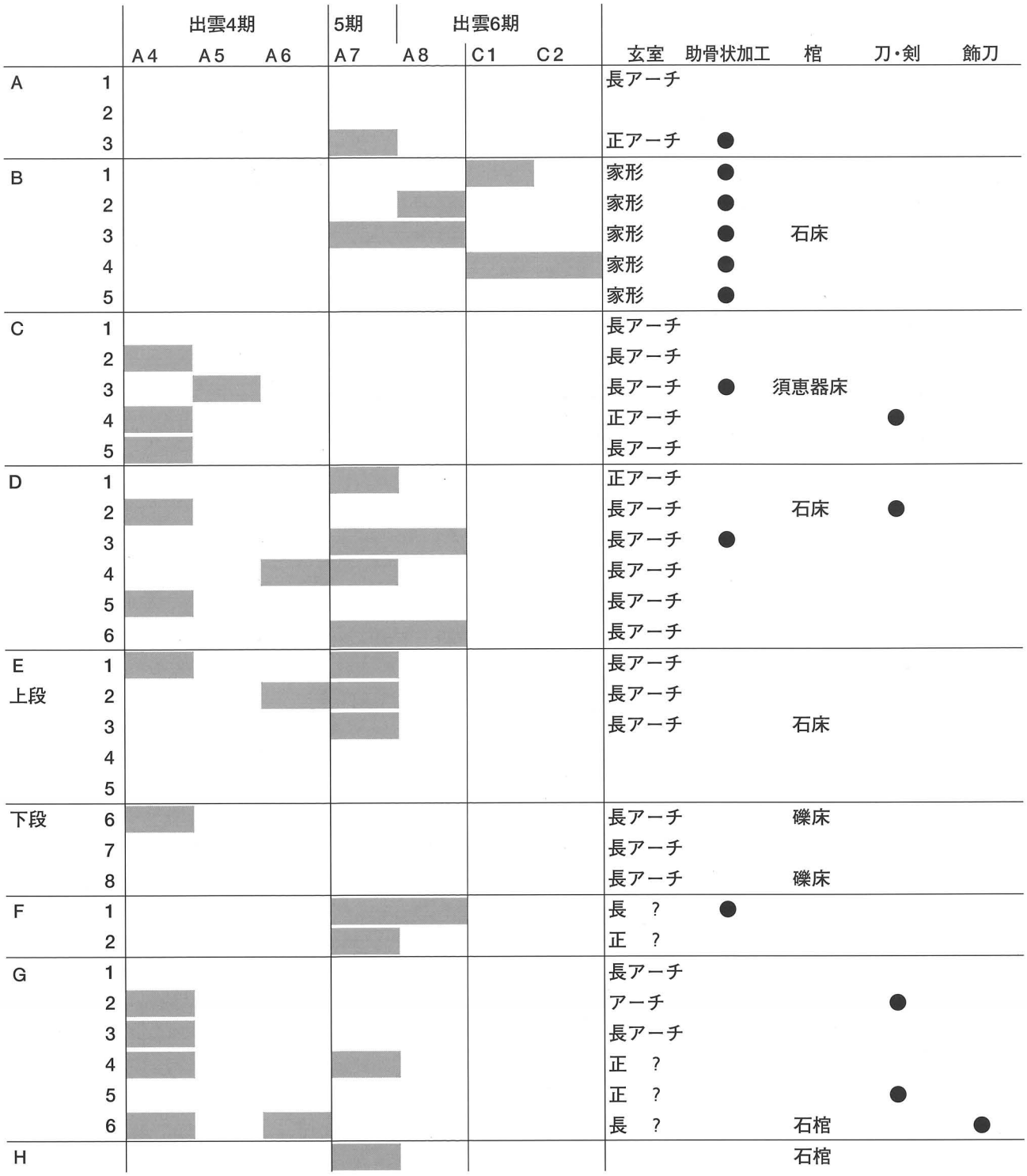


表３　小浜山支群一覧表

F－１号穴は天井の岩盤が玄室内に落ち込んでいることや、須恵器についても多くが残っており原位置を保っているようなので、天井が玄室内に崩落したことによって、後世の改変を免れたようである。

時期は２基とも出雲５期である。

G群

E群の下段に位置しており、やはり崩壊が著しく天井はほとんど残っていない。このあたりは傾斜

が緩やかになっており、G-4号穴の床面には古墓が後世つくられていることから、自然の崩壊に加え近世以降墓地として加工されたものと思われる。

この支群中のG-6号穴には箱式石棺と推定される棺が備えられている。天井石は残っていなかったが、G-6号穴前方の丘陵斜面にはかなり風化していたが板石が一枚転落しており、これが天井石と思われることから箱式石棺の可能性が高い。

時期は、須恵器の出土しているG-2・6号穴はいずれも出雲4期であることや、時期のわからないものも長方形プランのアーチ形であることから、多くは出雲4期に形成された一群である可能性が高い。

(3) 小浜山横穴墓群の群構成

小浜山支群のうち発掘調査した35基の横穴墓を視覚的にA～Gまでの7つの小群に分けたが、ここではそれぞれの小単位の特徴を、時期変遷・副葬品・棺などの様相から、検討してみることとする。

変遷

各小単位の時期を見てみると、A群は出雲5期、B群は出雲5期・6期、C群は出雲4期、D群は出雲4～6期、E群は上段が4期・5期で下段は出雲4期、F群は出雲5期、G群は出雲4期の横穴墓で構成されている。

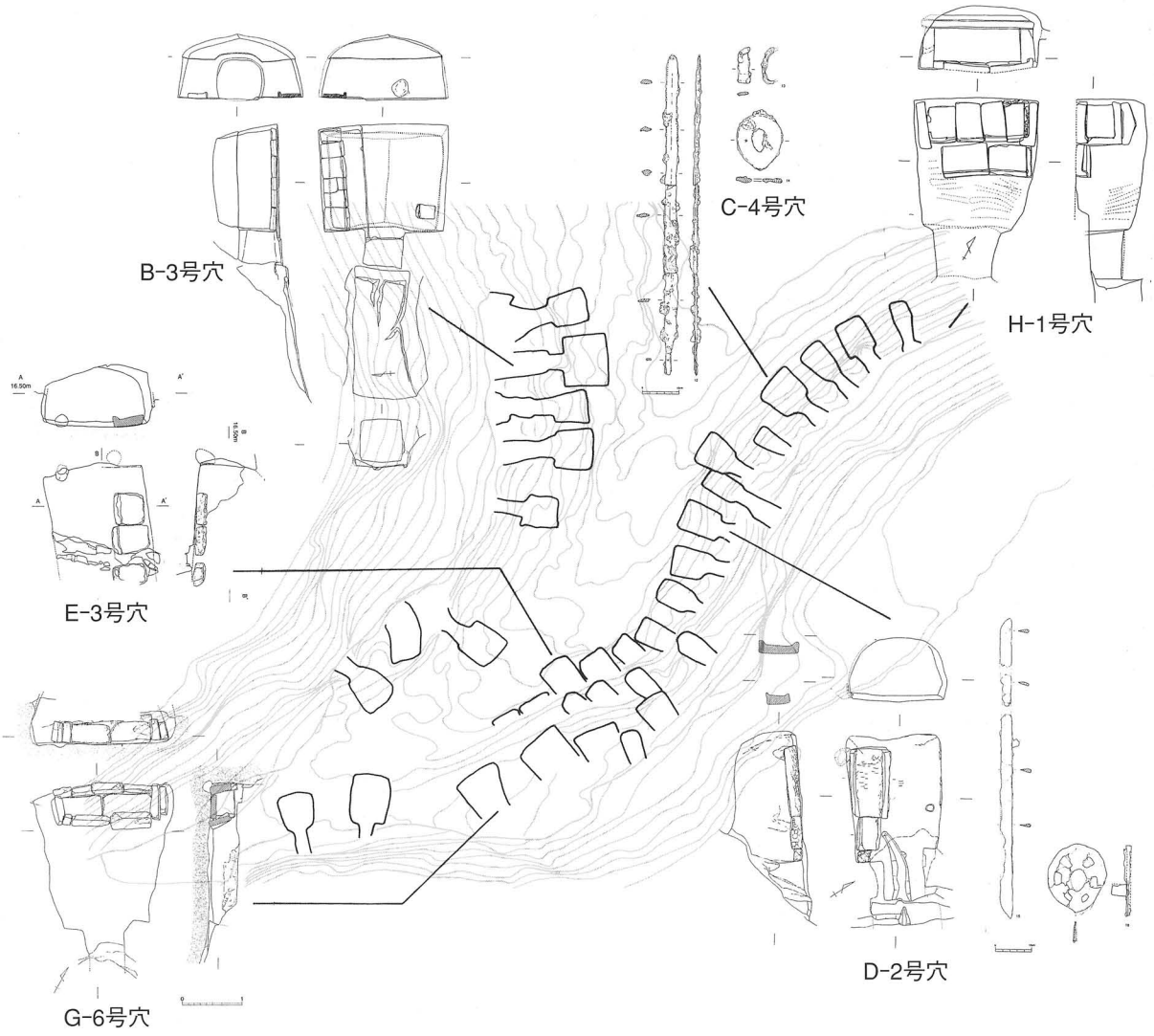
少し詳しく見るとC群・E群下段・G群は時期がわかるものはいずれも出雲4期であり、小浜山支群の中では最初に造墓された一群である。また、B群は出雲5期の須恵器を弱冠含むが、多くは出雲6期でつまみとかえりを持つC型の蓋が出ていることから、出雲6期を中心とする最も新しい一群であるといえる。

D群は最も時期幅があるが出雲6期と思われるのはD-3号穴の4点(第69図2・4・10、第70図12)とD-6号穴の1点(第83図3)であることから、出雲4から5期にかけての一群と考えられる。

一部重なる部分もあろうが、おおよそC群・E群下段・G群(出雲4期)がまず形成され、つぎにD群・E群上段(出雲4・5期)、やや遅れてA群・F群(出雲5期)、最後にB群(出雲5・6期)の順に支群が形成されたものと考えられる。それぞれの小単位は、それぞれが異なる時

	出雲4期	出雲5期	出雲6期	
C群	■			
E群下段	■			
G群	■			
E群上段	▒	■		
A群		■		
D群	▒	■	▒	
F群		■	■	
B群		▒	■	■

表4　小浜山支群の変遷



第153図　小浜山支群における石棺・石床・刀剣の分布

期からなる横穴墓によって構成されるのではなく、ほぼ同じ時期の横穴墓から構成されていることになる。つまり、小単位ごとに時間差があり、段階ごとに墓域を決めて横穴墓を造墓し、続く段階には新たに墓域を設定し造墓を続けていくことになる。

小単位の階層性

小浜山支群では玄室内に石棺・石床を備えるものがある。石床はB-３号穴・D-２号穴・E-３号穴の３穴でそれぞれ１基の石床をもつ。また、石棺はG-６号穴に箱式石棺が、未調査部分のH-１号穴に横口式の家形石棺が備えられている。数基からなる小単位には石床ないしは石棺をもつ横穴墓１基が、比較的高い割合で含まれているといえる。これら石棺・石床をもつものは鉄刀や装飾付大刀を持つものがあることから、小単位中の盟主的な位置にあると思われる。石棺・石床をもつ横穴墓を含

まないC群ではC-4号穴が鉄剣を持つなど副葬品において他の横穴墓に比べ高いランクにあることから、各小単位に盟主的な横穴墓の存在を認めることができる。また、石棺についてはG-6号穴が出雲4期、H-1号穴が出雲5期と時期ごとに見ると1基ずつしかないことや、G-6号穴は装飾大刀を含むなど副葬品も高いレベルのものを持つことから、石棺を備える横穴墓は小単位を超えた支群単位の盟主墓となる可能性がある。石棺をもつ小単位、石床をもつ小単位、いずれも持たない小単位の順に階層性があったものと考えられる。また、それぞれの盟主墓は、小単位を構成する横穴墓に時期差がある場合は、B-3・D-2号穴のように古い段階に造墓されている傾向があり、盟主墓の造墓が小単位の形成の契機になっているものと思われる。

神門横穴墓群では丘陵の尾根ごと、あるいは同一斜面でもレベルを変えるなどして、視覚的には支群を抽出することができる。ただし、これは現在開口しているものから便宜的にグループ分けしたものであり、今後の調査によっては再編しなおす必要があることはいうまでもない。小浜山支群についても北側斜面(A・B・J群)と南側斜面(C～H・I群)を同じ一群としてよいかなど、横穴墓から集団単位を導き出すような分類は今後の課題である。

註1　須恵器の時期については大谷編年(大谷1994)による。

註2　西尾らはこれをツルハシ状工具による刺突痕としている。

註3　I・J群など支群の東側の一群は標高が低い位置に開口している小浜山支群の東側の支群である梶谷徳次宅裏の一群(19穴が確認されている)も低い位置にあり、このあたりの横穴墓が東側ほど標高が下がる傾向がある。これは横穴墓掘削に適した岩盤が東側に傾斜していることによる可能性がある。

参考文献

大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集　1994

角田徳幸・西尾克己「出雲西部における後期古墳文化の検討―横穴式石室の構造と変遷を中心として」『松江考古』第７号　1989　松江考古談話会

門脇俊彦「上塩冶横穴墓」『出雲・上塩冶を中心とする埋蔵文化財調査報告』1980　島根県教育委員会

門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説―特に四注式系横穴墓の分布と時期について」『古文化談叢』第7集　1980　九州古文化研究会

田中迪亮・勝部　昭・蓮岡法暲『尾崎横穴群発掘調査報告書』1988　佐田町教育委員会

西尾克己・原田敏照・守岡正司「出雲西部における横穴墓の様相」『湖陵町誌研究』第１号　1992

西尾克己・丹羽野裕「山陰の横穴墓―出雲地方を中心として」『おおいた考古』第４集　1991　大分県考古学会

西尾克己『中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう半分城跡横穴群発掘調査報告書』1979　出雲市教育委員会

松山智弘『地蔵堂横穴墓群発掘調査報告書』1994　出雲市教育委員会

山本　清「横穴の形式と時期について」『島根大学論集（人文科学）』11号　1962　島根大学

第７章　神門横穴墓群について

第１節　神門横穴墓群研究史

第３章では神門横穴墓群の現在の状況を整理した。その過程において、支群名が微妙に変化してきているもののあることが判り、第３章で示した支群名を同一の見解としたい。またこれを元に過去の研究史を紐解いてゆく。筆者の至らぬため文献を見落としたものもあるかと思われるが許していただきたい。

最も古くから知られている福知寺山横穴墓群[註1]は、大正14年刊行の「島根縣史 四 古墳」に、「福知寺墳穴」として記載され、当時開口しているもの33穴、うち山陰鉄道線路用土取りのために10数穴が破壊されたとある。また横穴と考えられるような場所が10数ヶ所あり、総数約50穴にも及ぶ一大墳穴群地なり、と記してある。また数穴の詳細な記述が載せてある。ひとつは線刻が施されたもので、その論究にも及んでおり、被葬者の記念銘としている。しかし福知寺住職の労力及ばず、大正12年、調査のため充填した土砂を取り除くと松樹根により壁面が崩壊していた、と記してあり、現在では線刻をもつ横穴墓は確認されていない。次に二室以上連結する横穴として３例６穴紹介してある。最後に石棺を有する横穴墓の紹介があり、これは梅原末治・石倉暉榮両氏の論文[註2]を抄出するとあり、さらに逆戻った記述である。この横穴は当該横穴墓内唯一石棺を有するものである。前記した山陰鉄道線路用土取りの際に露出したもので、羨道部の右側壁はその時破壊されている。出土遺物としては、前記した線刻のある横穴墓から直刀三振り、出土地不明なものとして土器類・耳環・勾玉等としている。

その後昭和に入り神門村において村誌が昭和31年に刊行され、小浜に面したところに昭和20年８月に松根を掘り採る時10ヶ所ばかり露呈し、小浜に寺山と名づけたるところに３穴、東谷の風呂下谷を西へ上りその西腹に１穴、殿奥にも横穴あり、城平山の東南端の土取り時に数穴発見したとある。そして最も多くの横穴墓が存在するのは福知寺後と記載してある。小浜に面したところは小浜山横穴墓群、寺山と名づけたるところは小浜寺山横穴墓群、福知寺後としたのは福知寺山横穴墓群と対応できるが、あとの３ヶ所のうち、前の２ヶ所は三成範夫宅裏横穴墓群の所在する小丘陵から梶谷徳次宅裏横穴墓群が所在する小丘陵の間の谷部に存在する横穴墓を指しているものと考えられる。また城平山は智伊神社の所在する山である。

池田満雄は昭和35年に「出雲市の文化財 第二集」で福知寺山横穴群として約20穴が現存し、崩壊したもの、未開口のもの相当数としており、うち３穴を紹介している。１号穴は石棺を有するもの、２号穴は横穴群中最上部に位置する四注式妻入りのもので、３号穴は西方の比較的下方にある縦長形(縦長長方形)・板カマボコ形(アーチ形)を呈する、当該横穴墓の多くがこのタイプであるというものである。現在ではこの１号穴を１号穴としたが、２・３号穴はどれと対応するのかまたは埋没しているのかは不明である。また「福知寺山と谷一つへだてたマキチン坂に面する山の腹にも五穴並列した横穴群がある」と記載されている。当該書には、福知寺山横穴墓群で出土した遺物が掲載されている。出土地は不明であるが、須恵器の有蓋高坏・低脚無蓋高坏または高台付坏・瑯の破片・大刀(鍔)・刀子など[註3]で、須恵器の時期は山陰須恵器形式四期の中で第Ⅲ期後半から第Ⅳ期[註4]にかけてとしている。

「出雲市の文化財 第二集」の発刊直後、第１支群は福知寺山横穴群として市指定の文化財に認定

された[註5]。

昭和37年、文化財保護委員会が全国の遺跡台帳の作成を企画し、島根県教育委員会が各地区の調査員に委託して遺跡目録を作成している。それには福知寺横穴群を１～３号穴として載せている。また３号穴の出土遺物として福知寺保管のものを載せているが、前掲書（池田1960）には全て出土地不明としてあるもので、混乱をきたしているようである。その他、小浜山横穴・小浜岩山横穴・小浜寺山横穴がそれぞれ掲載されており、小浜岩山横穴と小浜寺山横穴の主要文献として先に掲載した「神門村誌」を揚げているが、これに記載されているのは小浜岩山横穴ではなく、小浜山横穴墓群の方であり、これも混乱をきたしているようである。また小浜寺山横穴墓群からは耳環（銅）が２点出土したとある。

以上のように当時までは、真幸ヶ丘丘陵には福知寺の裏山以外には横穴墓が点在しているにすぎず、丘陵全体としては捉えられていなかった。

昭和49年島根県は「埋蔵文化財包蔵地調査カード」遺跡台帳の作成を行っている。カードには所在地・名称などのほか、立地・範囲・形態・時代・遺構・特徴・出土品とその所蔵地などが記載できるようになっている。神門横穴墓群の調査は西尾克己を中心とするメンバーによって行われ、福知寺山横穴墓群以外の未知の横穴墓を精力的に調査されている。初出のものは、山本陽一郎宅裏横穴墓群・三成範夫宅裏横穴墓群・東谷北横穴墓・東谷横穴墓群・マキチン坂横穴墓群・梶谷徳治宅裏横穴墓群・真幸が丘西横穴墓で、８支群51穴の存在を確認している。これにより真幸ヶ丘の丘陵には多くの横穴墓が築かれていることが明らかとなった。福知寺横穴墓群は「福知寺土壙墓」としたカードの略図に７基の横穴墓の配置が記載されており、三成範夫宅裏横穴墓群は１枚のカードに５穴の横穴墓の配置と１穴だけ略図を記録し、特徴を記載している。残りの６つの横穴墓群は、各横穴墓群の配置図を記載したカードのほか、山本陽一郎宅裏横穴墓群は９穴、東谷北横穴墓は１穴、東谷横穴墓群は９穴、マキチン坂横穴墓群は４穴、梶谷徳治宅裏横穴墓群は15穴、真幸が丘西横穴墓は１穴の各横穴墓のカード作成を行い、遺構略図・特徴・出土遺物などを記録している。以後はこのカードを基本に報告が行われており、今回も同様にこのカードを基礎としている。

昭和53年には文化庁からの依頼により、前記した昭和37年作成の遺跡目録を追加補正した地図が公刊された。神門横穴墓群としての範囲が初めて囲まれ、11の支群が掲載された。小浜岩山横穴群は小浜寺山横穴墓群の西に記載されている。

昭和55年、西尾は「出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」の中で、出雲平野における古墳分布図のなかで、真幸ヶ丘の丘陵を囲った範囲を初めて神門横穴群としている。また前掲の遺跡地図をほぼ踏襲している出雲市内の横穴一覧を掲載した。しかし真幸が丘西横穴群とあったのを真幸が丘横穴群とし、小浜山横穴群とあったのを小浜横穴群としている。

昭和57年「えとのす 19」において西尾・大国晴雄は神門横穴群と総称して真幸ヶ丘の丘陵に分布する横穴墓群を紹介している。

昭和62年島根県教育委員会が作成した「島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）」は前記した遺跡台帳カードの成果が記載してある。福知寺横穴群は20穴以上、三成範夫宅裏横穴群は５穴、マキチン坂横穴

群は４穴以上、梶谷徳次宅裏横穴群は15穴以上、小浜山横穴群は３穴が存在し、真幸が丘西横穴群は１穴以上存在し現存は１穴としてある。山本陽一郎宅裏横穴群と東谷横穴群として各９穴の、東谷北横穴として１穴の横穴墓の概要を掲載している。東谷横穴群は５号穴が整正家形妻入、８・９号穴は家形妻入で、あとは蒲鉾形とし、山本陽一朗宅裏横穴群は８号穴は不明であるが、３号穴は整正家形妻入で、あとは蒲鉾形とし、東谷北横穴は蒲鉾形と紹介してある。小浜寺山横穴群の詳細は記していない。小浜岩山横穴群は所在不明と記載してある。また、マキチン坂横穴群の位置が、今回新発見としたマキチン坂裏横穴墓群側（小丘陵西側面）におとしてあり、まちがいである。

以上のように、昭和49年に遺跡台帳カードが作成されてから、真幸ヶ丘の丘陵には多くの横穴墓が群を成して形成され、一大横穴墓群を成すことが認識された。それ以後、これらを神門横穴墓群と総称し、神戸川を挟んだ東に位置する上塩冶横穴墓群と対峙することが明らかとなってきた。

そして平成４年、小浜山横穴墓群35穴の本調査を行った。平成５年出雲市教育委員会で作成した「出雲市遺跡地図」には、福知寺山横穴墓群を福知寺横穴墓群と、真幸ヶ丘横穴墓群を真幸ヶ丘西横穴墓群としている。また、マキチン坂横穴墓群の位置を前掲書と同様まちがえている。小浜山横穴墓群は消滅となっているが一部は残存している。

神門横穴墓群の分布調査以外にも西尾を中心とした以下のような研究がある。

以前から神門横穴墓群では、玄室形態が蒲鉾形（平面形態縦長長方形で天井形態アーチ形）を呈する横穴墓が多いことが知られていた。

平成４年、「湖陵町誌研究１」において西尾・原田敏照・守岡正司は出雲西部の横穴墓の様相を論究している。神門横穴墓群として、古くから知られているが実態は不明であるとする。しかしⅢ期の横穴墓の例として福知寺横穴墓群、梶谷徳次宅裏横穴墓群を、Ⅳ期の横穴墓の例として東谷横穴墓群９号穴、小浜山横穴墓群１号穴（H－１号穴）を挙げている。福知寺山横穴墓群（池田 1960）以外は、平成３年に西尾・原田の両氏が精力的に神門横穴墓群の実測・調査を行っており、その資料[註6]である。Ⅲ期の横穴墓は資料数が少なくその共通する特徴を取り上げたにすぎないが、Ⅳ期の横穴墓は出雲西部を三地域にその特徴を分けている。またⅢ期の横穴墓は縦長長方形・アーチ形の形態をとるもののみであるのに対し、Ⅳ期の横穴墓は新たに平面形態に正方形のもの、天井形態に三角断面形（この形態は神戸川下流域・神西湖周辺では見られない）・家形のものが見られるようになり、多種多様であるとしている。横穴墓に残る加工痕についても言及しており、U字形鋤状工具（平刃状加工痕）で棟線を中心に天井から左右の壁を削った痕が肋骨状を呈する特徴をもつ加工痕を肋骨状加工痕として、その分布状況にまで及んでいる。

以上見てきたように、昭和49年作成の遺跡台帳により神門横穴墓群の基礎資料は作成された。これ以後の西尾氏の調査・研究は体系的なものとなり、横穴墓の研究の基礎を築き上げ、評価されるものである。今回の分布調査による再検討も西尾氏の成果を基礎にして協力を得ながら行った。

第３章で記したように今回の分布調査において、２支群11穴を新たに発見した。それによって第３

章で掲示した通り現況で第12支群までを示した。

第２節　神門横穴墓群各支群の概要

神門横穴墓群を現況で12支群123穴確認した。現状では各横穴墓群の詳細は不明であるため、今までに支群として捉えられてきたものを含め、各支群は自然地形を利用してグルーピングしたものである。そのうち35穴（第10支群Ａ～Ｇ群）を今回調査したのであるが表２にその一覧表を、第143図にその遺構一覧図を掲載した。残りの88穴（第１～９支群・第10支群Ｈ～Ｊ群・第11・12支群）は表５に一覧表[註7]とし、第154・155図には第１～12支群の各横穴墓の配置図を、第156～163図には17穴の遺構実測図を、第165図にはその遺構一覧図を掲載している。一覧表等の作成に当たっては、昭和49年作成の遺跡台帳及び原田敏照が平成３年に神門横穴墓群を踏査した際の調査記録を、西尾・原田両氏の多大なるご厚意により利用させて頂いた。各横穴墓の名称は今回新発見資料以外は遺跡台帳カード記載の名称と対応している。以下は一覧表では表記できなかった事実確認等を第１支群から順次記述する。

第１支群（福知寺山横穴墓群）

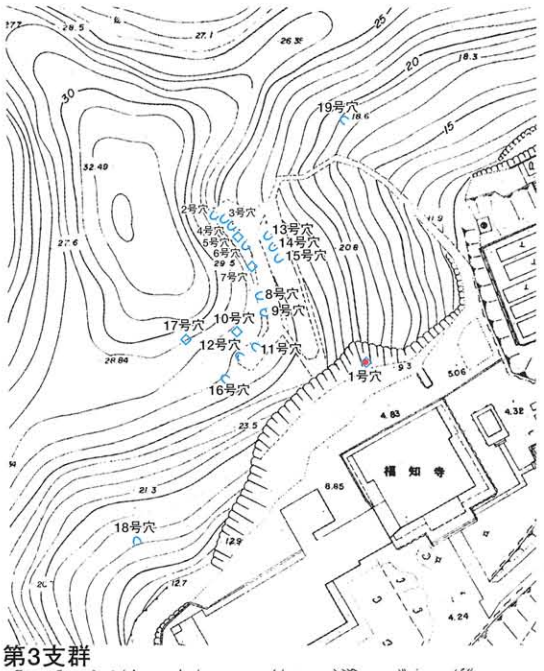
当該支群は、福知寺の裏山に集中する支群で、計19基を今回確認した。福知寺本堂裏の崖面に位置する１号穴、裏山中腹から頂部にかけて集中する２～17号穴、福知寺庫裡裏の崖面に位置する18号穴、福知寺墓地の裏山中腹に位置する19号穴というように４つの小支群を形成している。標高20～28m内にこれらは分布する。裏山中腹から頂部にかけて集中する16穴は、頂部やや下に２号穴が位置し、約１m南下に３号穴が位置し、４～７号穴が約１m間隔で位置する。７号穴から数m西で８・９号穴が、９号穴から西へ11・12号穴が位置し、10号穴はこれら２穴の一段上に位置する。頂部を巡るように西へ往くと16号穴、その上段に17号穴が位置する。13～15号穴は５～７号穴の一段下に約１m間隔で位置する。以上のように裏山中腹から頂部にかけて集中する16穴は更に小さな群を作るようである。１号穴は組合式家形石棺を北側壁に密着させ西寄りに設置している。床石には３枚の切石を並べ、短側側には断面Ｌ字状の石を立て、その上に屋根形の１枚石を載せている。最大高85cm、床石長170cm、床石幅50cm、蓋石長180cm、蓋石幅60cmを測る。

野津佐馬之助が「島根縣史 四 古墳」でも記述しているように、玄室内部で連結している横穴墓が存在する[註8]。これらは新しい方の横穴墓を掘削する際に切り合って開けられたものと考えるのが筋ではあるが、横穴墓掘削時に開けられたものか、破壊口が新しそうでもあるので後世に開けられたものであるのかは未調査である。

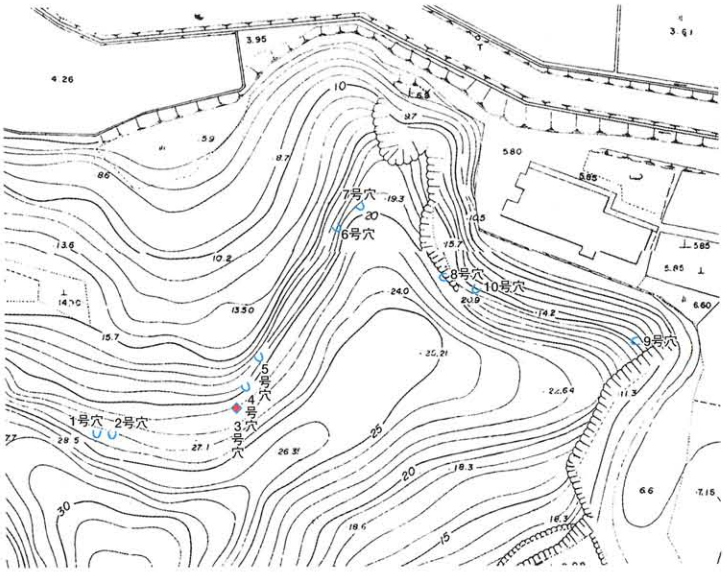
第２支群（山本陽一郎宅裏横穴墓群）

当該支群は、第１支群と同じ丘陵の反対北側斜面の中腹、標高15～23m内に所在する。今回10基を確認した。１・２号穴は当該支群の最西端で高所に位置し、３～５号穴は１・２号穴と開口部を斜めではあるが向かい合わせに位置し、その東の小丘陵の先端付近に位置する６・７号穴、そして６・７

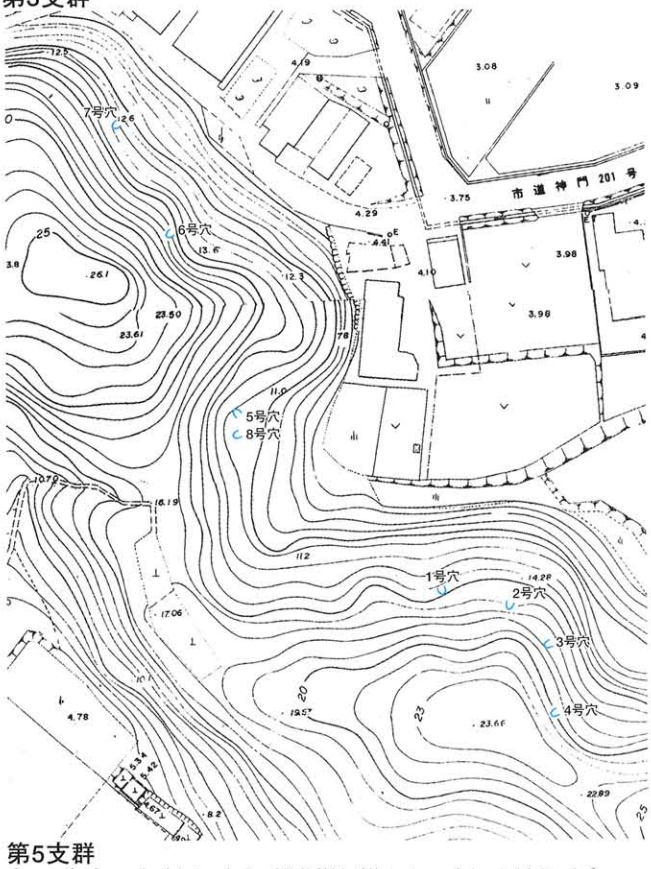
第1支群



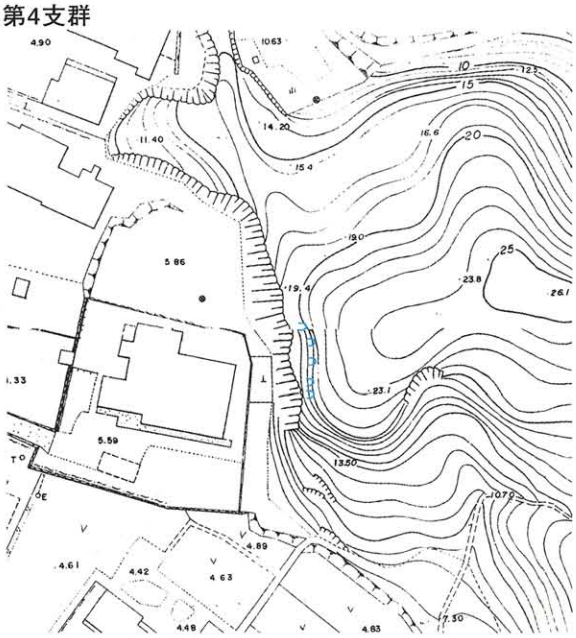
第2支群



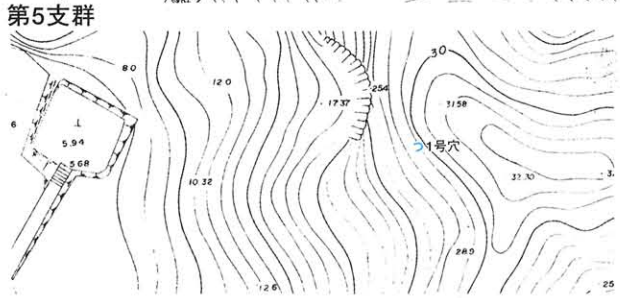
第3支群



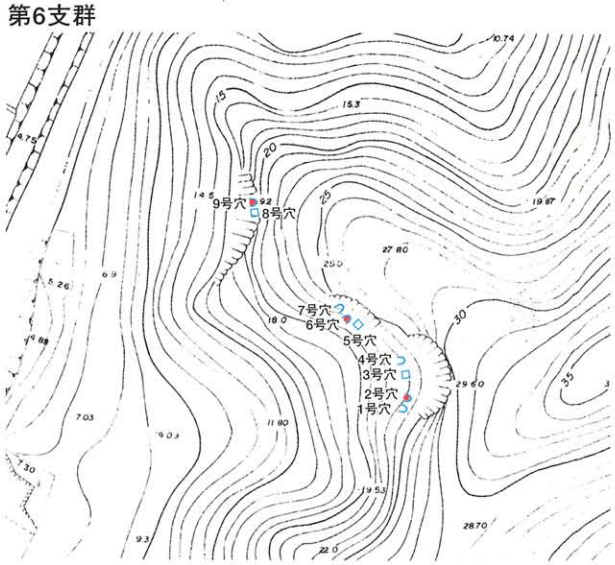
第4支群



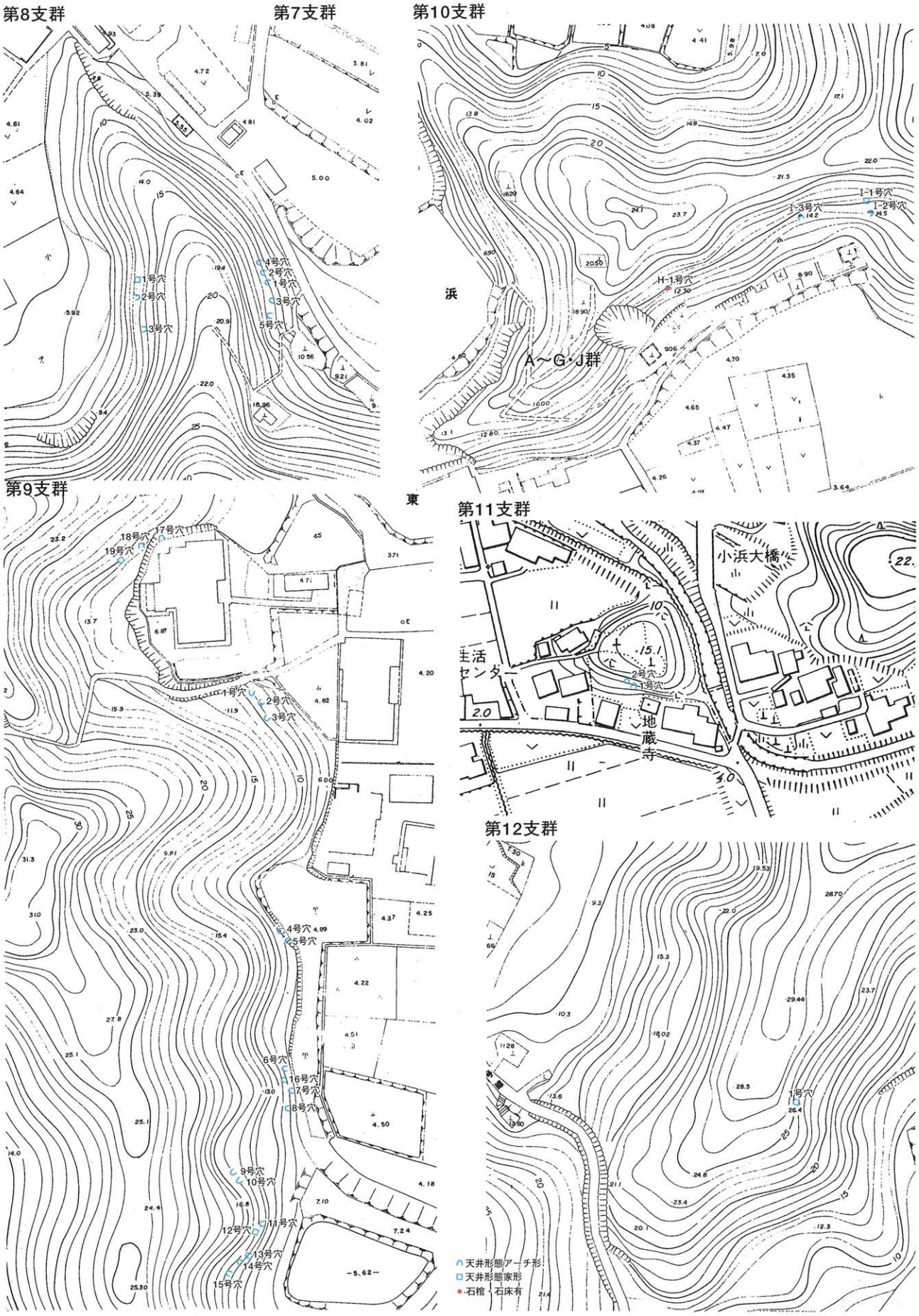
第5支群



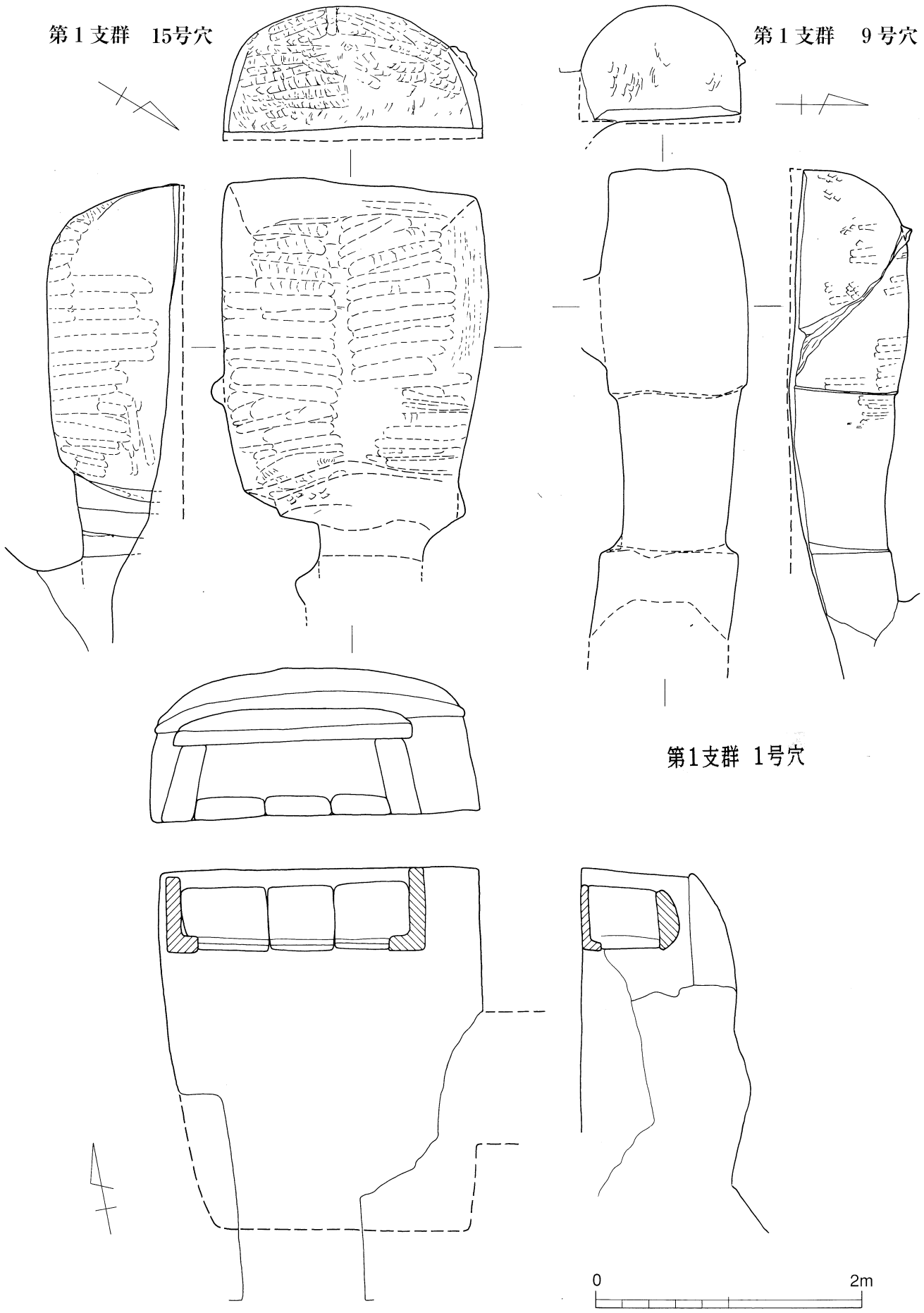
第6支群



第154図　神門横穴墓群各横穴墓配置図１（Ｓ＝１／1000）

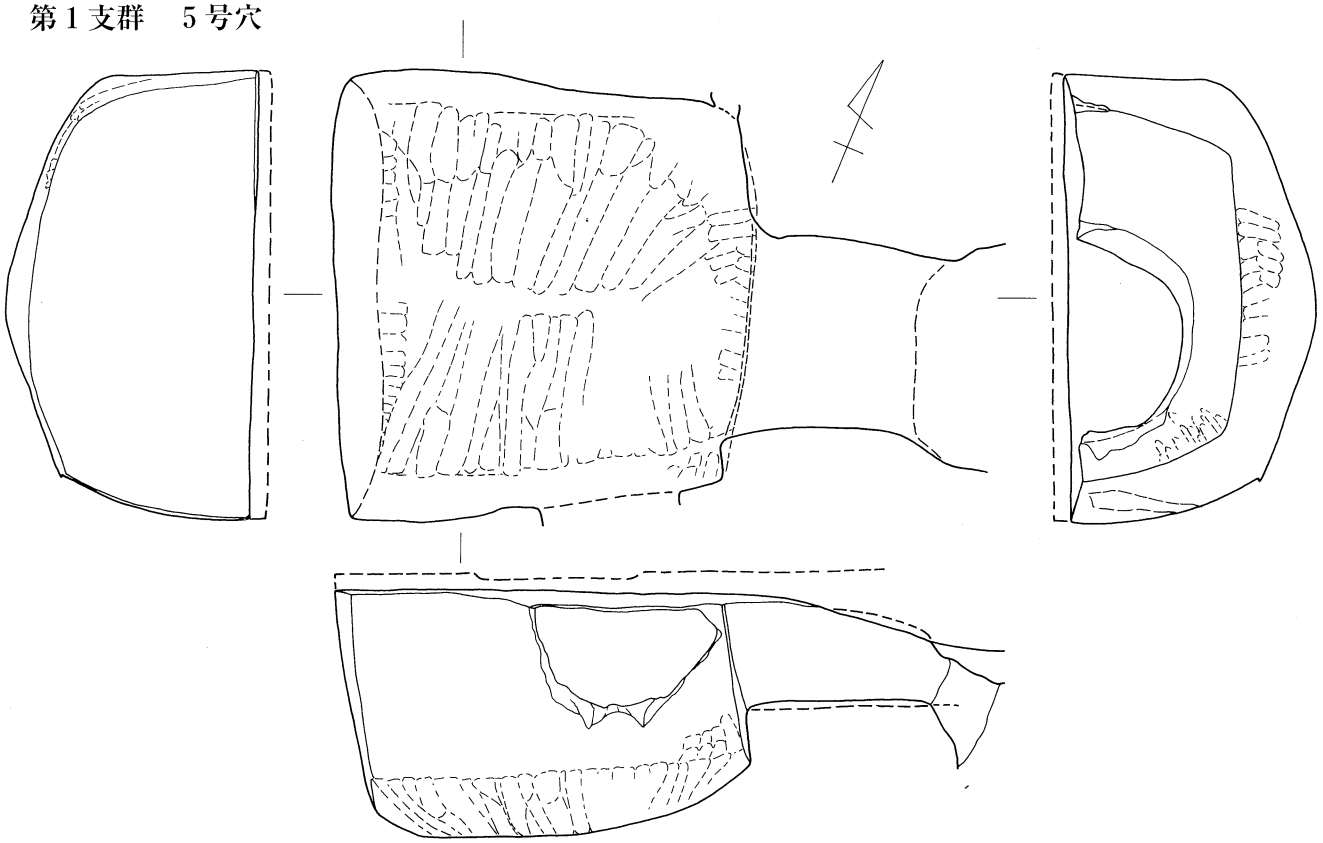


第155図　神門横穴墓群各横穴墓配置図２（Ｓ＝１／1000　ただし第11支群のみＳ＝１／2500）

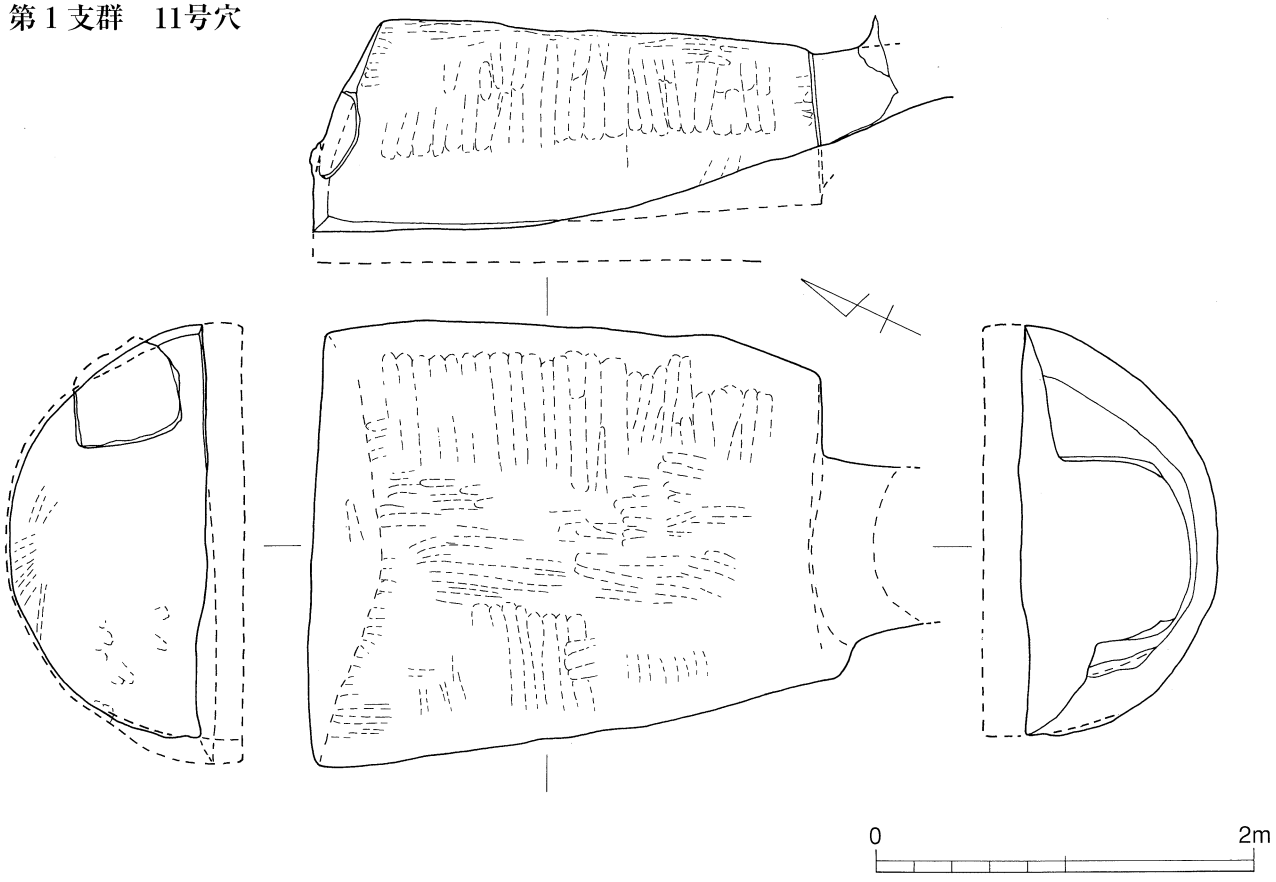


第156図　神門横穴墓群遺構実測図１（Ｓ＝１／40）〔上段：原田原図　下段：池田図加筆転載〕

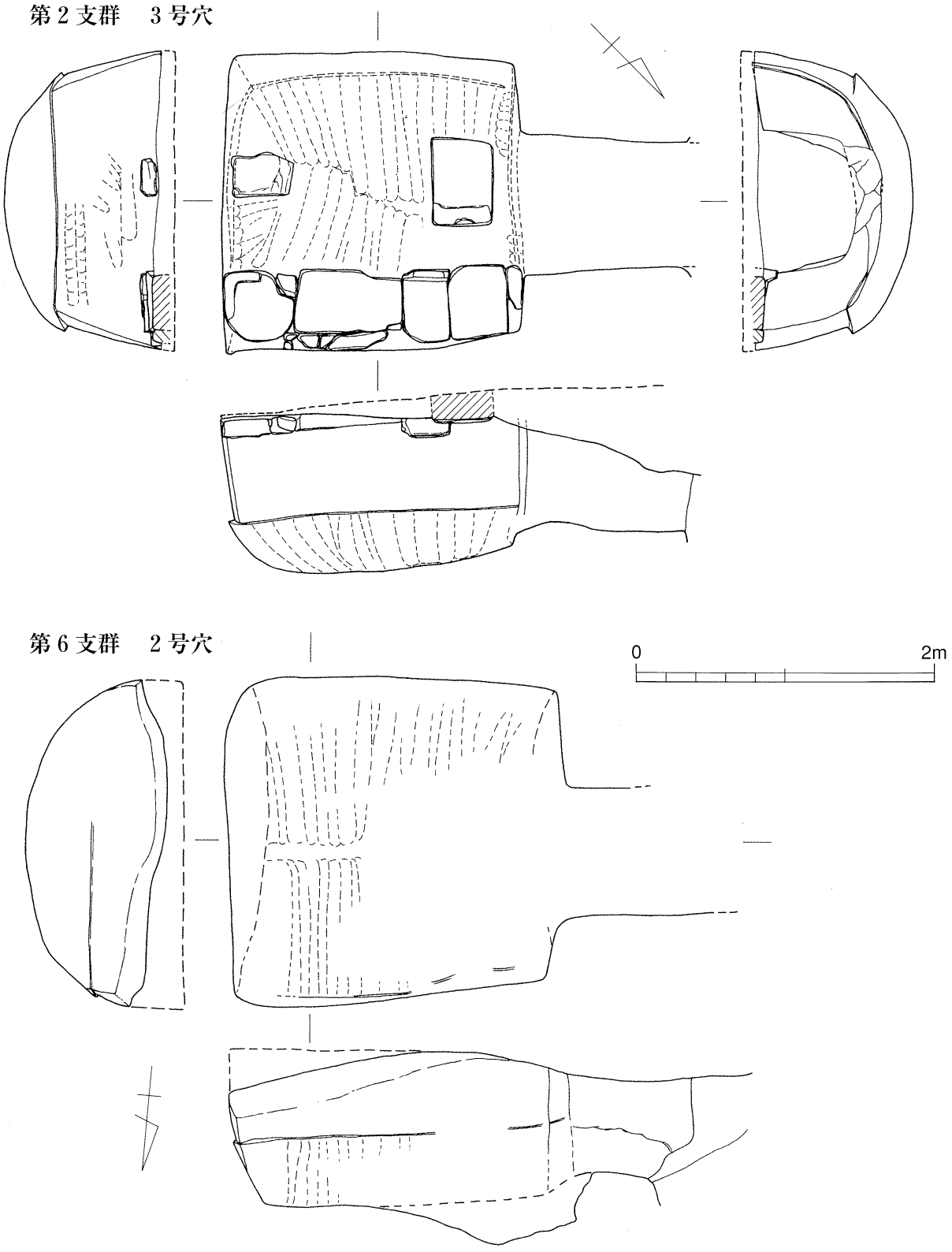
第１支群　５号穴



第１支群　11号穴

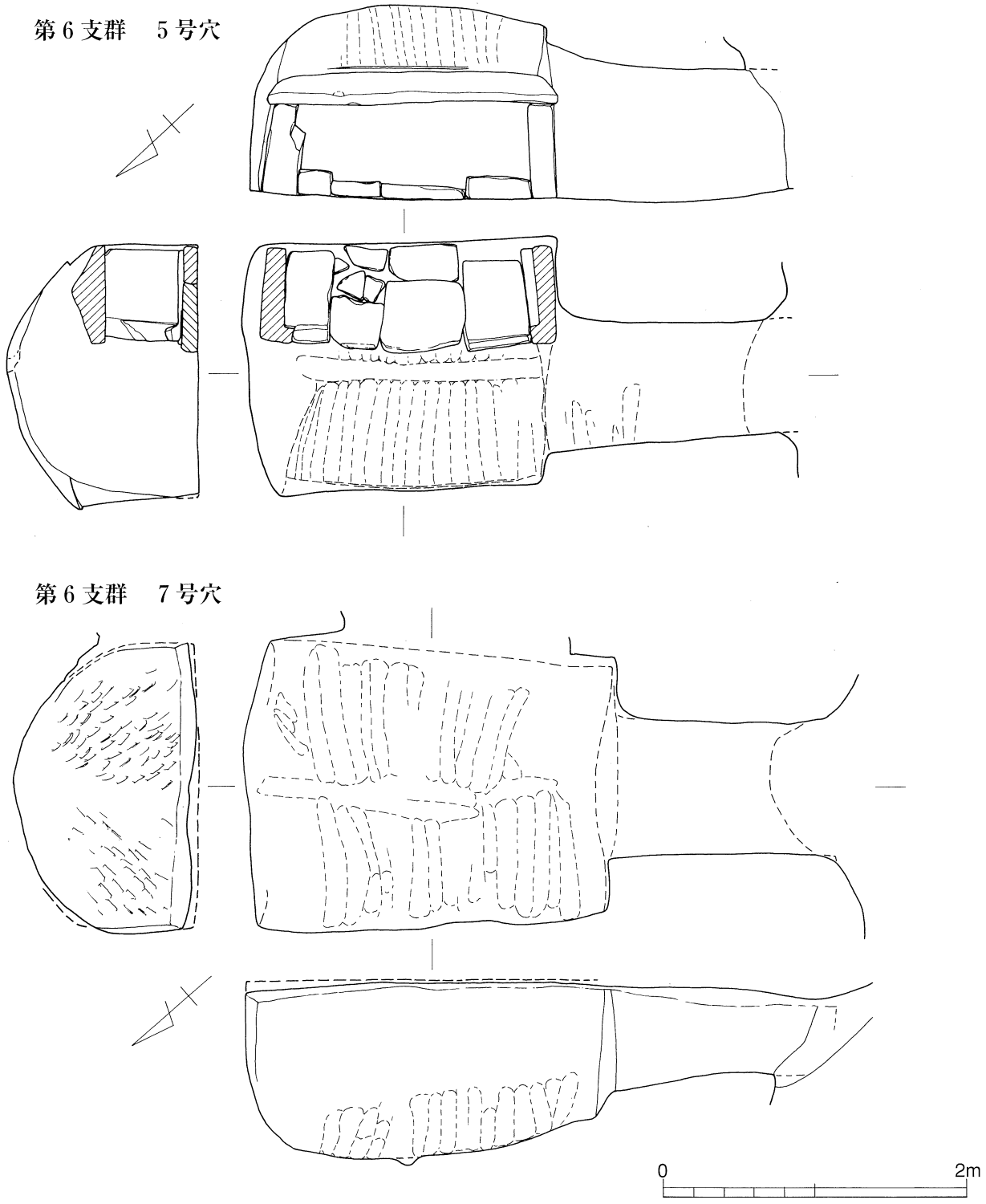


第157図　神門横穴墓群遺構実測図２（Ｓ＝１／40）〔上段：原田原図〕



第158図　神門横穴墓群遺構実測図３（Ｓ＝１／40）〔原田原図〕

号穴とは小丘陵の反対面で山本陽一郎宅裏に位置する８・10号穴、最後に真幸ヶ丘の最東北に位置する９号穴は崖面である。以上のように当該支群もまた小支群に分かれるようである。３号穴は石床を左側壁沿いに設置している。第158図には４枚の切石が並べられているが、現状では一番前にある石が抜かれている（写15）。一枚の石は断面をＬ字状に加工して縁を作り出しており、他の石も右側が若干膨れているので、元来縁のあったものと考えられる。長さ200cm、幅45cmを測る。空間には２個の石が無造作に置かれ、もう一個体石床があったものと考えられる。この一つの石は第158図には玄

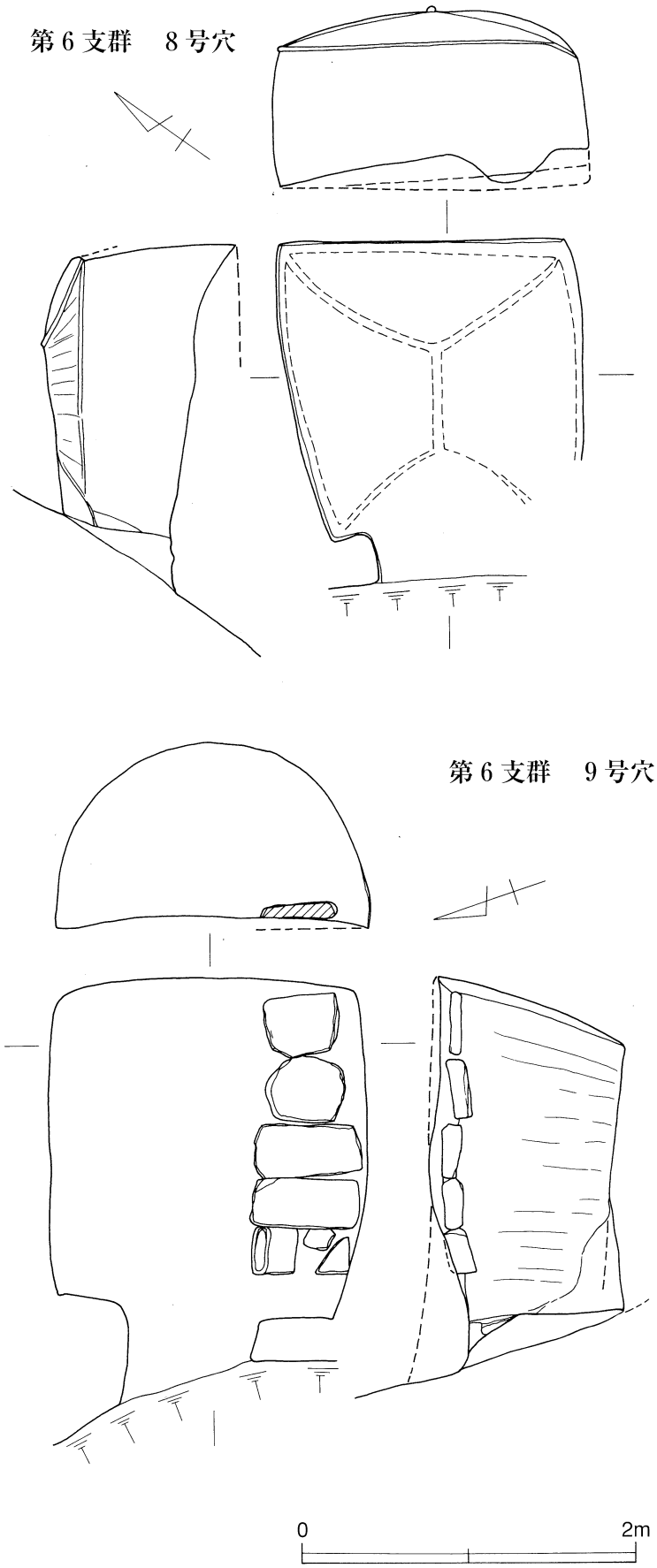


第159図　神門横穴墓群遺構実測図４（Ｓ＝１/４０）〔原田原図〕

門付近にあるが、現状では玄室中央まで動いている（写16）。

第３支群（神田工業倉庫裏横穴墓群）

当該支群は今回の分布調査により発見した支群で、今回８基を確認した。標高10～20m内に分布している。１～４号穴は谷部の奥まった所に５m以上もの間隔を空けて造られており、５・８号穴と６号穴と７号穴はぽつんと離れている。１・２号穴間にはまだ横穴墓が存在しているようであり、当該支群はもう少し詳細に探索すればまだ見つかりそうである。



第160図　神門横穴墓群遺構実測図５
（S＝1／40）〔西尾原図〕

第４支群（三成範夫宅裏横穴墓群）

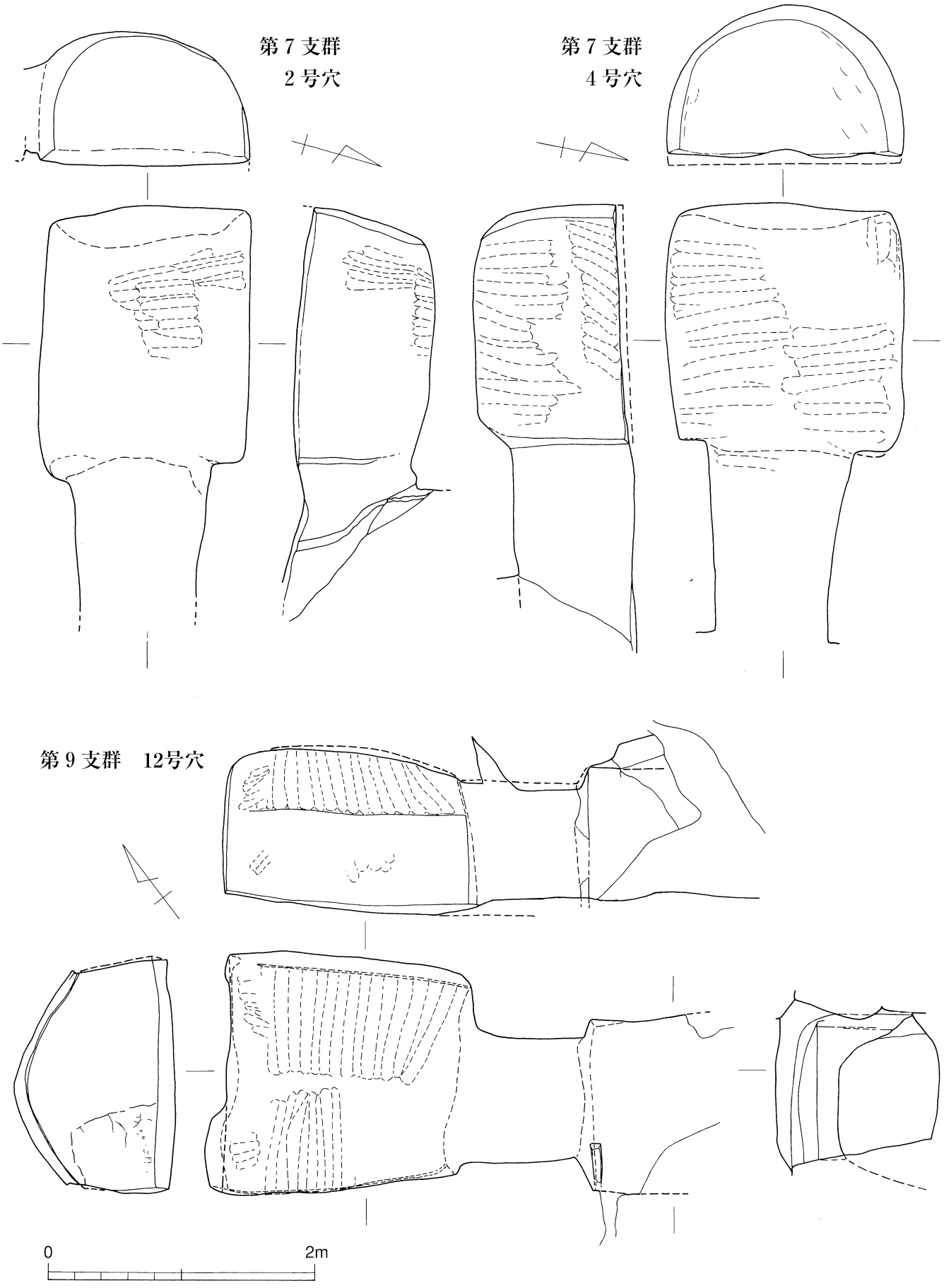
当該支群は、現在の崖面に５穴が連続して標高20m位に造墓されているらしいが、地元の風評により現在は見ることが出来ない。また現在三成範夫宅は存在しない。昭和49年の遺跡台帳には、開口していた１穴（１号穴）の記述が成されている。ただし５穴のうちどの横穴墓に当たるかの記述はない。

第５支群（東谷北横穴墓群）

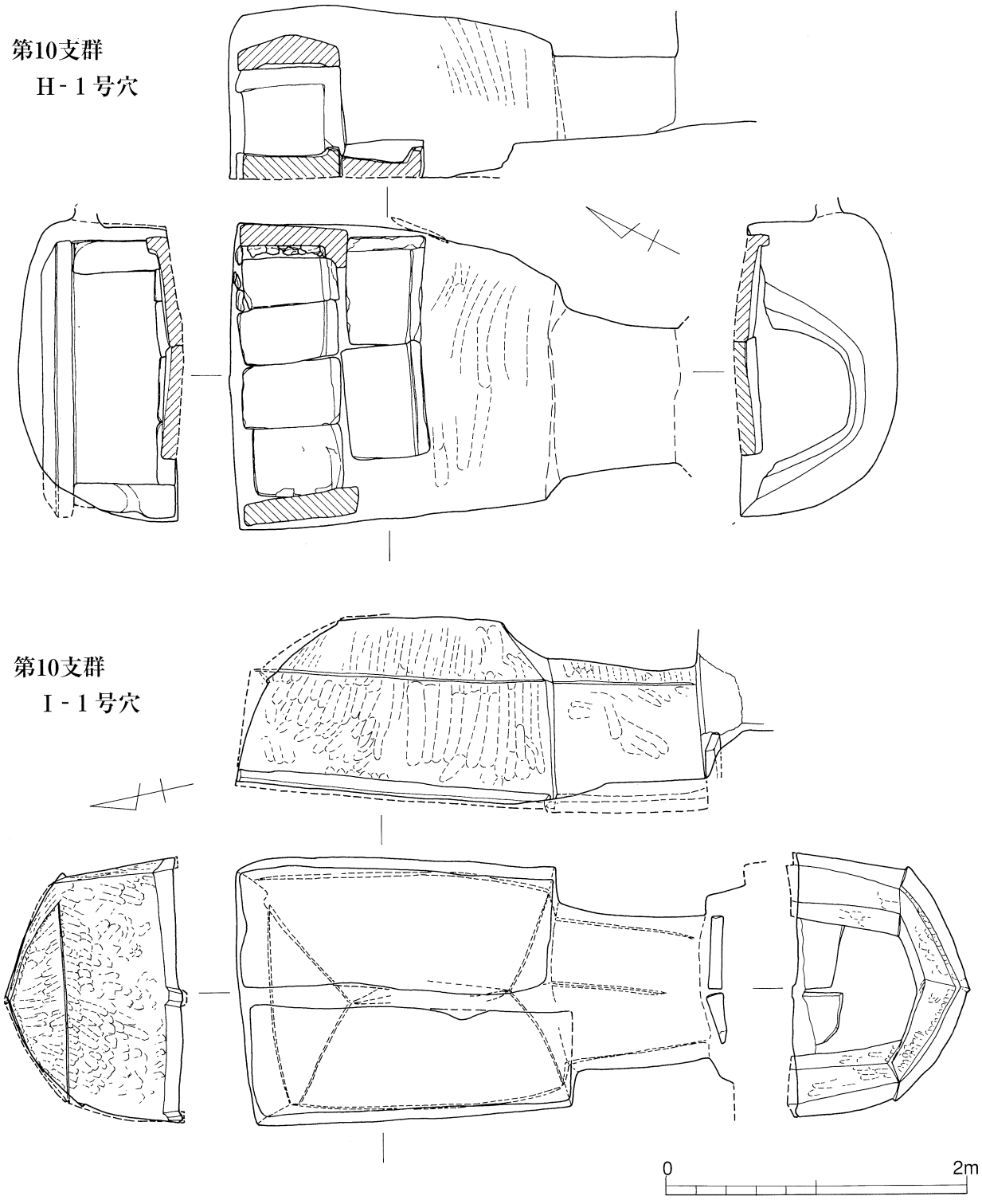
当該支群は、１穴のみ存在する横穴墓である。標高30m弱で頂部から数m下がった所に位置する。その頂部付近には第１支群17号穴のようにマウンドを有するような箇所がある。

第６支群（東谷横穴墓群）

当該支群は、標高20～25mに分布し、今回９基を確認した。１～４号穴、５～７号穴、８・９号穴の３つの小支群を形成している。２号穴には昭和49年遺跡台帳によると石床の一部が残存し、蓋石が外へ流出していたと記録してあるが、現在は確認できなかった。５号穴は組合式家形石棺を右側壁沿いに設置している。床石には４枚の切石を並べ、短側側には断面Ｌ字状の石を立て、その上に頂部は丸みを帯びた屋根形の１枚石を載せている。最大高90cm、側石厚13～16cm、床石長170cm、床石幅70cm、床石厚10～15cm、蓋石長200cm、蓋石幅65cm、蓋石厚24cmを測る。９号穴は石床を右側壁沿いに設置している。風化が著しいが、長さ165cm、幅45～65cm、厚さ７～11cmを測る。当該横穴墓から出土している須恵器（第164図）は出雲５期のものである。



第161図　神門横穴墓群遺構実測図6（S＝1/40）〔原田原図〕

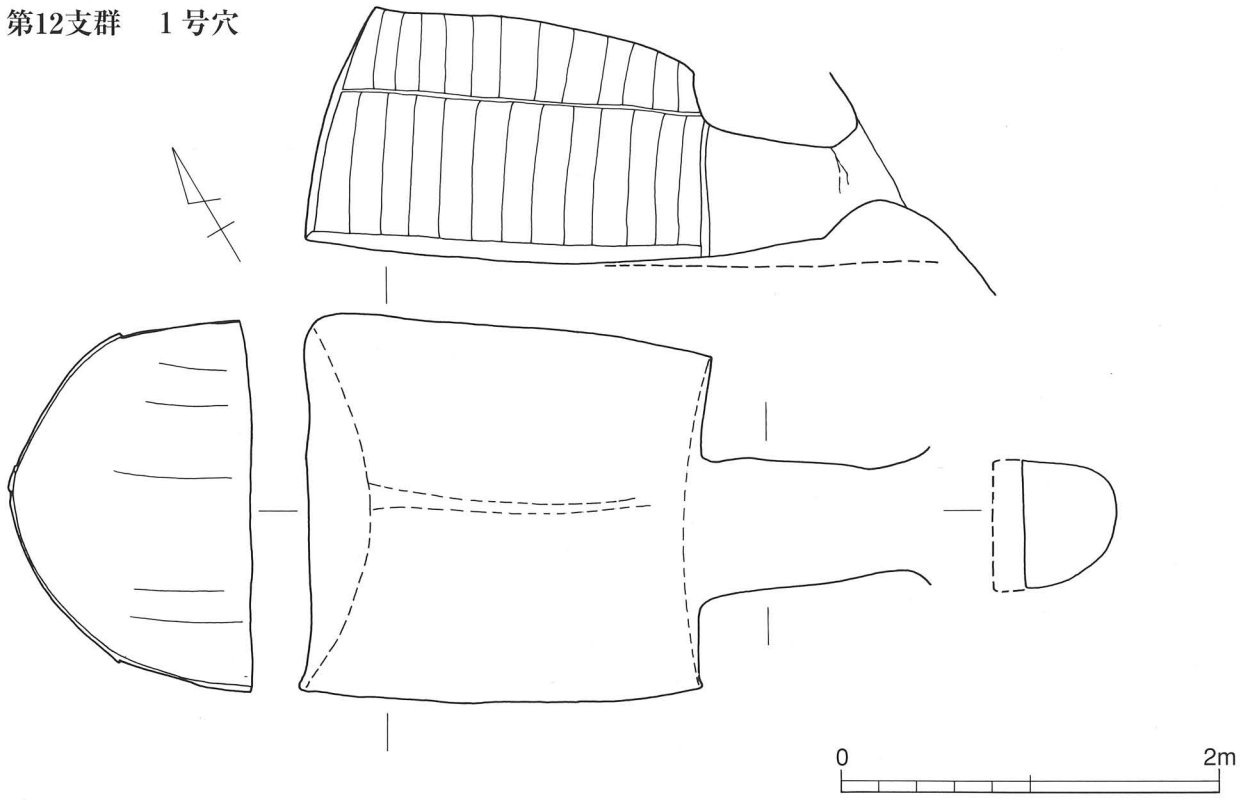


第162図　神門横穴墓群遺構実測図７（Ｓ＝１/４０）〔原田原図〕

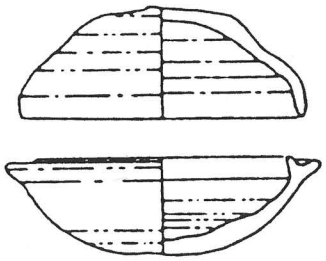
第７支群（マキチン坂横穴墓群）

当該支群は、小さな谷を隔てて第６支群と向かい合わせるように造墓されている。標高10～13m内で、１・２・４号穴は１m間隔で並び、３号穴は若干南の高い位置を占める。３号穴の左奥は広がっており、５号穴と繋がるようである。その間隔で５号穴の開口部を探したが付近は伐採木が多く見つけることが出来なかった。また１号穴と２号穴はそれぞれの玄室側壁が全開状態で繋がっている。

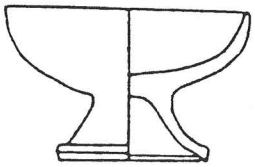
第12支群　1号穴



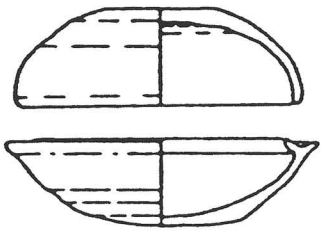
第163図　神門横穴墓群遺構実測図８（Ｓ＝１／40）〔西尾原図〕



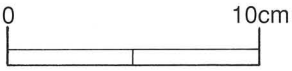
第６支群　９号穴

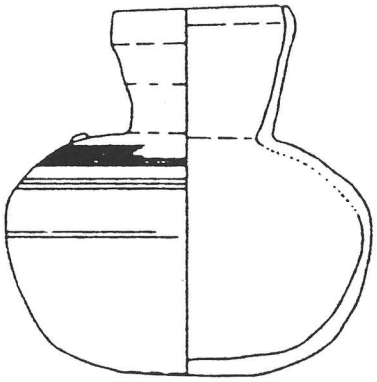


第６支群　９号穴



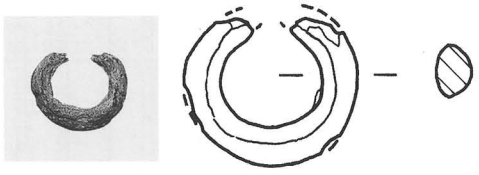
第10支群　H-１号穴

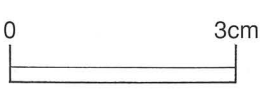




第６支群　不明

第８支群　１号穴





第164図　神門横穴墓群出土遺物実測図（土器Ｓ＝１／３　耳環Ｓ＝１／１）
〔第６支群：原田原図　第10支群：西尾原図〕

表５－１　神門横穴墓群一覧表

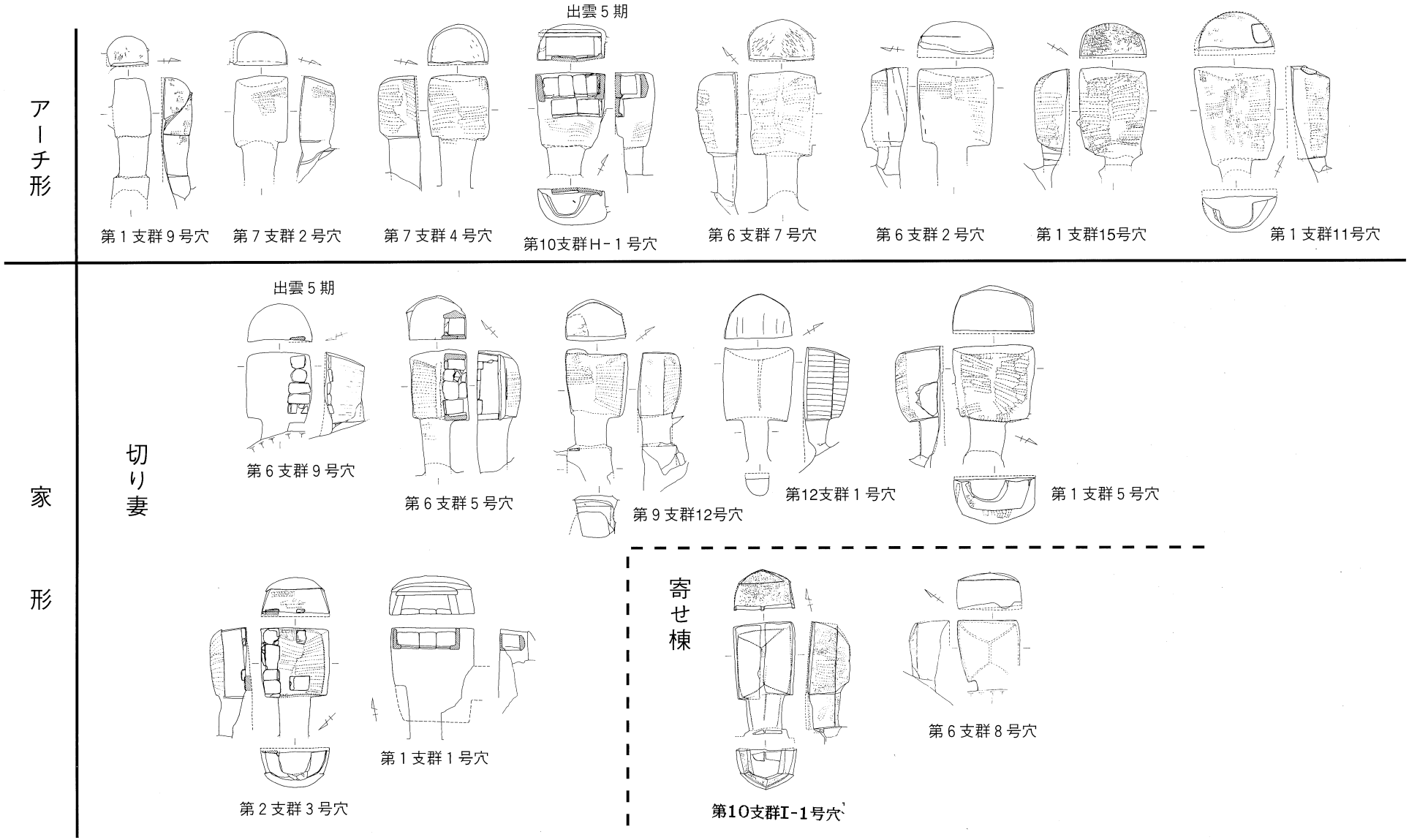
	遺構計測値（cm）		玄　室			副葬品	備　　考
	羨　道	玄　室	平面形態	天井形態	特　　徴		
第１支群　１号穴（福知寺山）		現存長 200、奥幅 245、奥壁高 85		切妻家形	組合式家形石棺、界線明瞭、軒を奥壁と両側壁に造り出す、棟線やや不明瞭		現在崖面 遺構実測図あり
２号穴							土砂流入のため詳細不明
３号穴		長さ 145、奥幅 120、右袖 6	縦長長方形	アーチ形			人骨残存 土砂流入
４号穴							土砂流入のため詳細不明 ４・５号穴と穴で繋がっている
５号穴	長さ 110、幅 100	［玄門幅 110］長さ 230、奥幅 230、前幅 190（右袖 50・左袖 25）、奥壁高 125	正方形	切妻家形	界線明瞭、軒を前壁と両側壁に造り出す、肋骨状加工（凹凸は削り丁寧）		３・５号穴と穴で繋がっている 遺構実測図あり
６号穴		長さ 200、奥幅 120、奥壁高 50	縦長長方形（無袖）	アーチ形	両側壁と天井が連続する明瞭な平刃状加工痕		３・４号穴と穴で繋がっている
７号穴		奥幅 179、中幅 163		家　形	界線明瞭、軒を奥壁と両側壁に造り出す、天井は丸い		玄室奥半部のみ残存 ７号穴と穴で繋がっている
８号穴			横長長方形？		玄室は第１支群中最大規模		土砂流入のため詳細不明 ６号穴と穴で繋がっている
９号穴	［前庭幅 110、羨門幅 85］長さ 115、幅 85 ～ 95	［玄門幅 95］長さ 170、奥幅 95、前幅 110（右袖 5・左袖 7）、奥壁高 75	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形	界線やや不明瞭、天井に平刃状加工痕（凹凸は削り落とす）		１０号穴と穴で繋がっている 遺構実測図あり
１０号穴				切妻家形			奥壁の一部残存
１１号穴	幅 90	［玄門幅 105］長さ 275、奥幅 250、前幅 170（右袖 45、左袖 20）、奥壁高 110	縦長長方形	アーチ形	界線は明瞭 肋骨状加工		玄室内には石床の材が散乱、８号穴と穴で繋がっている、遺構実測図あり
１２号穴				家　形			土砂流入のため詳細不明
１３号穴		奥行 195、左袖 10	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形	加工痕あり		土砂流入のため詳細不明 １３号穴と穴で繋がっている
１４号穴	幅 73、高さ 65	長さ 191、幅 133、高さ 82、右袖 28、左袖 9	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形	界線やや明瞭、奥壁が横長楕円形を呈する、天井に平刃状加工痕		１２号穴と穴で繋がっている 土砂流入
１５号穴	幅 75	［玄門幅 80］長さ 265、奥幅 180、前幅 160（右袖 20・左袖 55）、奥壁高 100	縦長長方形（右袖不明瞭）	アーチ形	界線明瞭、肋骨状加工、天井頂部は棟線のよう		開口部が右寄り 遺構実測図あり
１６号穴							土砂流入のため詳細不明
１７号穴				家　形？	界線あり		土砂流入のため詳細不明、玄室の半分崩壊、マウンドの可能性あり
１８号穴							土砂流入のため詳細不明
１９号穴	［開口幅 50］				造墓途中段階？		土砂流入のため詳細不明
第２支群　１号穴（山本陽一郎宅裏）	長さ 60、高さ 44	［玄門幅 63］長さ 190、奥幅 167、前幅 148、左袖 13	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形	界線やや不明瞭 天井に平刃状加工痕		開口部狭小
２号穴	長さ 70	［玄門幅 71］長さ 120、奥幅 166	横長長方形?	アーチ形	界線明瞭 天井に加工痕		開口部狭小 現在玄室のみ残存
３号穴	長さ 120、幅 96	［玄門幅 96］長さ 203、奥幅 200、前幅 182（右袖 40・左袖 35）、奥壁高 85、高さ 110	正方形	切妻家形	石床（２個体？）、軒を前奥壁と両側壁に造り出す、肋骨状加工		４号穴と穴で繋がっている 遺構実測図あり
４号穴	長さ 127、幅 94、高さ 69	長さ 200、奥幅 187、右袖 25、左袖 37、奥壁高 71、高さ 93	縦長長方形	アーチ形			３号穴と穴で繋がっている
５号穴	長さ 40	［玄門幅 58］長さ 168、奥幅 106、前幅 70（右袖 6.8・左袖 4.8）	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形	天井に加工痕残存		土砂流入
６号穴	長さ 62、幅 51	［玄門幅 51］長さ 118		アーチ形	界線やや不明瞭 天井に加工痕		土砂流入のため詳細不明
７号穴	［開口幅 62］長さ 105、幅 62 ～ 101	［玄門幅 101］長さ 198、奥幅 141、前幅 119（右袖 6・左袖 12）、高さ 72	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形	界線は明瞭 天井に加工痕		
８号穴							土砂流入のため詳細不明
９号穴	右長 50、左長 46、幅 65	長さ 168、奥幅 133、前半部幅 106、右袖 6、左袖 18	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形	天井に加工痕		開口部狭小

表5－2　神門横穴墓群一覧表

	遺構計測値（cm）		玄室			副葬品	備考
	羨道	玄室	平面形態	天井形態	特徴		
第2支群　10号穴（山本陽一郎宅裏）							土砂流入のため詳細不明
第3支群　1号穴（神田工業倉庫裏）							土砂流入のため詳細不明
2号穴			縦長長方形	アーチ形	界線明瞭		開口部狭小
3・4号穴							土砂流入のため詳細不明
5号穴				アーチ形			玄室奥半部のみ残存
6号穴							玄室のみ残存 土砂流入のため詳細不明
7号穴				アーチ形	界線はやや明瞭		玄室のみ残存 土砂流入
8号穴							土砂流入のため詳細不明
第4支群　1号穴（三成範夫宅裏）	幅50	長さ220、奥幅110、高さ60	縦長長方形	アーチ形		須恵器瑞［島根大学所蔵］	立入禁止のため詳細不明
2～5号穴							立入禁止のため詳細不明
第5支群　1号穴（東谷北）		現存長115、奥幅70	縦長長方形	アーチ形			玄室のみ残存 土砂流入のため詳細不明
第6支群　1号穴（東谷）	［開口幅71］	現存長90					土砂流入のため詳細不明
2号穴	幅88、高さ65	［玄門幅85、玄門高65］長さ245、奥幅221、前幅195（右袖58・左袖38）	縦長長方形	アーチ形	石床？、界線やや不明瞭、肋骨状加工		遺構実測図あり
3号穴	［羨門幅49］長さ61、幅49～65	［玄門幅65］長さ190、奥幅202、前幅165（右袖69・左袖31）、高さ96	正方形	切妻家形	界線やや明瞭、側壁に軒線あり、奥壁は直立、天井に加工痕		玄室のみ残存 4号穴と穴で繋がる
4号穴		長さ210以上、幅105	縦長長方形	アーチ形	天井に加工痕残存		玄室のみ残存、土砂流入のため詳細不明、3号穴と穴で繋がる
5号穴	長さ165、幅91、高さ98	［玄門幅90、玄門高100］長さ220、奥幅170、前幅165（右袖48・左袖16）、奥壁高95、高さ125	縦長長方形	切妻家形	組合式家形石棺、界線明瞭、側壁に軒線あり、奥壁は直立、肋骨状加工		遺構実測図あり
6号穴	［開口部高58］長さ94	［玄門幅78］長さ205、幅170～180	縦長長方形（左袖短い）	アーチ形	界線やや不明瞭 天井に加工痕		開口部が左寄り 7号穴と穴で繋がる
7号穴	長さ155、幅85、高さ55～65	［玄門幅95、玄門高65］長さ260、奥幅190、前幅160（右袖27、左袖35）、奥壁高90、高さ115	縦長長方形	アーチ形	界線やや不明瞭 肋骨状加工		6号穴と穴で繋がる 遺構実測図あり
8号穴	現存長22、幅93	長さ175、奥幅185、奥壁高90	正方形	寄棟家形	天井に10cm前後の加工痕		遺構実測図あり 草深く近づけない
9号穴	幅80	［玄門幅85］長さ200、奥幅190、前幅175（右袖45・左袖39）、高さ115	正方形	アーチ形	石床 天井に加工痕	須恵器蓋坏・高坏、刀子、金環（出雲5期）［竹崎三子雄氏所蔵］	遺構実測図あり 現在草深く近づけない
第7支群　1号穴（マキチン坂）	幅93～133	［玄門幅133］右側壁長134、左側壁長119、奥幅158、奥壁高81	横長長方形	アーチ形	両側壁の長さ違う、界線やや明瞭、天井が低い		右側壁が全開で2号穴と繋がる
2号穴	長さ101、幅85～105	［玄門幅108］長さ190、奥幅145、前幅145（右袖21・左袖21）、奥壁高115	縦長長方形	アーチ形	界線は明瞭 天井に平刃状加工痕		左側壁が全開で1号穴と繋がる 遺構実測図あり
3号穴	長さ63	［玄門幅81］右側壁長193、左側壁長201、奥幅193、前幅122（右袖25・左袖16）、高さ96	正方形	アーチ形	両側壁の長さ若干違う 天井に加工痕		5号穴と穴で繋がる 土砂流入
4号穴	長さ150、幅85～110 高さ90	［玄門幅110］長さ207、奥幅169、前幅155（袖20）、奥壁高105	縦長長方形	アーチ形	界線やや不明瞭 肋骨状加工（幅10cm前後）		遺構実測図あり
5号穴				アーチ形			開口部は所在不明 3号穴と穴で繋がる
第8支群　1号穴（マキチン坂裏）		長さ195、幅245、右袖40、左袖10、奥壁高85	横長長方形	切妻家形	界線明瞭 軒を奥壁と右側壁に造り出す	耳環［今回採取出雲市教委所蔵］	開口部は流土で塞がる 2号穴と穴で繋がる
2号穴		長さ235、幅230	正方形	アーチ形			玄室のみ残存、1号穴と穴で繋がる 流土が半分入る
3号穴			横長長方形	アーチ形			土砂流入のため詳細不明

表５－３　神門横穴墓群一覧表

	遺構計測値（cm）		玄　室			副葬品	備　　考
	羨　道	玄　室	平面形態	天井形態	特　　徴		
第９支群　１号穴（梶谷徳次宅裏）							奥壁のみ残存
２号穴		長さ 214、奥幅 80、中幅 92、前幅 77、高さ 88	縦長長方形	アーチ形			玄門は破壊され、玄室のみ残存
３号穴	［開口幅 98、開口高 95］	長さ 194、奥幅 158	歪な縦長長方形	アーチ形			玄門が右寄り、流入土のため開口部付近の様相は不明
４号穴	［羨門高 82］長さ 50	長さ 166、奥幅 176、前幅 130（右袖 22・左袖 30）	横長長方形	アーチ形	界線不明瞭、両側壁に10cm幅の平刃状加工痕、天井崩壊		
５号穴		［開口幅 101、開口高 70］長さ 200、奥幅 142	縦長長方形	アーチ形	界線不明瞭		開口部崩壊し土砂流入
６号穴	［羨門高 77］長さ 60	長さ 198、奥幅 135、前幅 84（右袖 20）、高さ 81	縦長長方形（左袖無）	アーチ形	界線不明瞭、10 ～ 20cm 幅の円刃状の加工痕がよく観察される		
７号穴	［羨門幅 72］長さ 68	長さ 208、奥幅 185、前幅 199（右袖 69・左袖 43）高さ 114	縦長長方形（正方形に近い）	アーチ形	幅 10cm の平刃状加工痕が壁面から天井中央前寄りへ行われる		羨門から玄門間の天井崩壊
８号穴	［開口幅 80、開口高 88］長さ 46、幅 80 ～ 105	［玄門幅 105］長さ 218、奥幅 170、前幅 157（右袖 38・左袖 14）、奥壁高 90、高さ 98	縦長長方形	アーチ形	界線やや明瞭、左側壁に幅10cmの平刃状加工痕あり		
９号穴	［羨門高 58］長さ 52	［玄門幅 61］長さ 180、幅 93、高さ 62	縦長長方形（無袖）	アーチ形	界線やや不明瞭		前庭部から残存
１０号穴							土砂流入し詳細不明
１１号穴		長さ 203、奥幅 123、前幅 120（右袖 25・左袖 29）	縦長長方形	アーチ形	天井に棟状のラインあり		玄室のみ残存
１２号穴	［前庭幅 130、羨門幅 95］長さ 80、高さ 94	［玄門幅 100、玄門高 95］長さ 180、奥幅 184、前幅 155（右袖 48・左袖 18）、奥壁高 90、高さ 120	正方形（左袖短い）	切妻家形	両側壁に軒線あり、天井に棟線あり、肋骨状加工		前庭部から完全に残存 遺構実測図あり
１３号穴	［開口幅 65、開口高 60］長さ 41 ～ 50	右側壁長 168、左側壁長 187、奥幅 133、前幅 106（右袖 8・左袖 18）、高さ 72	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形	両側壁の長さ違う 加工痕不明瞭		小さな前庭部と小さな羨道部
１４号穴	［開口幅 95］長さ 30	長さ 190、右袖 22	縦長長方形（左袖無）	アーチ形	肋骨状加工		土砂流入のため詳細不明
１５号穴		長さ 188、前幅 98（右袖 10・左袖 18）	縦長長方形（両袖短い）	アーチ形			土砂流入のため詳細不明
１６号穴			縦長長方形	アーチ形	肋骨状加工		土砂流入のため詳細不明
１７号穴							玄室奥 100cm 程度残存 崖面のため詳細不明
１８号穴							崖面のため詳細不明
１９号穴			縦長長方形	切妻家形	奥壁に軒あり 肋骨状加工		土砂流入のため詳細不明
第 10 支群　H-１号穴（小浜山）	［羨門幅 90］長さ 80、幅 90 ～ 110	［玄門幅 110］長さ 235、奥幅 210、前幅 145（袖 15）奥壁高 120	縦長長方形	アーチ形	組合式家形石棺・石床、天井前半肋骨状加工、天井奥半溝状加工痕	須恵器蓋坏（出雲５期）［出雲市教委所蔵］	遺構実測図あり
Ｉ-１号穴	［羨門幅 95］長さ 100、幅 95 ～ 110	［玄門幅 110、玄門高 105］長さ 225、奥幅 175、前幅 160（右袖 20・左袖 25）、奥壁高 70、高さ 120	縦長長方形	寄棟家形	中央溝・周溝、界線明瞭、４壁・羨道部両壁に軒あり、天井に棟あり、肋骨状加工（平刃状加工痕幅 8cm,凹凸は削り丁寧）		遺構実測図あり
Ｉ-２号穴		長さ 160、幅 103	縦長長方形（左袖無？）	アーチ形	肋骨状加工？		開口部に土砂堆積のため詳細不明
Ｉ-３号穴							横穴墓の可能性あり 内部は岩盤崩落
Ｊ-１号穴							土砂流入のため詳細不明
Ｊ-２号穴							土砂流入のため詳細不明
第 11 支群　１号穴（小浜寺山）		長さ 140 以上、前幅 90	縦長長方形（無袖）	アーチ形			奥半部は大きく破壊、床面の溝も撹乱
２号穴			縦長長方形	アーチ形			玄室のみ残存 右奥は１号穴からの破壊で貫通
第 12 支群　１号穴（真幸ヶ丘）	［開口幅 55］長さ 110、幅 55 ～ 75	［玄門幅 75］長さ 206、奥幅 200、前幅 180（右袖 50・左袖 45）、高さ 130	正方形	切妻家形	両側壁に軒線あり、天井に棟線あり、肋骨状加工		開口部狭小 遺構実測図あり



第165図　神門横穴墓群遺構一覧図（S＝1／160）

写1　第1支群5号穴　奥壁右

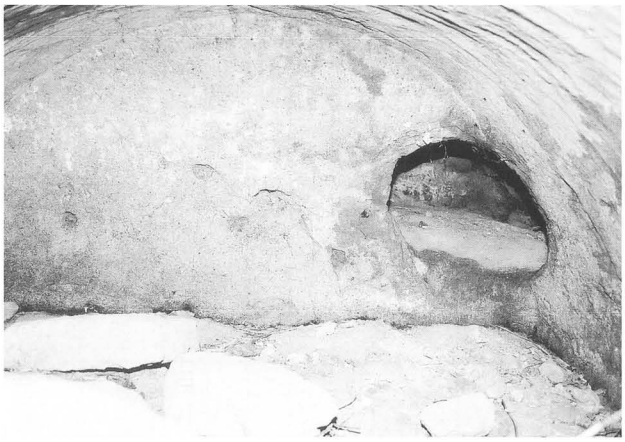
写2　第1支群5号穴　前壁

写3　第1支群5号穴　天井前側

写4　第1支群6号穴　前壁

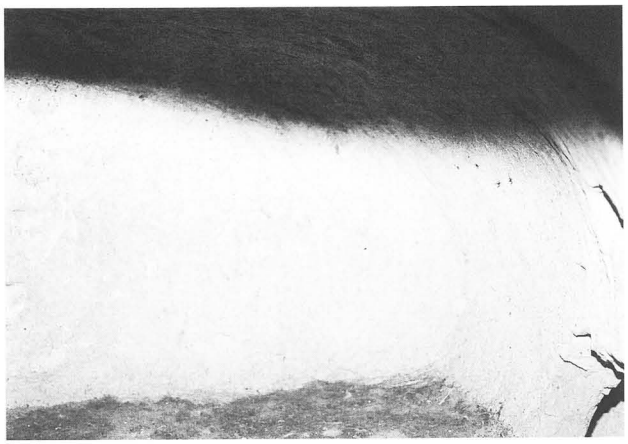
写5　第1支群9号穴　奥壁

写6　第1支群9号穴　前壁



写7　第1支群11号穴　奥壁

写8　第1支群11号穴　前壁

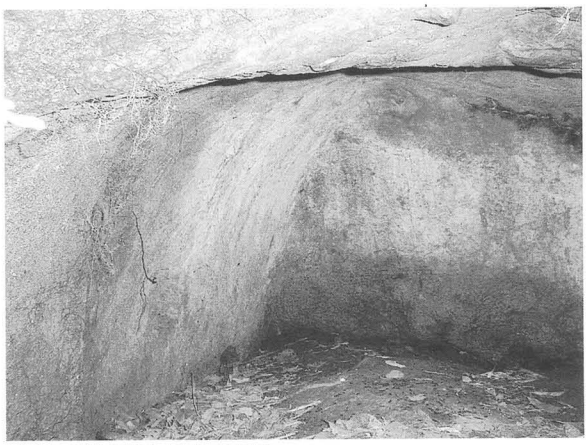


写9　第1支群14号穴　奥壁右

写10　第1支群15号穴　右側壁～天井

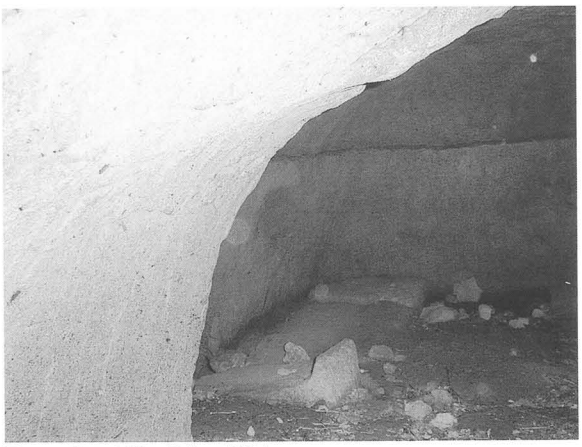
写11　第2支群1号穴　奥壁左

写12　第2支群1号穴　奥壁右

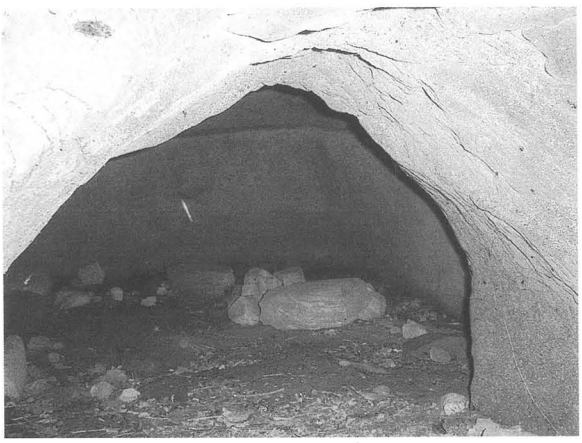


写13　第2支群2号穴　奥壁左

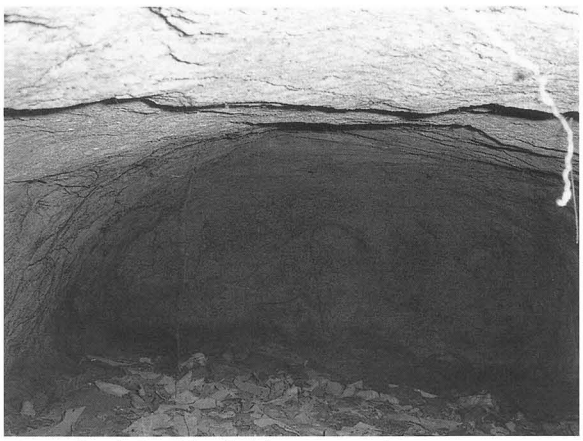
写14　第2支群2号穴　奥壁右



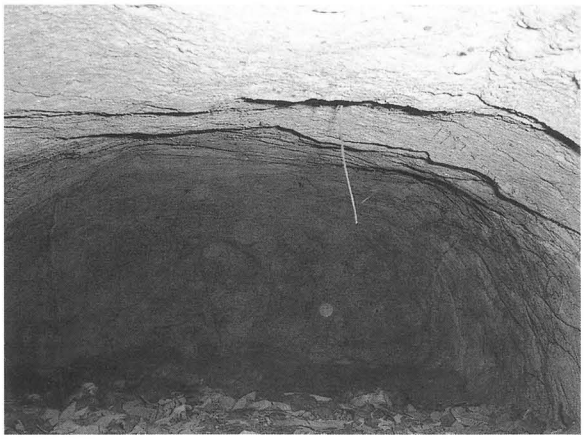
写15　第2支群3号穴　奥壁左



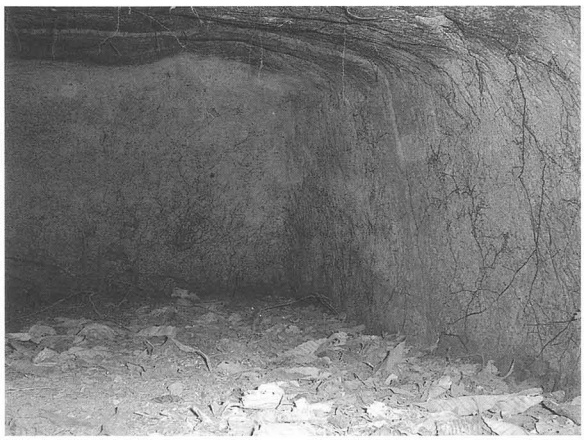
写16　第2支群3号穴　奥壁右



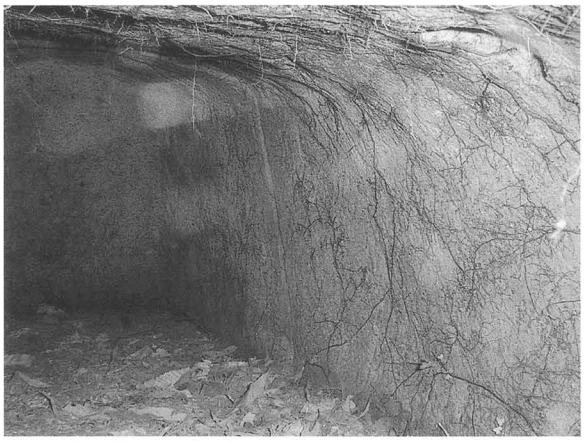
写17　第2支群6号穴　奥壁左



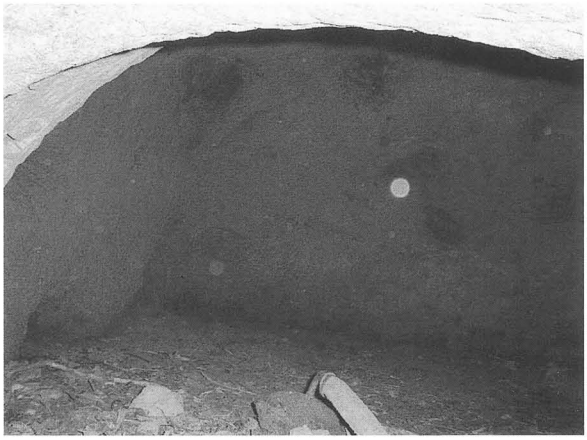
写18　第2支群6号穴　奥壁右



写19　第2支群7号穴　奥壁右



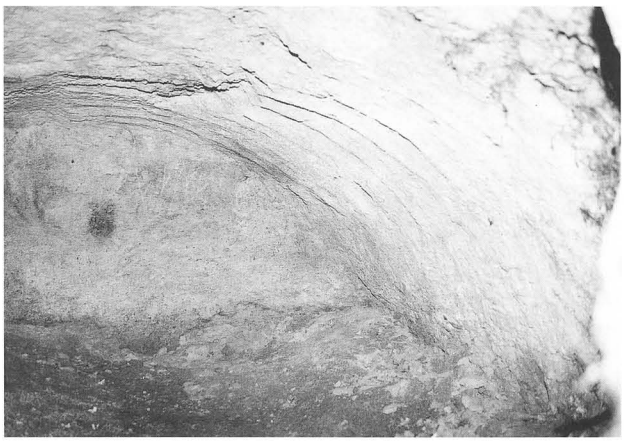
写20　第2支群7号穴　右側壁



写21　第3支群2号穴　奥壁左

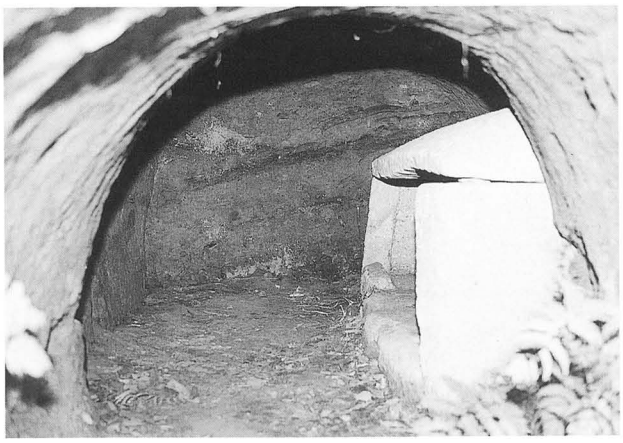
写22　第3支群7号穴　奥壁

写23　第6支群2号穴　奥壁左

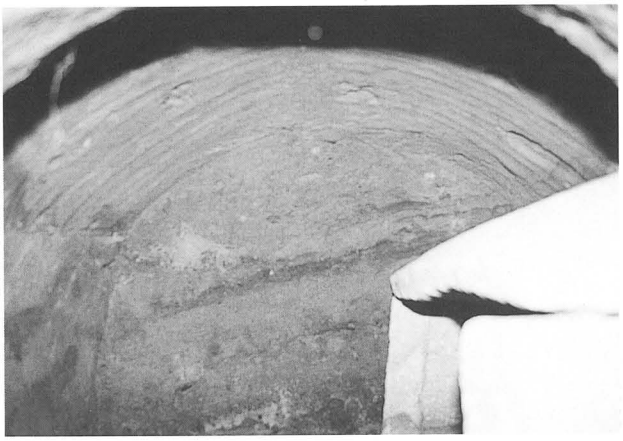


写24　第6支群2号穴　奥壁右

写 25　第 6 支群 3 号穴　奥壁左



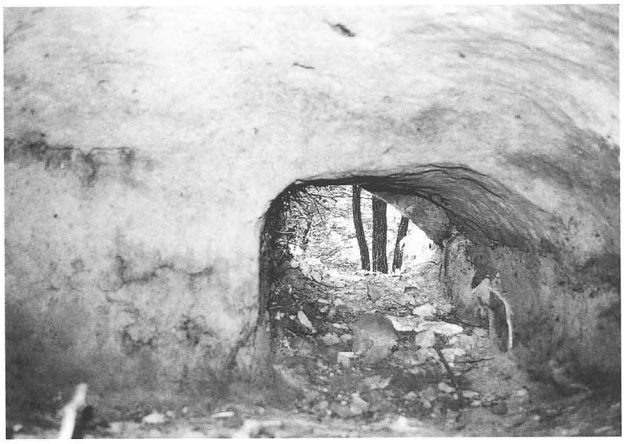
写 26　第 6 支群 5 号穴　家形石棺



写 27　第 6 支群 5 号穴　天井

写 28　第 6 支群 5 号穴　前壁～羨道部

写 29　第 6 支群 6 号穴　奥壁左



写 30　第 6 支群 6 号穴　前壁

写 31　第 6 支群 7 号穴　奥壁右

写 32　第 6 支群 7 号穴　前壁

写33　第7支群1号穴　奥壁右

写34　第7支群1（左）・2（右）号穴

写35　第7支群2号穴　奥壁

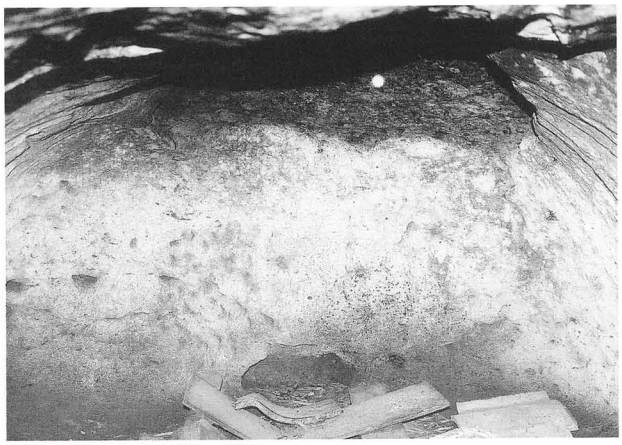
写36　第7支群4号穴　奥壁

写37　第8支群1号穴　奥壁左

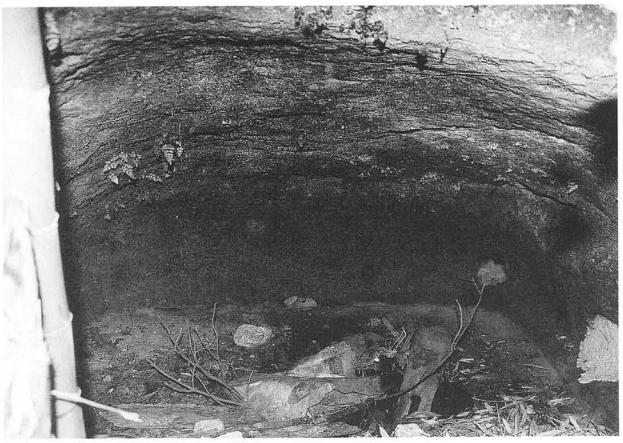
写38　第8支群1号穴　前壁右

写39　第9支群2号穴　奥壁

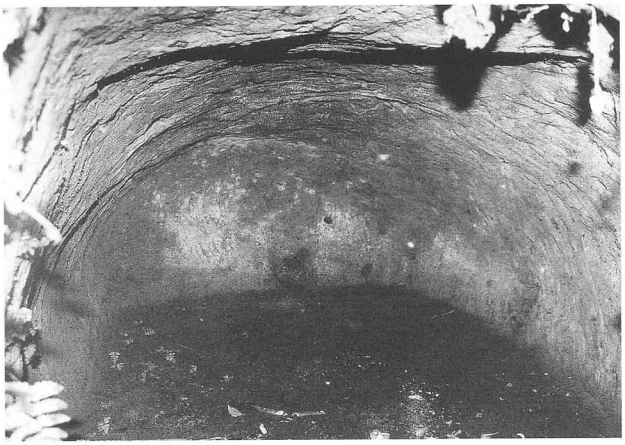
写40　第9支群3号穴　奥壁



写 41　第 9 支群 4 号穴　奥壁

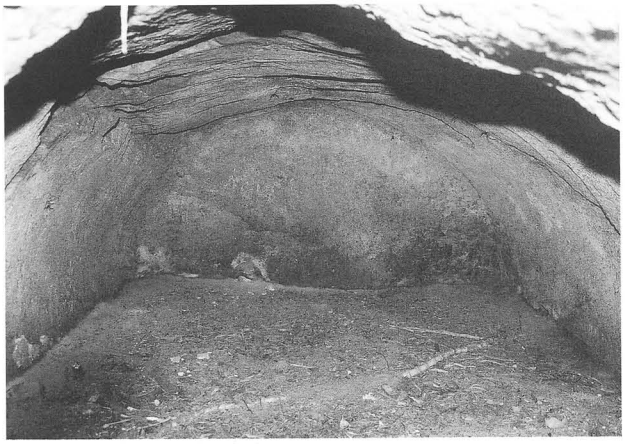


写 42　第 9 支群 5 号穴　奥壁



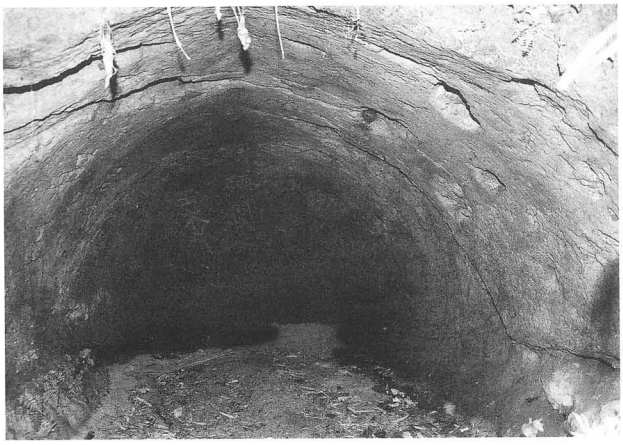
写 43　第 9 支群 6 号穴　奥壁

写 44　第 9 支群 7 号穴　奥壁

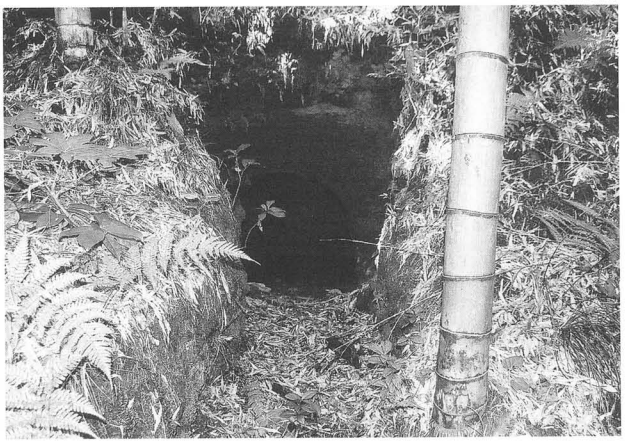


写 45　第 9 支群 8 号穴　奥壁

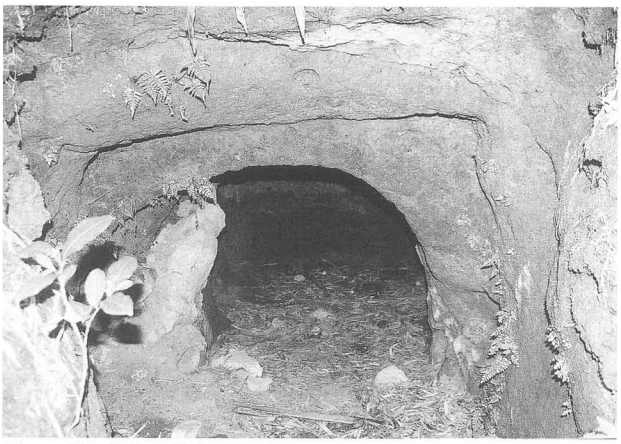
写 46　第 9 支群 8 号穴　前壁



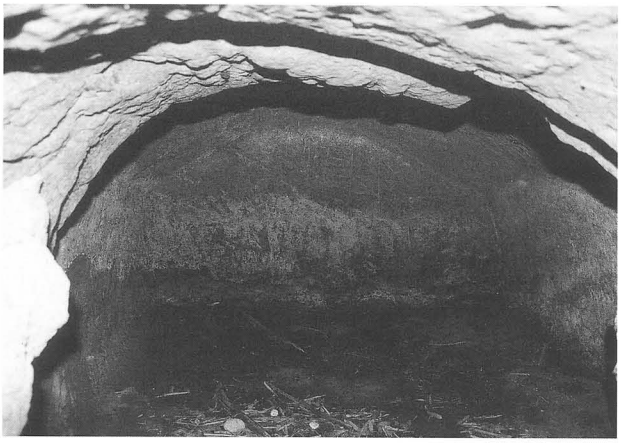
写 47　第 9 支群 11 号穴　奥壁



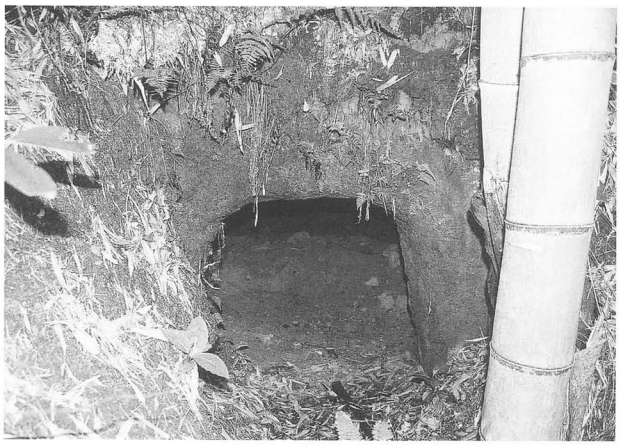
写 48　第 9 支群 12 号穴　開口部



写 49　第 9 支群 12 号穴　開口部

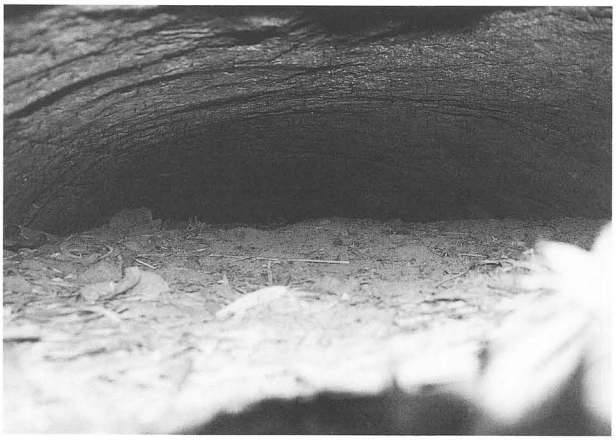


写 50　第 9 支群 12 号穴　奥壁

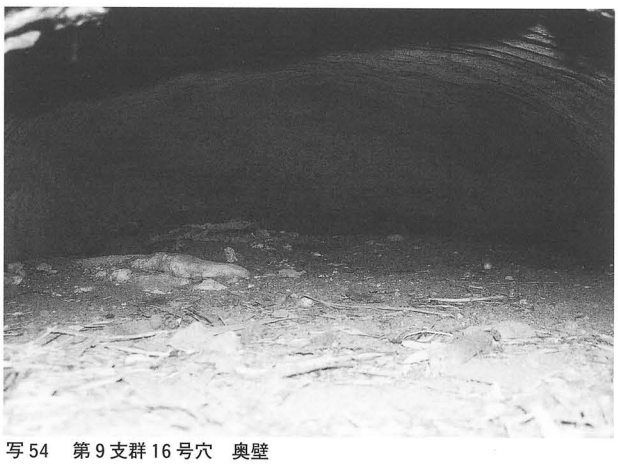


写 51　第 9 支群 13 号穴　開口部

写 52　第 9 支群 13 号穴　奥壁～天井

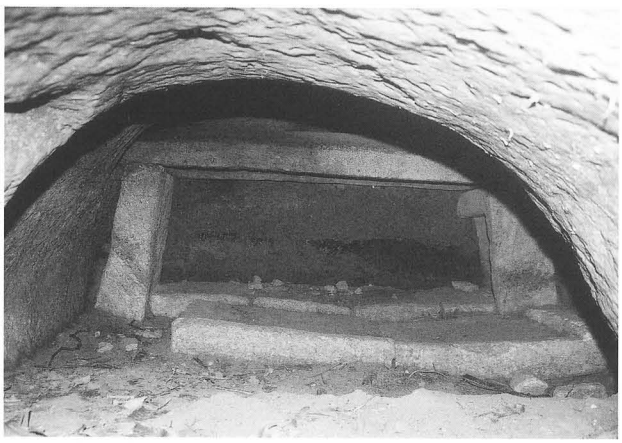


写 53　第 9 支群 14 号穴　天井

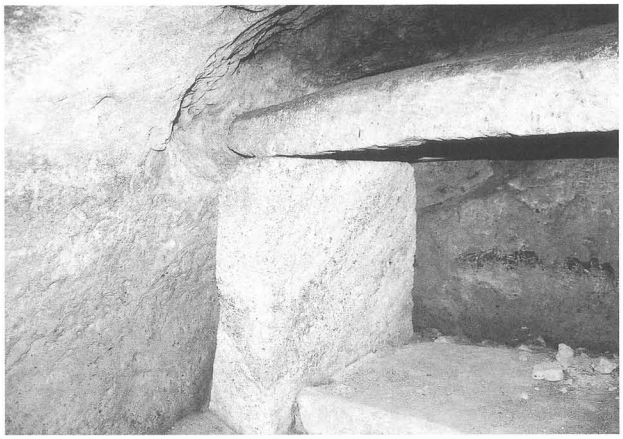


写 54　第 9 支群 16 号穴　奥壁

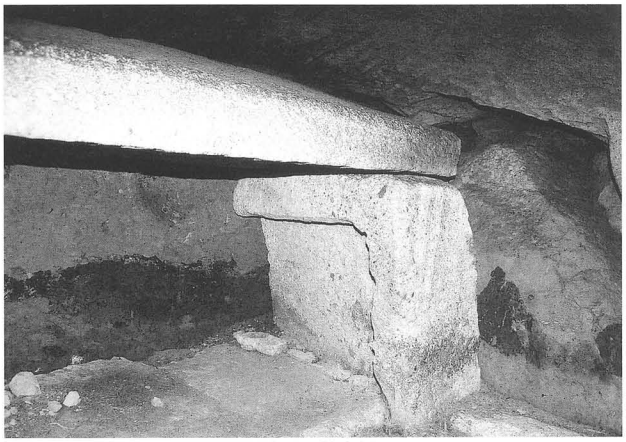
写 55　第 10 支群 H－1 号穴　開口部



写 56　第 10 支群 H－1 号穴　家形石棺と石床

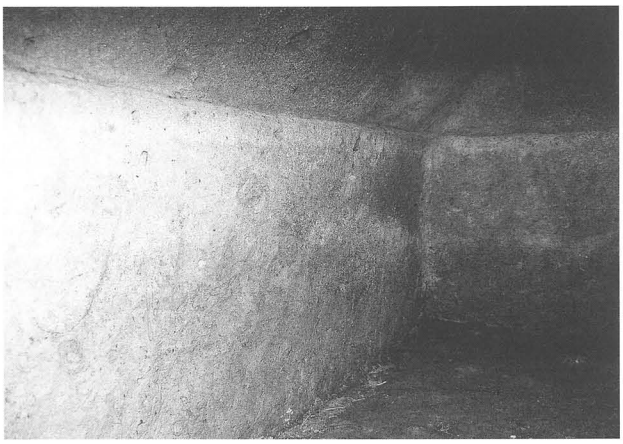


写57　第10支群H-1号穴　家形石棺左側

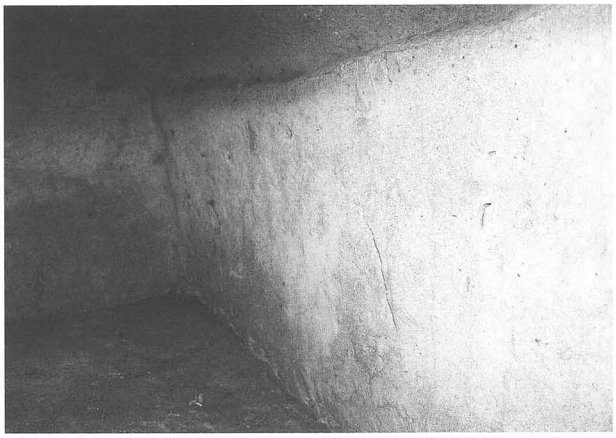


写58　第10支群H-1号穴　家形石棺右側

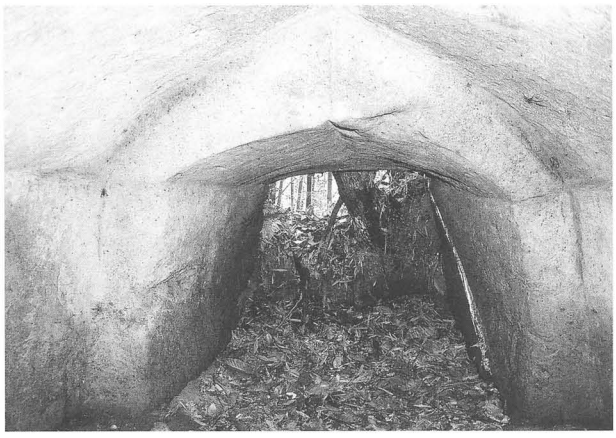
写59　第10支群Ⅰ－1号穴　奥壁



写60　第10支群Ⅰ－1号穴　左側壁～奥壁

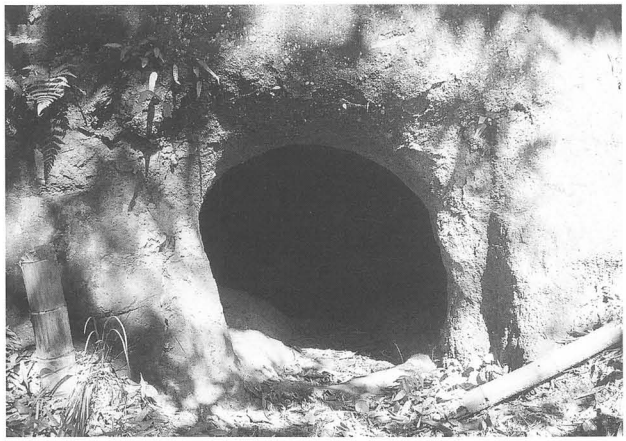


写61　第10支群Ⅰ－1号穴　右側壁～奥壁



写62　第10支群Ⅰ－1号穴　前壁

写63　第10支群Ⅰ－2号穴　奥壁



写64　第11支群1号穴　開口部

第８支群（マキチン坂裏横穴墓群）

当該支群は今回の分布調査により発見した支群で、今回３基を確認した。標高10～13m内で、第７支群とほぼ同レベルに分布している。１・２号穴は2.5m離れて並んで位置するが、３号穴は２号穴から６～７m南の若干高位に所在する。１号穴奥壁付近の中央から耳環を１点（第164図）採取した。かなり風化しておりメッキは不明である。軸芯があり、長さ2.0cm、幅2.3cm、厚さ0.65cmを測る。

第９支群（梶谷徳治宅裏横穴墓群）

当該支群は、梶谷宅裏から南へ続く丘陵裾に標高８～15mにかけて分布する。今回19基を確認した。北側丘陵先端部から17～19号穴がやや高所に４～５m間隔で並んでおり、梶谷宅を挟んで１～３号穴が丘陵裾に並ぶ。丘陵裾を40m強奥へ入ると４・５号穴が並んで所在し、裾を25m奥へ入ると６～８・16号穴が段違いの交互に並ぶ。９～15号穴は丘陵を少し上がり15m以上奥へ入ると小尾根を挟み連続する。以上のように当該支群は５つの小支群に分かれている。また17号穴は梶谷宅が作られる際に前半部を壊されており、この時に破壊消滅した横穴墓もあったと考えられる。

また梶谷氏には、17号穴の真下に自身が造られた貯蔵穴を案内して頂いた。縦長長方形・アーチ形の見事な横穴擬きであった。荒堀をツルハシ、調整を鍬などで行ったそうである。入り口には刳り込みを造り、板で塞いであった。

当該横穴墓は丘陵裾野に所在することもあり、後世に改築されたり落書きをされた痕跡が多くある（写47・50）。４・５・19号穴は貯蔵穴として最近まで利用されていた痕跡があり、19号穴は開口部に戸口を付けるために削られたとのことである[註9]。

第10支群（小浜山横穴墓群）

当該支群は、本調査を行ったＡ～Ｇ群の他に、６基を確認した。Ｃ群から東に標高13～15m内で横穴墓が４穴確認できた。Ｃ-１号穴から３、４m位東に存在する横穴墓をＨ群とし、Ｈ-１号穴とした。それから30m東へ往ったところへ段を違えて存在する群をＩ群とした。そこに位置するＩ-３号穴は開口部内に崩壊した岩盤が落ち込んでおり、それが幅広く崩壊しているので１穴又は２穴存在するようでもある。あるいは単に岩盤がずれて空洞が出来ただけのものであるかもしれない。それから約10m東にＩ-１・２号穴が存在する。Ｂ-４号穴の北約５mに７～８m下がった地点で２穴（図版90）確認した。それをＪ群とする。

Ｈ-１号穴は神門横穴墓群内で組合式家形石棺と石床の２基が設置された唯一の横穴墓である。家形石棺は奥壁沿いに設置され、石床はその手前に右側を合わせて並べている。石棺の蓋石は、断面半円形の玄室内には収まりきれず、蓋石が当たる部分のみ両側壁を外へ広げて棚状に造り出している。家形石棺は床石に４枚の切石を並べ、右側の床石の短側側と奥壁側には拳大の小礫を詰めている。右短側側には断面をＬ字状に縁を作り出した石を左短側側には板状の石を立て、その上に頂部に約10cm幅の平坦面をもつ屋根形の１枚石を載せている。最大高95cm、床石長160cm、床石幅55～60cm、蓋石長185cm、蓋石幅70cmを測る。石床は２枚の切石を、右側はＬ字状に２辺に縁取りを作り出し、左側は１辺に縁を作り出している。長さ150cm、幅50～60cmを測る。当該横穴墓の天井の加工は、埋

葬施設のある奥半部が幅１cm、深さ0.8cmの細くて深い溝状の加工痕を前奥方向に施し、天井前半部は肋骨状の加工を施している。当該横穴墓から出土している須恵器蓋坏（第164図）は出雲５期のものである。

Ⅰ-１号穴は寄棟家形である。軒が明瞭で、羨道部の両側壁にまで軒を造り出している。今回の分布調査では確認できなかったが、第162図では閉塞石が確認されている。

第11支群（小浜寺山横穴墓群）

当該支群は、地蔵寺裏の小丘陵の中腹標高８m付近に２基存在する。開口部の距離は50cmしか離れていない。また比高差も70～80cmで、２号穴の方が高所に位置する。１号穴は奥半分を後世に破壊され、床面から下及び外へ上へと膨らむように攪乱されている。このために２号穴は右奥床面が１号穴から破壊されて、貫通している。１号穴の残存する床面には中央溝と見間違えるような幅50cmの溝状の攪乱も受けている。

第12支群（真幸ヶ丘横穴墓群）

当該支群は、１基のみ確認されている横穴墓である。第６支群から頂部を通って南側に下がった所に位置し、標高25m付近である。

以上12支群の概要を述べてきたが、流土のため進入できず開口部からの観察によるもの、進入できても流入土のため詳細な観察が不可能なもの、今回の分布調査では探索不可能のため昭和49年作成遺跡台帳カード及び平成３年踏査の調査記録に頼ったもの、また限られた時間内での分布調査であったため、詳細な記述をすることはできなかった。しかし今までの集積された記録を提示することは出来たと思う。また今回は出土遺物に当たることが出来なかった。今後の調査研究に期待したい。

第３節　神門横穴墓群の特徴

以上見てきたように、神門横穴墓群は、真幸ヶ丘丘陵西端から東端にかけ北面の丘陵斜面に現在12の支群に分かれた分布状況を呈している。ほとんどの横穴墓は、一覧表（表５）からも判るように、早くから開口していたため、遺物がほとんど残っていない。そのため遺物出土状況は明らかにはできず、各横穴墓の時期をおさえることはできない。

神門横穴墓群の玄室形態

第１支群は今回19基確認した。そのうち玄室の平面形態または天井形態が判明しているものは13穴である。平面形態は５号穴が正方形を呈し、８号穴が横長長方形の可能性をもつもので、あとの７穴は縦長長方形を呈している。そのうち１穴は無袖、３穴は両袖が短く、２穴は片袖が不明瞭である。また９号穴のように奥幅が95cmと１mにも満たない狭長な横穴墓が存在する反面、11号穴のように